

京都府遺跡調査報告集

第179冊

1. 木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事関係遺跡
木津川河床遺跡第32次
2. 向島宇治線地方道路交付金業務関係遺跡
茶壺蔵跡(創建)

2020

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 室町時代後半～末期遺構全景(東から)



(2) 鎌倉時代～室町時代遺構全景(東から)



(1) 地震痕跡全景(北から)



(2) 地震痕跡近景(東から)

序

今年度から文化財保護法の一部改正が施行され、文化財の保護とともにその活用が一層重視されます。京都府においても新しい総合計画が策定され、その基本計画の中で文化財の保存・継承・活用を進める具体的な方策が示されています。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、38年間にわたって埋蔵文化財の発掘調査を実施して、その調査成果を『京都府遺跡調査報告集』として刊行するとともに、速報展やセミナーなどを通じて公表してまいりました。

本書は、平成30～令和元年度に京都府流域下水道事務所、京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施した木津川河床遺跡、茶壺蔵跡(創建)の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された上記の各機関をはじめ、八幡市教育委員会、宇治市教育委員会、地元自治会などの関係各機関、ならびに調査にご参加、ご協力をいただきました多くの皆さまに厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。
 - (1)木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事関係遺跡
木津川河床遺跡第32次
 - (2)向島宇治線地方道路交付金業務関係遺跡 茶壺蔵跡(創建)

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
1	木津川河床遺跡第32次	京都府八幡市八幡菰池地内	平成30年12月1日～ 平成31年2月27日 平成31年4月8日～ 令和元年7月30日	京都府流域下水道事務所	高野陽子 岡崎研一
2	茶壺蔵跡(創建)	京都府宇治市宇治里尻地内	令和元年11月6日～ 12月10日	京都府山城北土木事務所	岩松 保

3. 上記2事業2遺跡は本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。
4. 本書で使用している座標は、木津川河床遺跡が日本測地系国土座標第Ⅵ座標系、茶壺蔵跡(創建)が世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。
5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。土層断面図の粒径区分は粒度標本を用いた。
6. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。
7. 現場写真は主として調査担当者が撮影した。遺物撮影は、調査課企画調整係田中 彰の指導の下、武本典子が撮影した。

本文目次

1. 木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事関係遺跡	
木津川河床遺跡第32次発掘調査報告	1
2. 向島宇治線地方道路交付金業務関係遺跡 茶壺蔵跡(創建)発掘調査報告	51

挿図目次

1. 木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事関係遺跡 木津川河床遺跡第32次	
第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図	3
第2図 久世郡列栗郷内里名配置図	4
第3図 門前町及び地籍復原図	5
第4図 調査地配置図	6
第5図 地区割り図	8
第6図 基本層位図	9
第7図 遺構配置図(第1面)	11
第8図 東壁断面図	12
第9図 南壁断面図(1)	13
第10図 南壁断面図(2)	14
第11図 南壁断面図(3)	15
第12図 南壁断面図(4)	16
第13図 溝状遺構 S D06北壁断面図(畔 S X19)	17
第14図 足跡平面図	19
第15図 遺構配置図(第3面)	20
第16図 遺構配置図(第4面)	21
第17図 遺物出土状況図	22
第18図 断ち割り位置図	23
第19図 西壁断面図	24
第20図 第4面断ち割り断面図	25
第21図 地震痕跡配置図及びボーリング調査位置図	26
第22図 地質断面図	27
第23図 出土遺物実測図(1)	29
第24図 出土遺物実測図(2)	30

第25図	出土遺物実測図(3)	-----	32
第26図	出土遺物実測図(4)	-----	33

2. 向島宇治線地方道路交付金業務関係遺跡 茶壺蔵跡(創建)

第1図	調査地位置図	-----	51
第2図	調査トレンチ配置図	-----	52
第3図	調査トレンチ平面図	-----	53
第4図	土層実測図	-----	54
第5図	出土遺物実測図	-----	55

付 表 目 次

1. 木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事関係遺跡 木津川河床遺跡第32次

付表1	洛南浄化センター敷地内発掘調査一覧表	-----	6
付表2	調査地域の地質構成表	-----	27
付表3	出土遺物観察表	-----	38

図 版 目 次

巻頭図版1 木津川河床遺跡第32次

- (1) 室町時代後半～末期遺構全景(東から)
- (2) 鎌倉時代～室町時代遺構全景(東から)

巻頭図版2 木津川河床遺跡第32次

- (1) 地震痕跡全景(北から)
- (2) 地震痕跡近景(東から)

1. 木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事関係遺跡 木津川河床遺跡第32次

図版第1	(1) 調査地(第1面)全景(上空から：下が北)
	(2) 調査地(第1面)全景(北から)
図版第2	(1) 畔S X19全景(北から)
	(2) 畔S X19近景(北から)

- 図版第3 (1) 畔S X19近景(南から)
(2) 畔S X19近景(南から)
- 図版第4 (1) 東壁堆積状況(西から)
(2) 東壁堆積状況(南西から)
- 図版第5 (1) 古銭出土状況(南から)
(2) 古銭出土状況(南から)
- 図版第6 (1) 調査地(第3面)全景(北西から)
(2) 調査地(第3面)全景(上空から：下が北)
- 図版第7 (1) 素掘り溝群(東部)全景(北から)
(2) 素掘り溝群(中央部)全景(北から)
- 図版第8 (1) 素掘り溝内遺物出土状況(南東から)
(2) 素掘り溝内遺物出土状況(南東から)
(3) 素掘り溝内遺物出土状況(南東から)
- 図版第9 (1) 下層包含層遺物出土状況(北から)
(2) 下層包含層遺物出土状況(西から)
(3) 下層包含層遺物出土状況(南から)
- 図版第10 (1) 下層包含層遺物出土状況(西から)
(2) 下層包含層遺物出土状況(西から)
(3) 下層包含層遺物出土状況(西から)
- 図版第11 (1) 東壁堆積状況(北西から)
(2) 西壁堆積状況(東から)
- 図版第12 (1) 断ち割り①堆積状況(北東から)
(2) 断ち割り①堆積状況(北東から)
- 図版第13 (1) 断ち割り②堆積状況(北東から)
(2) 断ち割り②堆積状況(南東から)
- 図版第14 (1) 断ち割り③堆積状況(北西から)
(2) 断ち割り③堆積状況(南西から)
(3) 島畑と素掘り溝群近景(北から)
- 図版第15 (1) 素掘り溝群(第4面)近景(西から)
(2) 素掘り溝群(第4面)近景(西から)
- 図版第16 (1) 島畑9上面噴砂検出状況(北から)
(2) 西壁で検出した液状化現象(東から)
- 図版第17 (1) 第4面噴砂検出状況(北から)
(2) 噴砂2近景(南から)
- 図版第18 (1) 噴砂4近景(南から)

(2)噴砂 1 近景(東から)

図版第19 (1)剥ぎ取り状況(南東から)

(2)AMS分析に伴うサンプル採取(南東から)

図版第20 (1)出土遺物 1 (鳥畑関係・室町時代遺物包含層)

(2)出土遺物 2 (鎌倉時代～室町時代遺構面)

図版第21 出土遺物 3 (古墳時代初頭遺物包含層)

図版第22 出土遺物 4 (古墳時代初頭遺物包含層)

2. 向島宇治線地方道路交付金業務関係遺跡 茶壺蔵跡(創建)

図版第 1 (1)調査地全景(西から)

(2)調査地全景(南東から)

(3)南トレンチ調査地全景(北から)

図版第 2 (1)北トレンチ調査地全景(南東から)

(2)北トレンチ調査地全景(北西から)

(3)北トレンチ断ち割り状況(南東から)

1. 木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事 関係遺跡 木津川河床遺跡第 32 次発掘調査報告

1. はじめに

本発掘調査は、木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事に伴い、京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施した。新名神高速道路建設工事や国道24号拡幅工事が進む南山城地域では、その道路沿いにさまざまな施設が建設されつつある。浄化センターでは、将来の浄化施設の不足が予想され、新たに水処理施設E系の建設が計画された。

調査地点は、木津川と宇治川に挟まれた浄化センター施設北側のグラウンド内である。昭和57年度から平成18年度にかけての調査成果から、浄化センター敷地内には中世の水田遺構のほか、弥生時代後期から古墳時代初頭と古墳時代後期の竪穴建物が見つかり、広範囲に展開する集落遺跡であることが確認されている。

発掘調査に際しては、京都府流域下水道事務所が盛り土等を掘削・搬出した。その後、発掘調査に着手し、平成30年度に室町時代の島畑関連遺構を、令和元年度に下層の室町時代から平安時代にかけての素掘り溝群や古墳時代初頭の遺物包含層、さらにその下層の地震痕跡の調査を実施した。発掘調査で出土した土器類は、整理箱約10箱を数える。

なお、調査に係る経費は京都府流域下水道事務所が全額負担した。

現地発掘調査及び整理作業時には、八幡市教育委員会をはじめ、当調査研究センター理事の京都大学名誉教授増田富士雄氏や、奈良文化財研究所の村田泰輔氏、京都大学防災研究所の釜井俊孝氏・土井一生氏のご協力とご指導を得た。記してお礼申し上げたい。

(岡崎研一)

【調査体制等】

平成30年度調査

現地調査責任者 調査課長 小池 寛

調査担当者 調査課課長補佐兼第2係長 中川和哉

同 副 主 査 岡崎研一

同 調 査 員 武本典子

調査場所 八幡市八幡菰池地内

現地調査期間 平成30年12月1日～平成31年2月27日

調査面積 3,000㎡

令和元年度調査

現地調査責任者 調査課長 小池 寛

調査担当者 調査課第2係長 高野陽子

同 副主査 岡崎研一

同 調査員 近藤 匠

現地調査期間 平成31年4月8日～令和元年7月30日

調査面積 3,000㎡

2. 位置と環境（第1～3図）

1) 地理的環境

八幡市は、京都府南西部に位置し、大阪湾から約37km上流にあたる。八幡市西側の標高142.5mの鳩ヶ峰を最高峰とする男山丘陵は、大阪府・奈良県・京都府の県境である生駒山系から連なる。洞ヶ峠以南を美濃山丘陵、以北を男山丘陵と呼称する。男山丘陵に対峙する形で天王山が位置し、その峡部に向かって京都府南部を流れる3河川が合流し、淀川となって大阪湾に注ぐ。三重県布引山地を源とし南山城地域を北流する木津川と、京丹波町を源とし亀岡市域・京都市域を流れる桂川と、琵琶湖から流れる宇治川がこの地で合流する。

八幡市は、この木津川が形成した沖積地と男山丘陵からなり、遺跡の多くは丘陵裾部や扇状地、沖積地に認められる。木津川河床遺跡もその1つで、大規模な水害にみまわれ明治元年に上津屋集落から淀方面へと北西方向に流れていた流路を現在の河川に改修された。その旧流路は、八幡市飛地として地図に見てとれ、当遺跡はその左岸に位置する。

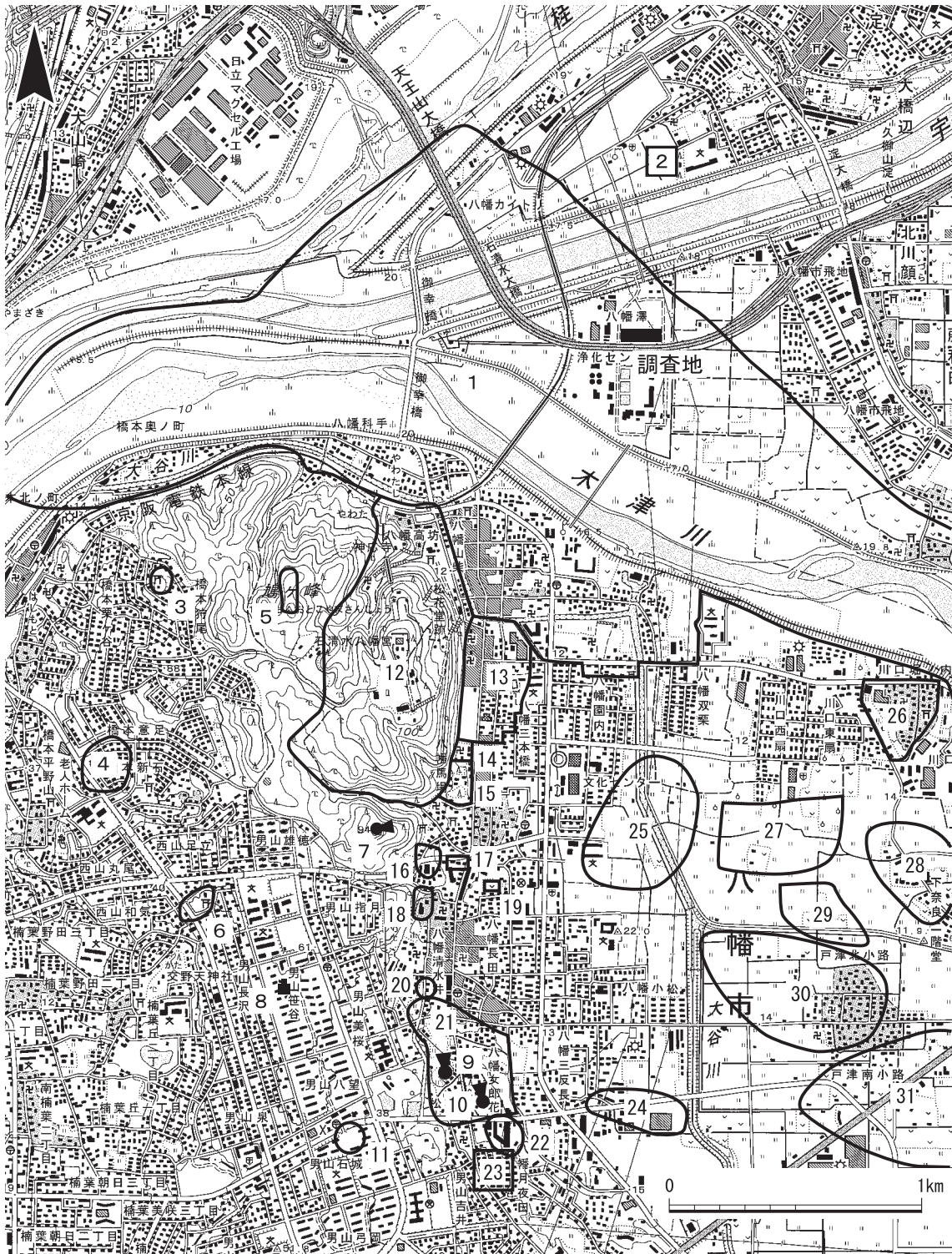
遺跡の範囲は、木津川大橋から3河川合流付近までの東西約5km、南北約2.5kmの集落遺跡である。男山は、頁岩とチャートなどの堆積岩からなる丹波帯と、砂礫層と海成粘土の互層からなる大阪層群からなり、東側斜面裾部には男山断層が存在する。東側の平野部は、後背湿地による堆積物からなり、旧河道の痕跡が認められる。

2) 歴史的環境

弥生時代前期には集落遺跡である内里八丁遺跡や弥生時代中期から営まれる市田齊当坊遺跡（久御山町）など大規模な遺跡が低湿地に展開する。一方、美濃山丘陵では、弥生時代中期後半には宮ノ背遺跡（南方約5km）から集落跡が、幸水遺跡（南方約4km）からは方形周溝墓群が確認されている。弥生時代中期後半から後期初頭には備前遺跡（南方約4km）で高地性集落が営まれる。弥生時代末から古墳時代初頭にかけて八幡市域では、低丘陵頂部などに集落が営まれるようになり、今回の調査地付近の木津川河床遺跡(1)からも集落を検出している。

古墳時代には、男山丘陵に大型古墳が築造される。前方後円墳である石不動古墳(7)、西車塚古墳(9)、東車塚古墳(10)と前方後方墳である茶臼山古墳(8)である。いずれも古墳時代中期後半である。女郎花遺跡(21)からは、同時期の竪穴建物や円筒埴輪や朝顔形埴輪が確認されている。また、西車塚古墳と東車塚古墳の間から周濠が確認され、古墳時代中期の方墳であるとされており、この地には多くの古墳とその時期の集落が存在したと思われる。^(注1)

奈良時代には、古山陽道や古山陰道が八幡市域を通過していたと考えられている。女郎花遺跡(21)



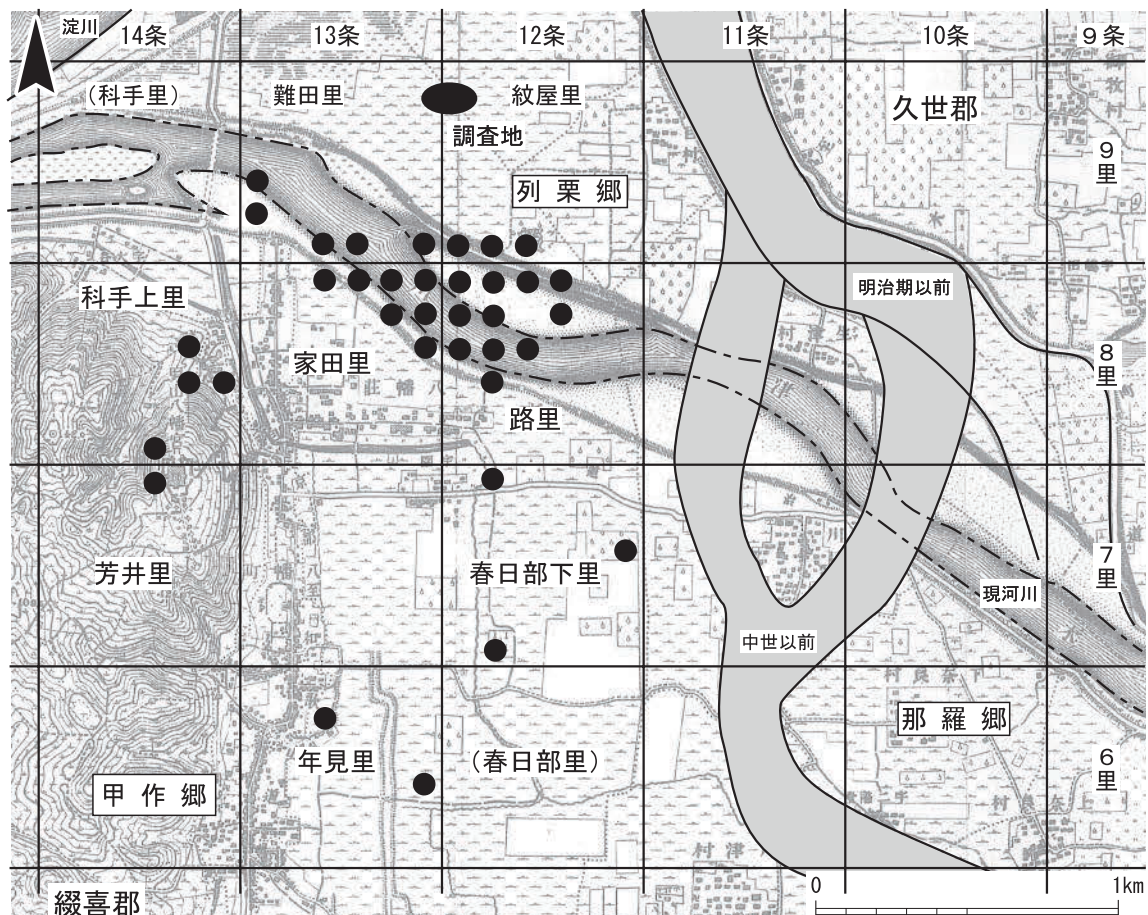
第 1 図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

- | | | | | |
|----------------|--------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 木津川河床遺跡 | 2. 美豆城跡 | 3. 狩尾社遺跡 | 4. 石ヶ谷遺跡 | 5. 鳩ヶ峰経塚群 |
| 6. 西山廃寺跡(足立寺跡) | 7. 石不動古墳 | 8. 茶臼山古墳 | 9. 西車塚古墳 | 10. 東車塚古墳 |
| 11. 石城跡 | 12. 石清水八幡宮遺跡 | 13. 山本町遺跡 | 14. 善法律寺境内遺跡 | 15. 馬場遺跡 |
| 16. 清水井遺跡 | 17. 清水井東遺跡 | 18. 正法寺境内遺跡 | 19. 長田遺跡 | 20. 隅田口遺跡 |
| 21. 女郎花遺跡 | 22. 月夜田遺跡 | 23. 志水廃寺 | 24. 一ノ坪遺跡 | 25. 鳥遺跡 |
| 27. 川口扇遺跡 | 28. 今里遺跡 | 29. 奥戸津遺跡 | 30. 戸津遺跡 | 31. 内里五丁遺跡 |

では、奈良時代から平安時代前期の大型の掘立柱建物を検出しており、古山陽道の要所に位置した遺跡と考えられる。^(注2) また、奈良時代以降に西山廃寺跡<足立寺跡>(6)、志水廃寺(23)が建立される。男山丘陵中腹に所在する志水廃寺からは、瓦積基壇が確認されており、7世紀末から8世紀前葉頃の創建とされている。これら古代寺院は、石清水八幡宮成立頃の9世紀中ごろから後半に廃絶するが、その関連については不明である。

また、奈良時代の調査地付近は、山城国久世郡列栗郷に属していた。高橋美久二氏の研究では里名の配置と天平14(742)年の「弘福寺田数帳」の記録から寺領の特定がなされている。調査地は、^(注3) 12~13条9里の紋屋里・難田里にまたがり、弘福寺領北側にあたる。

平安時代中期には、貞観元(859)年大安寺の僧侶・行教が大分県の宇佐八幡宮から八幡神を遷座し、石清水八幡宮が造営された。石清水八幡宮本殿を中心に、各坊院が点在する山上、頓宮・極楽寺を中心とする宿院(山下)が形成される。男山北東部に祠官家である元命や頼清、垂井光清邸宅を中心に門前町が発展していく。12世紀前半には、本殿・護国寺・宝塔院などが完成するなど12世紀中葉から後半には八幡は中世都市として発展していった。12世紀中頃には、別当慶清が家田殿と称し田中町の北へ移住し、家田町へと発展する。13世紀中頃には別当裕清が大善法寺と称し馬場町に社家屋敷を構えるなど、東高野街道沿いが発展していく。清水井遺跡(16)は、室町時代の祠官家のひとつである新善法寺家の邸宅跡と考えられており、さらに南へ発展していく。^(注4)

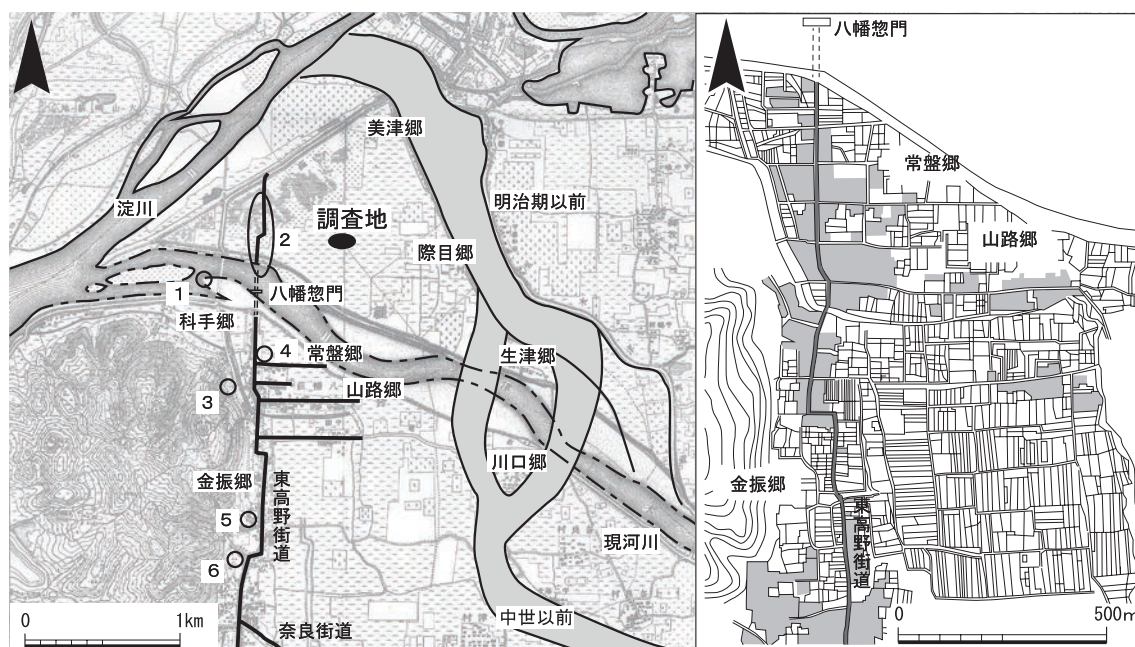


第2図 久世郡列栗郷内里名配置図(●は「弘福寺田数帳」に記載された寺領)

このような経緯のもと成立した江戸時代に八幡八郷と称された社領地は、鎌倉時代から室町時代にその原形できあがっていき、町場である内四郷と村落や耕作地からなる外四郷が編成される。内四郷は12世紀後半の鎌倉期に、外四郷は14世紀末の室町期には八幡宮領となる。^(注5)これに伴う遺跡が集落遺跡である山本町遺跡(13)や馬場遺跡(15)、社寺跡である善法律寺境内遺跡(14)、正法寺境内遺跡(18)である。

また、奈良時代から中世の集落遺跡として周辺部から、奥戸津遺跡(29)、戸津遺跡(30)、中世の集落遺跡は、川口環濠集落(26)、今里遺跡(28)が低地に展開する。また、八幡八郷外周には多くの荘園が営まれる。古いものでは、平安時代後期の奈良荘や島田園や狭山郷がある。いずれも石清水八幡宮領で、島田園は菜園で作物を八幡宮に納めていた。鎌倉時代には八幡宮領菜園の藤和田園が営まれる。室町時代には八幡宮領の御牧荘が営まれ、木津川下流域では平安時代後期から数多くの荘園が展開し賑わうところとなる。

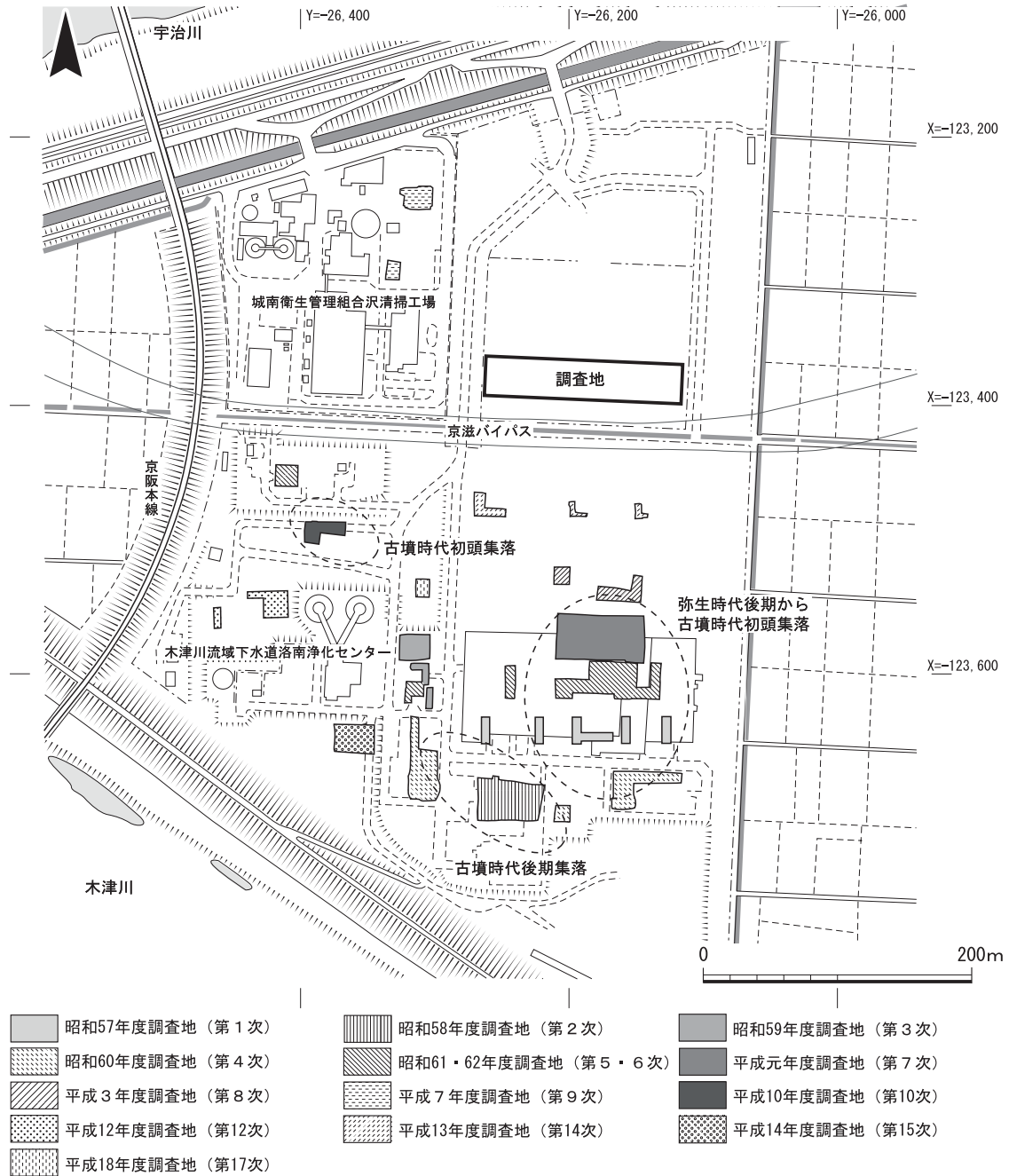
平安時代後期の水上交通としては、巨椋池東側に、平安時代後期に津として発展した近衛家領の巨倉荘が存在する。3河川合流付近の淀には、同時期に大淀荘が営まれ、近くには与等津が造られ交通の要衝となる。このことから巨椋池から男山付近にかけて水上交通の盛んなところとなる。その後、大山崎町の山崎津や鳥羽・伏見が整備される。また、陸路も東高野街道の整備が進み、水陸ともにより強化される。東高野街道付近では、短冊形に地割りが整備される。金振郷では西に振る形で認められるが、常盤郷や山路郷ではその方向が北を向く。地割りの向きの違いは、門前町の形成に因るものか今後検討が必要である。



第3図 門前町及び地籍復原図

1. 垂井光清邸宅 2. 頼清邸宅 3. 高坊(元命坊舎) 4. 田中家 5. 善法寺家 6. 新善法寺家

地図は仮製図明治23年測量「淀」、街道と地籍復原図は、藤本史子「中世都市 八幡」(「会報第71号」)の掲載図をトレース加筆



第4図 調査地配置図

付表1 洛南浄化センター敷地内発掘調査一覧表

次数	調査年度	調査主体	報告書	刊行	次数	調査年度	調査主体	報告書	刊行
第1次	S 57年度	当センター	第8冊	1983	第8次	H 3年	当センター	第49冊	1992
第2次	S 58年度	当センター	第11冊	1984	第9次	H 6年	八幡市教委	第17集	1995
第3次	S 59年度	当センター	第16冊	1985	第10次	H 10年	当センター	第88冊	1999
第4次	S 60年度	当センター	第19冊	1986	第12次	H 12年	当センター	第98冊	2001
第5次	S 61年度	当センター	第23冊	1987	第14次	H 13年	当センター	第102冊	2002
第6次	S 62年度	当センター	第30冊	1988	第15次	H 14年	当センター	第106冊	2003
第7次	H 元年	当センター	第38冊	1990	第17次	H 18年	当センター	第122冊	2007

3. 調査の経緯（第4図・付表1）

洛南浄化センター敷地内では、過去13回の調査が実施されてきた。いずれも現在の主要施設建設に伴う発掘調査であり、京滋バイパス以南に集中する。これらの調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてと古墳時代後期、鎌倉時代から安土桃山時代にかけての遺構が確認されている。弥生時代末から古墳時代初頭の遺構には、竪穴建物や溝、土坑などを、古墳時代後期には竪穴建物や掘立柱建物、柵列や土坑などを検出している。鎌倉時代には、広範囲から素掘り溝群を、また浄化センター敷地の北側や西側からは室町時代の島畑を検出している。これらの遺構から浄化センター敷地中央には弥生時代末から古墳時代初頭の集落が、南側には古墳時代後期の集落が営まれていた。今回の調査地はその北側にあたり、沢や菰池という地名が残るなど、宇治川に向かって地形が下がっていくものと予想され、集落の一部と谷地形にかかるものと思われた。また、調査地各所で様々な形の地震痕跡が認められた。

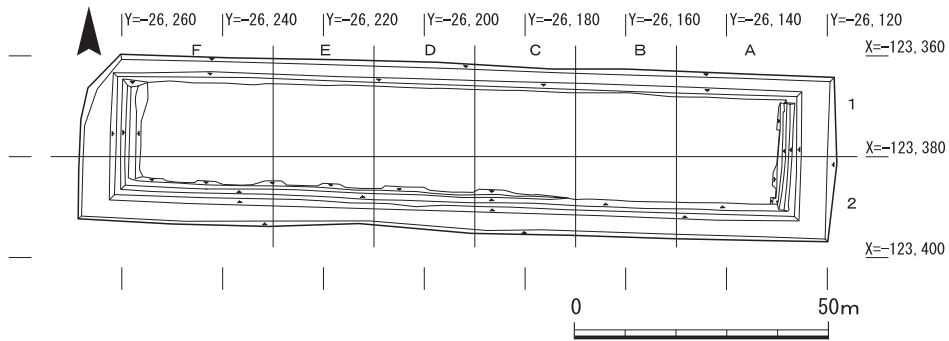
4. 調査の方法

1) 調査の方法

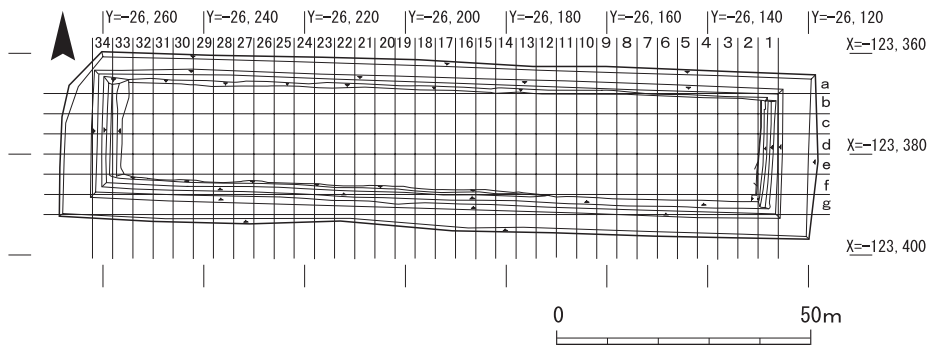
調査地内の地表面は標高約11.5mで、盛り土・整地土が約2.0mと厚く、標高約9.5mまで京都府流域下水道事務所が土砂除去を行った。下端面積3,000㎡から当調査研究センターが発掘調査を実施した。遺構面の数と深さを確認するため、東壁に沿って断ち割りを行った。標高9.2～8.2mから室町時代後半から末期の島畑(第1面)を検出した。次に南壁断面を精査して、もう一面標高8.1m付近に存在することがわかった。検出状況から鎌倉時代から室町時代とした(第2面)。さらに標高7.8m付近に厚さ0.2～0.3mを測る古墳時代初頭の遺物を包含する層(下層包含層)が広がり、その上面から掘り込む形で素掘り溝群を確認した(第3面)。下層包含層下は、砂層の堆積であった。この砂層にまで及ぶ素掘り溝群を検出した(第4面)。以上のことから、4面の調査となった。

上記東壁の断面観察の成果から、島畑検出面まで重機掘削を行い、その後、人力による精査を行った。調査終了後、島畑の除去を行い、下層である素掘り溝群の検出に努めた。精査、溝の掘削を人力で行った。遺物包含層を除去した最終面に遺構が存在するか、早期に知る必要があったため、Y=-26,138ライン以東を部分的に掘削した。最終面での遺構と旧地形の確認できると考え、空撮後包含層の除去を行った。

また、島畑上面から最終面にかけて数多くの地震痕跡が認められたことから、流域下水道事務所が事前に実施していたボーリング調査の成果報告書の一部を抜粋掲載した。



室町時代地区割り



古墳時代初頭～鎌倉時代地区割り

第5図 地区割り図

2) 地区割りの設定(第5図)

鳥畑の調査時は、X=-123,380ラインで北半と南半に分け数字で区割りした。東西方向は、20m間隔で区割りし、アルファベットで東から西に表示した。第3面以下については、X=-123,364、Y=-26,126を起点に、4m方眼を設定した。南北方向はアルファベットで北から南へ、東西方向を数字で東から西へ表示した。地区名は北東隅を基準とした。

5. 基本的な層序(第6・8～12)

木津川河床遺跡内の堆積状況図として、八幡森で調査を行った24次調査から北西方向と北方向の堆積断面を柱状図を図示した。24次調査地から北西方向を見ると、25次調査地までは勾配が12%と緩やかであるのに対し、25次調査地から20次調査地までは勾配29%と急になる。平安時代前期から室町時代にかけての層が遺存するが、13次調査地では平安時代後期以降の層が残る。耕作地として利用されていたのは23次調査地以西である。24次調査地から北方向については、14次調査地が低く落ち込み、勾配21%と急斜面を呈する。平安時代以前の層は部分的に認められ、今回の調査地では古墳時代初頭の層が認められた。鳥畑は、10・15・32次調査地で検出されており、上面は標高9m前後である。

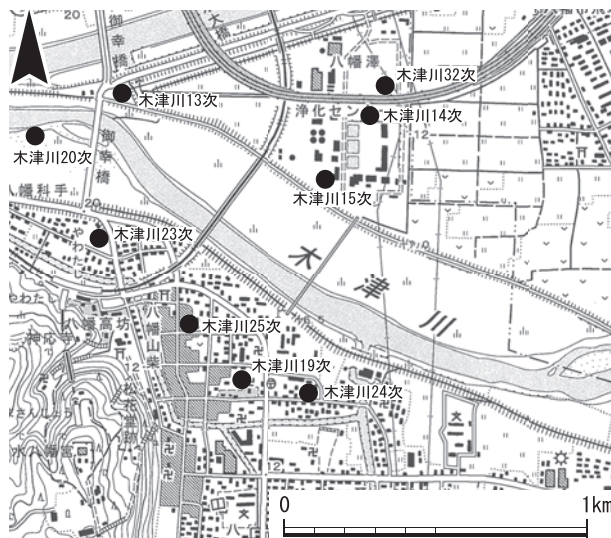
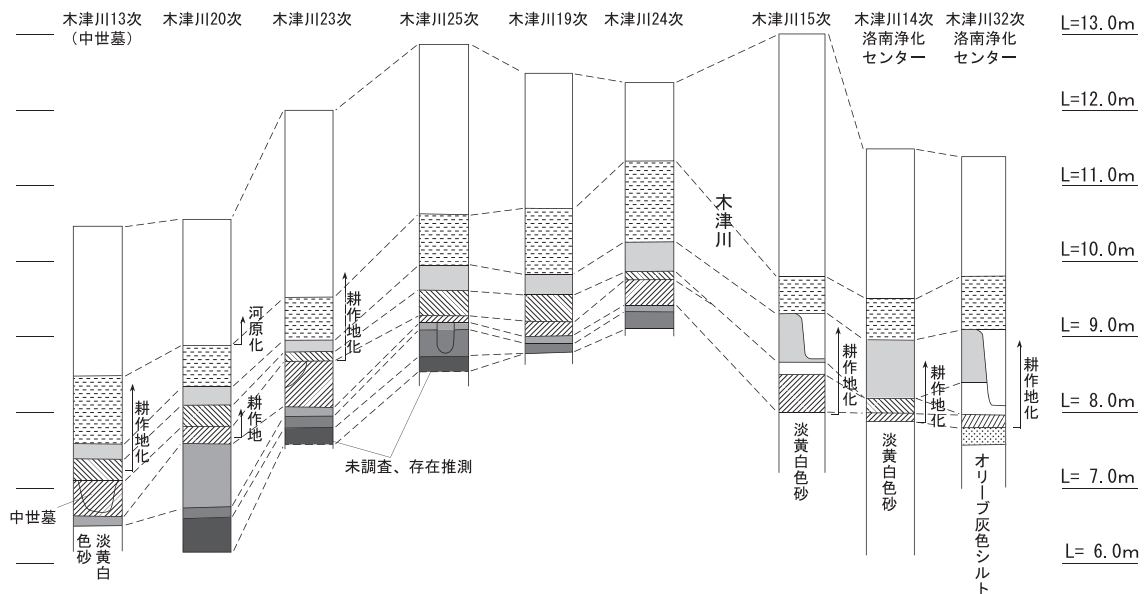
次に、調査地内の堆積断面を概観する。

今回検出した鳥畑は、室町時代まで水平堆積した土層を部分的に掘削して鳥状に盛ることで造成されていた。鳥畑断面には5層前後の堆積が見られたが、その中位の堆積層からわずかに土器

片(28~31)が出土した。このことから室町時代の包含層であると考えた。この包含層から上の層は、鳥畑造成時の盛り土である。鳥畑を覆うように灰オリーブ色シルト(第13図13)が水平堆積しており、18世紀代の椀(1~3)・古瀬戸の皿(4)が出土している。安土桃山時代から江戸時代前半の土層は確認できなかった。

南壁の暗オリーブ灰色極細粒砂(92)層を上面として溝や畔を検出した。これを第2面とした。その下層の古墳時代初頭の遺物を多く包含する下層包含層である東壁のオリーブ黒色粘土(46・47)や南壁のオリーブ黒色粘土(100・102)の上面で素掘り溝群や畔を検出した。これを第3面とした。

上記の下層包含層を除去すると、東壁のオリーブ灰色シルト(48)、南壁のオリーブ灰色シルト(109)となり、その上面で素掘り溝群を検出した。これを第4面とした。この溝群については、本来は直上の包含層である東壁のオリーブ黒色粘土(47)中位から掘り込まれたと考えられるが、



- 近世
- 室町時代後期
- 鎌倉時代末~室町時代前期
- 鎌倉時代
- 平安時代後期
- 平安時代中期
- 平安時代前期 (後半)
- 弥生時代末~古墳時代初頭

大洞真白「八幡を掘る—上山下の発掘調査から—」(『会報』第51号 八幡の歴史を探究する会議演会資料) 2014.6

図1 木津川河床遺跡内調査地の地層断面模式図を加筆・トレース

第6図 基本層位図

埋土に違いがなく、包含層(47)除去後の確認となった。

6. 調査概要

1) 第1面：室町時代後半～末期(第7～13図、図版第1～5)

9基の島畑を検出した。S D06の東側では東西方向の島畑3基(島畑1～3)を検出し、北から島畑番号を付した。島畑3は、南壁にかかる形での検出となり、断面での確認となった。S D06の西側では南北方向の島畑6基(島畑4～9)を検出した。東から西へ続けて番号を付した。島畑間については、溝状遺構として報告する。全体に島畑頂部に耕作土と考えられる土の堆積が見られないことから、後世に大きく削平を受けたと考えた。

溝状遺構 S D01 島畑1北側で斜面部を検出した。溝状遺構は調査地外に続くため、その全容や規模については不明である。

島畑1 (S X02) 調査地北東部で検出した。島畑上面の幅約4.0m、基底部の幅約5.0m以上、高さ約0.9mを測る。島畑中位のオリーブ灰色シルト(34・35)から土師器細片が出土している。島畑上面からこの層まで(28～33)は、島畑造成時の盛り土と考えられた。島畑北側斜面部に、やや粘質のオリーブ色細粒砂混じり灰オリーブ色細粒砂(26)や灰色細粒砂(27)が貼りつく形で認められた。島畑斜面部を造成する際の盛り土である。

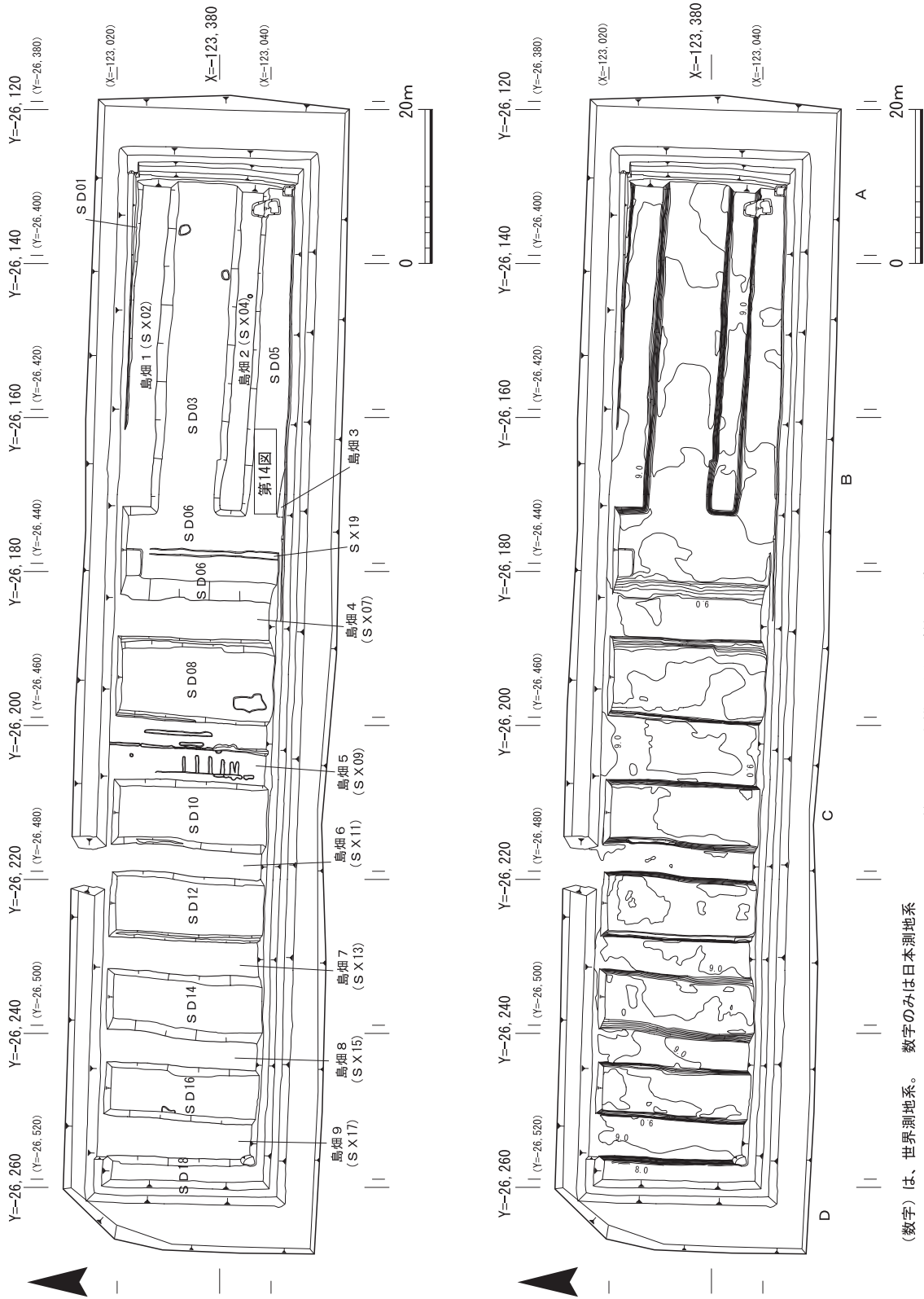
溝状遺構 S D03 島畑1と島畑2の間の溝状遺構である。上端間は約9.0m、下端間は約7.3m、深さ約0.9mを測る。底には、灰色粘土(21)が堆積しており、植物遺体は確認できなかった。島畑造成時には逆台形状に掘削されていたが、その後島畑1から、灰色細粒砂(17・19・20)とオリーブ灰色極細砂(18)が流入しており、当初の形状から「U」字形に大きく変わる。埋土中から土師器片などがわずかに出土したが、時期は不明である。西側には人間や動物と思われる足跡が認められた。

島畑2 (S X04) 島畑1南側で検出した。島畑上面の幅約2.8m、基底部の幅約5.0m、高さ約1.0mを測る。島畑1と同様に中位には土師器細片を包含するオリーブ灰色シルト(第8図34・35)が堆積していた。この層を掘り込む形で島畑は造成され、黄褐色シルト(31)や灰オリーブ色シルト(32)は盛り土と考えた。

溝状遺構 S D05 島畑2南側で検出した。島畑3の上面が調査地外であるため、上面での幅は不明である。下端間は約5.0m、深さ約1.0mを測る。底には、オリーブ灰色極細砂(24)やオリーブ灰色シルト(25)が堆積していた。南側では、オリーブ灰色極細砂(24)から人間や動物の足跡痕跡が良好な形で確認できた(第14図)。痕跡には、オリーブ灰色シルト(23)が埋まっていた。

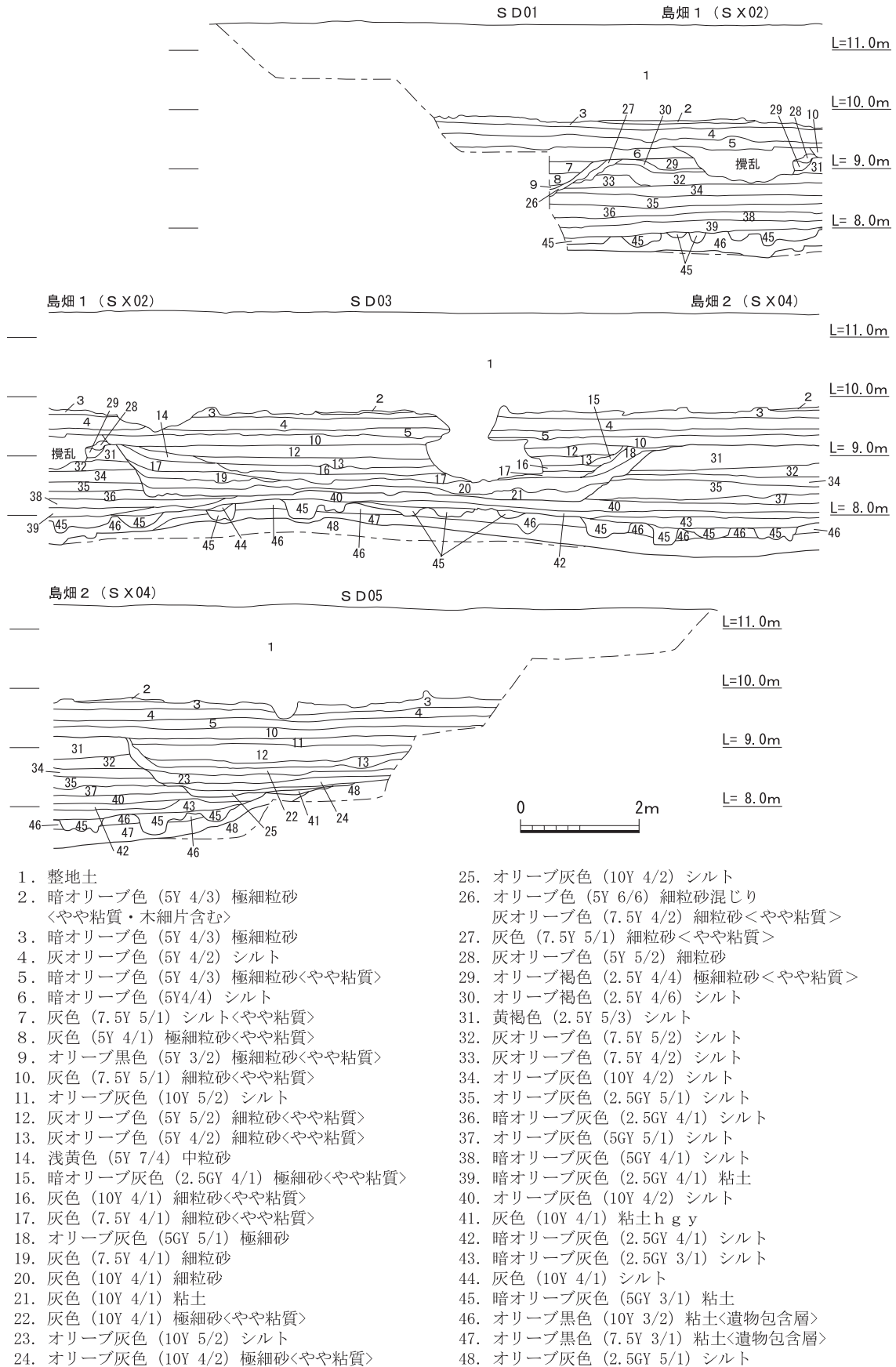
島畑3 調査地南壁断面にわずかにかかる形で認められ、東壁まで続く。調査地外に及ぶため、その規模については不明である。

溝状遺構 S D06 島畑1・2と島畑4の間に検出した南北方向の遺構である。上端間は約15.0m、下端間は約8.6～10.0m、深さ約0.7mを測る。中央付近から南北方向の畔(S X19)を確認した。この畔以東は東西方向の島畑が、以西は南北方向の島畑が築かれており、当時の坪境の畔と考え

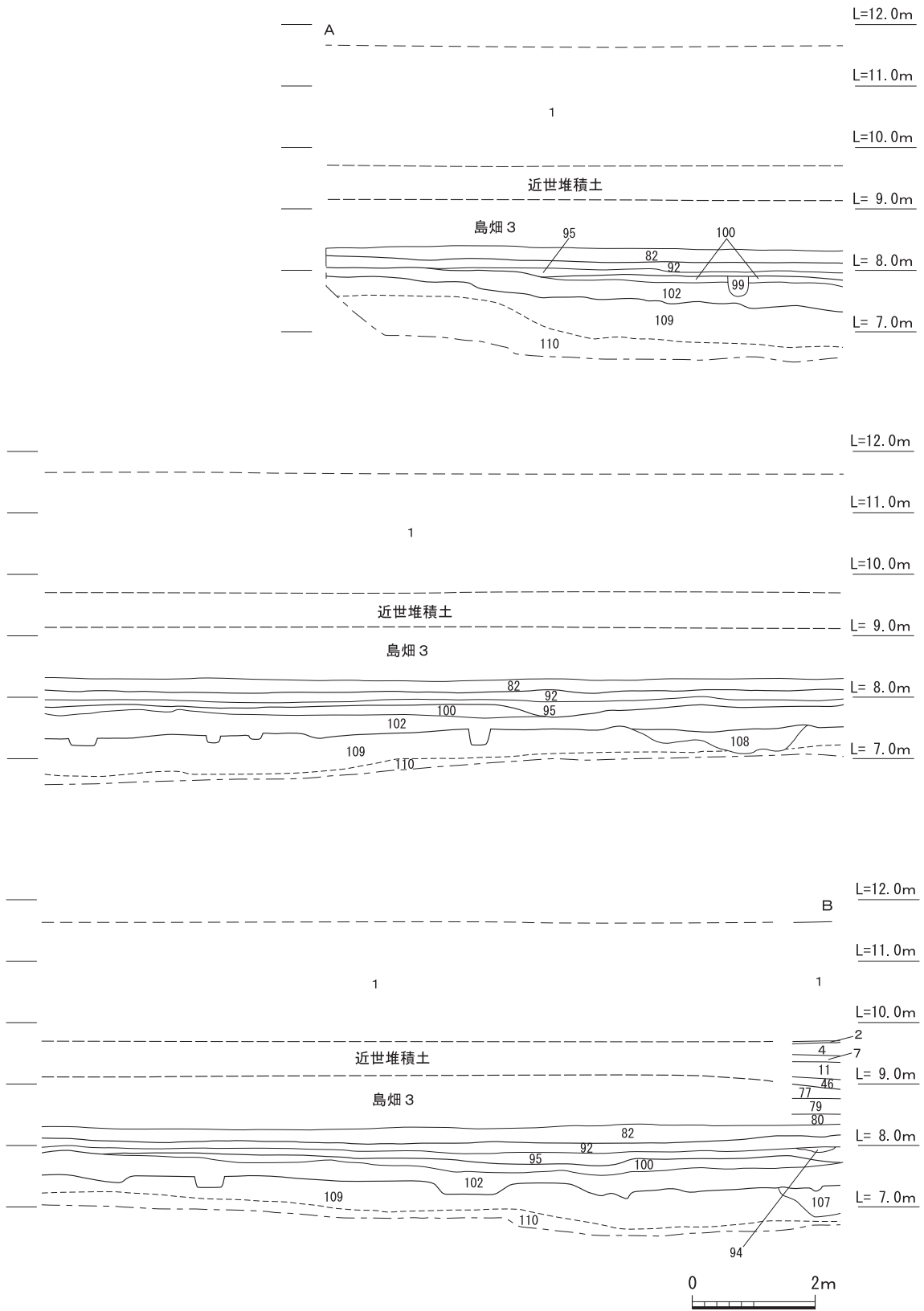


第 7 図 遺構配置図(第 1 面)

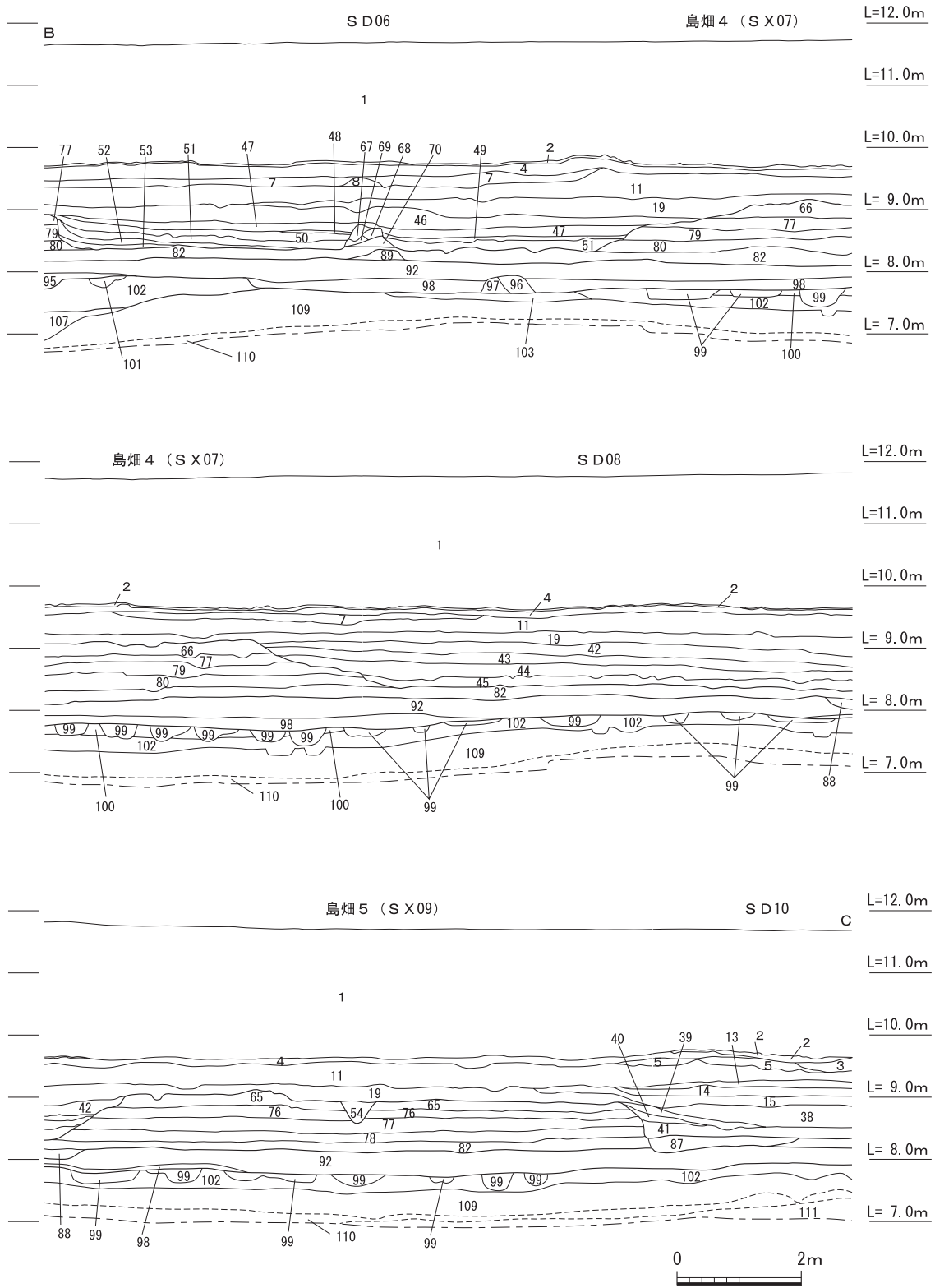
(数字) は、世界測地系。数字のみは日本測地系



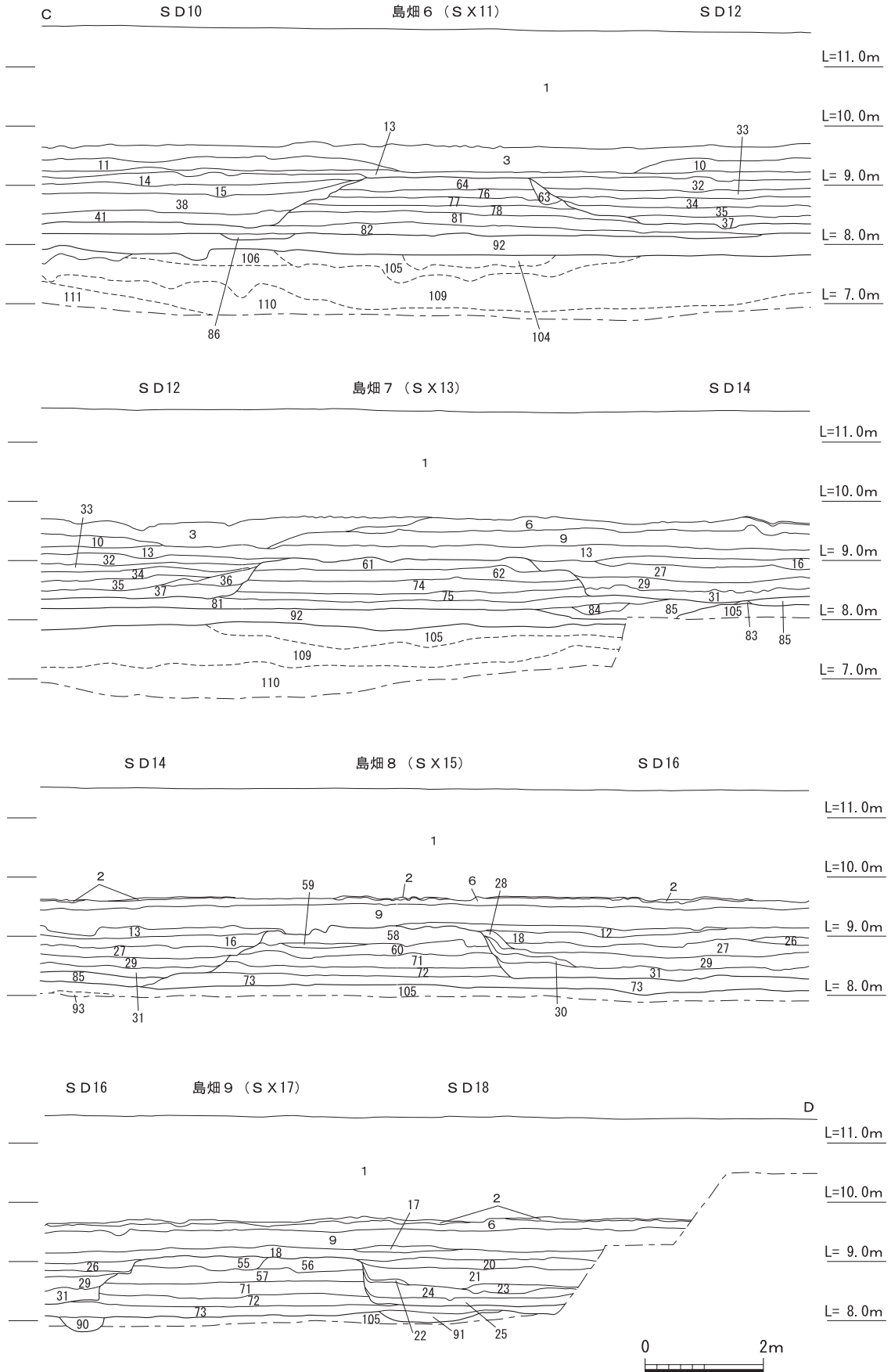
第8図 東壁断面図



第 9 図 南壁断面図(1)



第10図 南壁断面図(2)



第11図 南壁断面図(3)

1. 盛土・整地土
2. 灰オリブ色 (5Y 4/2) シルト極細粒砂<旧表土>
3. 暗オリブ色 (5Y 4/4) 極細粒砂
4. 暗オリブ色 (7.5Y 4/3) シルト質極細粒砂
5. 灰オリブ色 (5Y 5/2) シルト質極細粒砂
6. オリブ褐色 (2.5Y 4/3) シルト極細粒砂
7. 暗オリブ色 (5Y 4/3) シルト質極細粒砂
8. 暗オリブ色 (5Y 4/4) シルト質極細粒砂
9. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) 極細粒砂
<やや粘質>
10. 灰オリブ色 (7.5Y 4/2) シルト
<極細粒砂含む>
11. 暗緑灰色 (7.5GY 3/1) シルト
<極細粒砂含む>
12. 灰色 (10Y 6/1) シルト質粘土
13. オリブ灰色 (10Y 4/2) シルト
14. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
15. オリブ灰色 (10Y 4/2) シルト
16. オリブ黒色 (10Y 3/2) シルト質粘土
17. オリブ灰色 (5Y 5/2) シルト
18. 灰色 (10Y 4/1) シルト
19. 暗オリブ灰色 (5GY 4/1) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
20. 灰色 (10Y 5/1) シルト
21. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト
22. オリブ灰色 (5GY 5/1) シルト質粘土
23. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト
24. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト質粘土
25. 灰色 (10Y 4/1) シルト質粘土
26. オリブ灰色 (5GY 5/1) シルト質粘土
27. オリブ灰色 (2.5GY 5/1) シルト質粘土
28. 灰オリブ (7.5Y 5/3) 極細粒砂
29. オリブ黒色 (10Y 3/1) 極細粒砂<やや粘質>
30. 灰色 (10Y 4/1) シルト<やや砂質>
31. 灰色 (10Y 5/1) シルト質粘土
32. オリブ黒色 (5Y 3/2) シルト<極細粒砂含む>
33. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト
<極細粒砂含む>
34. オリブ黒色 (5Y 3/1) シルト極細粒砂
35. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト
<極細粒砂含む>
36. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土<極細粒砂含む>
37. 暗オリブ灰色 (5GY 4/1) シルト
<極細粒砂含む>
38. 暗オリブ灰色 (2.5GY 3/1) シルト質極細粒砂
39. 暗オリブ灰色 (5GY 3/1) 粘質極細粒砂
40. 暗オリブ灰色 (2.5GY 3/1) 粘質極細粒砂
41. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) シルト質極細粒砂
42. オリブ黒色 (10Y 3/2) シルト質極細粒砂
43. オリブ黒色 (5Y 3/1) シルト質極細粒砂
44. オリブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
45. 灰色 (10Y 4/1) シルト質極細粒砂
46. オリブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト質極細粒砂
47. 暗オリブ灰色 (2.5GY 3/1) シルト質極細粒砂
48. オリブ灰色 (10Y 4/2) 粘土<極細粒砂含む>
49. オリブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
50. オリブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
51. 灰色 (10Y 4/1) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
52. オリブ黒色 (10Y 3/2) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
53. オリブ黒色 (7.5Y 3/2) 粘土<極細粒砂含む>
54. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト質粘土
<極細粒砂含む>
55. オリブ灰色 (10Y 5/2) シルト
56. 灰色 (10Y 5/1) シルト
57. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) シルト質粘土
58. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) 細粒砂
59. 灰色 (10Y 6/1) シルト
60. 灰色 (7.5Y 6/1) シルト質粘土
61. 黄褐色 (10YR 5/6) 極細粒砂
<粘質シルト含む>
62. 暗オリブ灰色 (5GY 4/1) シルト
63. 灰オリブ色 (7.5Y 4/2) シルト
64. 灰色 (10Y 4/1) シルト質極細粒砂
65. 暗オリブ灰色 (5GY 3/1) シルト質極細粒砂
66. 暗オリブ灰色 (5GY 3/1) シルト質極細粒砂
67. 暗緑灰色 (10GY 4/1) シルト質極細粒砂
68. 灰色 (10Y 4/1) 粘土<極細粒砂含む>
69. 暗オリブ灰色 (5GY 3/1) シルト
<やや粘質・極細粒砂含む>
70. オリブ黒色 (10Y 3/1) 粘土
<極細粒砂含む>
71. オリブ灰色 (2.5GY 5/1) シルト
72. オリブ灰色 (5GY 5/1) シルト
73. 暗オリブ灰色 (5GY 4/1) シルト質粘土
74. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト
75. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 粘土
76. 暗オリブ灰色 (5GY 4/1) シルト
<極細粒砂少量含む>
77. 暗緑灰色 (7.5GY 3/1) シルト
78. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) シルト
<やや粘質>
79. 暗オリブ灰色 (5GY 3/1) シルト質粘土
80. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) シルト質粘土
<極細粒砂含む>
81. 暗オリブ灰色 (5GY 4/1) 粘土
<極細粒砂少量含む>
82. 暗オリブ灰色 (2.5GY 3/1) 粘質シルト
83. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
84. オリブ灰色 (2.5GY 5/1) 粘土
85. 灰色 (10Y 4/1) 粘土
86. オリブ黒色 (10Y 3/1) シルト
<やや粘質・極細粒砂少量含む>
87. 暗オリブ灰色 (5GY 4/1) 粘質極細粒砂
88. 灰色 (10Y 4/1) 粘質極細粒砂
89. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 粘土<極細粒砂含む>
90. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
91. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト質粘土
92. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) 極細粒砂
<やや粘質>
93. 灰オリブ色 (7.5Y 5/3) 極細粒砂
<やや粘質>
94. 灰黄褐色(10YR 4/2)細粒砂<炭混じる>
95. 暗オリブ灰色 (2.5GY 3/1) シルト
96. 灰色(N 5/)細粒砂
97. オリブ灰色(5GY 6/1)細粒砂
98. 青灰色(5BG 6/1)細粒砂
99. 暗オリブ灰色 (5GY 3/1) 粘土
100. オリブ黒色 (10Y 3/2) 粘土<遺物包含層>
101. 灰色(N 6/)細粒砂
102. オリブ黒色 (7.5Y 3/1) 粘土<遺物包含層>
103. 灰色(N 6/)粘質細粒砂
104. 青灰色(5B 5/1)粘土
105. 青灰色(5B 6/1)粘土
106. 緑灰色(10G 6/1)粘質細粒砂
107. 灰色(10Y 4/1)粘土
108. 灰色(5Y 5/1)粘土
109. オリブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト
110. 灰白色(5Y 7/1)極細粒砂
111. 淡黄色(2.5Y 8/4)砂<やや粗砂>

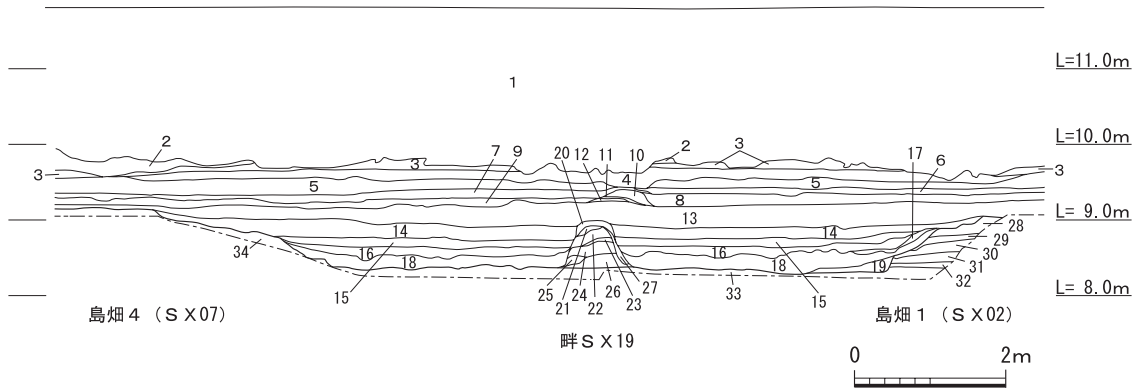
第12図 南壁断面図(4)

る。このように坪ごとに島畑の方向が異なる状況は、城陽市の下水主遺跡や小樋尻遺跡の発掘調査成果でも見られるところである。

島畑 4 (S X 07) 溝状遺構 S D 06 西側で検出した。島畑上面の幅約 5.0m、基底部の幅約 9.5m、高さ約 0.8m を測る。島畑中位で土師器細片を包含する暗緑灰色シルト (77) と暗オリーブ灰色シルト質粘土 (79) を確認した。暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂 (66) は、島畑造成時の盛り土と考えた。

溝状遺構 S D 08 島畑 4 と島畑 5 の間で検出した、緩やかな逆台形状の遺構である。上端間は約 11.0m、下端間は約 7.5m、深さ約 0.7m を測る。底には、灰色シルト質極細粒砂 (45) が堆積していた。

島畑 5 (S X 09) 島畑 4 の西側で検出した。島畑上面の幅約 8.0m、基底部の幅約 9.5m、高さ約 0.8m を測る。島畑中位で土師器細片を包含する暗オリーブ灰色シルト (76) と暗緑灰色シルト (77) を確認した。暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂 (65) は、島畑造成時の盛り土と考えた。島畑上面には、島畑に伴う素掘り溝を 10 条検出した。幅 0.2~1.0m、深さ 0.1~0.4m を測り、埋土は暗オリーブ灰色シルト質粘土 (54) であった。わずかに土器片が出土した。そのうち、土師器細片 (12)・瓦器椀 (16)・須恵器鉢 (17) を図示した。



- | | |
|--|---|
| 1. 整地土・盛り土 | 18. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 極細粒砂 |
| 2. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) シルト<旧表土> | 19. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 極細粒砂 |
| 3. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト | 20. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト |
| 4. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) シルト | 21. オリーブ黄色 (7.5Y 6/3) 極細粒砂 |
| 5. 灰色 (7.5Y 5/1) 極細粒砂 | 22. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 極細粒砂 |
| 6. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 極細粒砂 | 23. オリーブ黄色 (7.5Y 6/3) 極細粒砂 |
| 7. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 極細粒砂<やや粘質> | 24. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) シルト |
| 8. オリーブ色 (5Y 6/5) 細粒砂含む
灰オリーブ色 (5Y 5/2) 極細粒砂<やや粘質> | 25. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 極細粒砂 |
| 9. 灰色 (5Y 6/1) シルト | 26. オリーブ灰色 (10Y 4/2) 粘土 |
| 10. 灰オリーブ色 (5Y 5/1) シルト<近世畔盛土> | 27. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 極細粒砂 |
| 11. 灰色 (7.5Y 6/1) シルト<近世畔盛土> | 28. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 細粒砂<わずかに粘質土含む> |
| 12. オリーブ灰色 (10Y 5/2) シルト<近世畔盛土> | 29. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 細粒砂<わずかに粘質土含む> |
| 13. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト<近世包含層> | 30. オリーブ色 (5Y 5/4) 極細粒砂 |
| 14. 灰色 (10Y 5/1) シルト | 31. 暗オリーブ色 (5Y 4/3) 極細粒砂 |
| 15. 灰色 (2.5Y 5/1) シルト | 32. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 極細粒砂
<わずかに粘質土含む> |
| 16. 灰色 (7.5Y 4/1) 極細粒砂 | 33. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト |
| 17. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 極細粒砂含む
灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 極細粒砂 | 34. オリーブ灰色 (10Y 5/2) シルト |

第13図 溝状遺構 S D 06北壁断面図(畔 S X 19)

溝状遺構SD10 島畑5と島畑6の間の遺構である。上端間は約9.0m、下端間は約7.3m、深さ約0.8mを測る。底には、暗緑灰色シルト質極細粒砂(41)が堆積していた。埋土は、オリーブ黒色極細粒砂(42・43)やオリーブ黒色シルト(44)である。

島畑6(SX11) 島畑5の西側で検出した断面台形の島畑である。島畑上面の幅約2.7m、基底部の幅約6.1m、高さ約0.8mを測る。島畑中位で土師器細片を包含する暗オリーブ灰色シルト(76)と暗緑灰色シルト(77)を確認した。灰オリーブ色シルト(63)と灰色シルト質極細粒砂(64)は、島畑造成時の盛り土である。

溝状遺構SD12 島畑6と島畑7の間に検出した。上端間は約8.4m、下端間は約6.1m、深さ約0.7mを測る。底には、暗オリーブ灰色シルト(37)が堆積していた。埋土は、オリーブ黒色シルト(32)と暗オリーブ灰色シルト(33・35)、オリーブ黒色シルト極細粒砂(34)である。

島畑7(SX13) 島畑6の西側で検出した断面台形の島畑である。島畑上面の幅約5.2m、基底部の幅約6.1m、高さ約0.7mを測る。島畑中位で土師器細片を包含する暗オリーブ灰色シルト(74)を確認した。黄褐色極細粒砂(61)と暗オリーブ灰色シルト(62)は、島畑造成時の盛り土と考える。

溝状遺構SD14 島畑7と島畑8の間に検出した。上端間は約8.5m、下端間は約6.5m、深さ約0.7mを測る。底には、灰色シルト質粘土(31)が堆積していた。埋土は、オリーブ黒色シルト質粘土(16)やオリーブ灰色シルト質粘土(27)、オリーブ黒色極細粒砂(29)である。

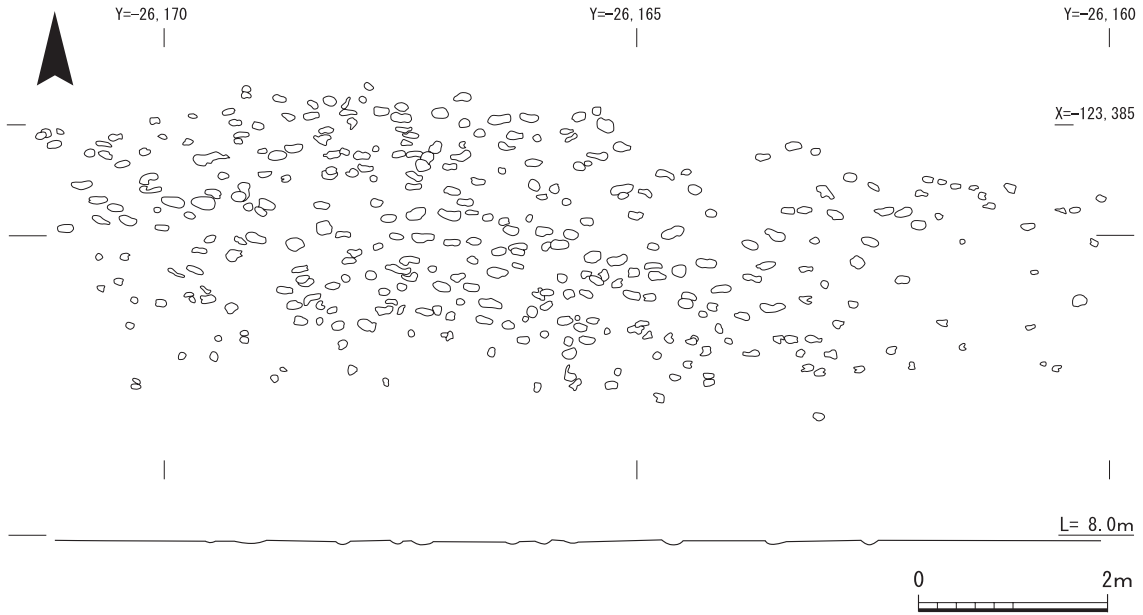
島畑8(SX15) 島畑7の西側で検出した島畑である。島畑上面の幅約3.6m、基底部の幅約5.0m、高さ約0.9mを測る。島畑中位で土師器細片を包含するオリーブ灰色シルト(71)を確認した。暗オリーブ灰色細粒砂(58)と灰色シルト(59)、灰色シルト質粘土(60)は、島畑造成時の盛り土と考える。

溝状遺構SD16 島畑8と島畑9の間に検出した。上端間は約7.0m、下端間は約5.9m、深さ約0.7mを測る。底には、灰色シルト質粘質土(31)が堆積していた。埋土は、オリーブ灰色シルト質粘土(26・27)、オリーブ黒色極細粒砂(29)である。

島畑9(SX17) 島畑8の西側で検出した断面台形の島畑である。島畑上面の幅約3.8m、基底部の幅約4.6m、高さ約0.8mを測る。島畑中位には土師器細片を包含するオリーブ灰色シルト(71)が堆積していた。オリーブ灰色シルト(55)と灰色シルト(56)と緑灰色シルト質粘土(57)は、島畑造成時の盛り土と考える。

溝状遺構SD18 島畑9の西側で検出した。上端間は約4.0m以上、下端間は約3.3m以上、深さ約0.7mを測る。底には、灰色シルト質粘質土(25)が堆積していた。埋土は、灰色シルト(21)とオリーブ灰色シルト質粘土(22)、灰色シルト(23)と暗オリーブ灰色シルト質粘土(24)である。

畔SX19(第10・13図) 盛り土で築かれ、その規模は基底部幅が約1.0m、高さは島畑上面付近まであり、0.4~0.6mを測る。南壁付近では、暗緑灰色シルト質極細粒砂(67)・灰色粘土(68)・暗オリーブ灰色シルト(69)・オリーブ黒色粘土(70)を盛って築かれていた。北壁付近では、オリーブ黄色極細粒砂(21・23)・オリーブ灰色極細粒砂(22・27)・オリーブ灰色シルト(24)・灰オリ



第 14 図 足跡平面図

ーブ色極細粒砂(25)・オリブ灰色粘土(26)を盛っていた。畔の東側の灰オリブ色極細粒砂(18)から洪武通宝1枚(27)が出土した。

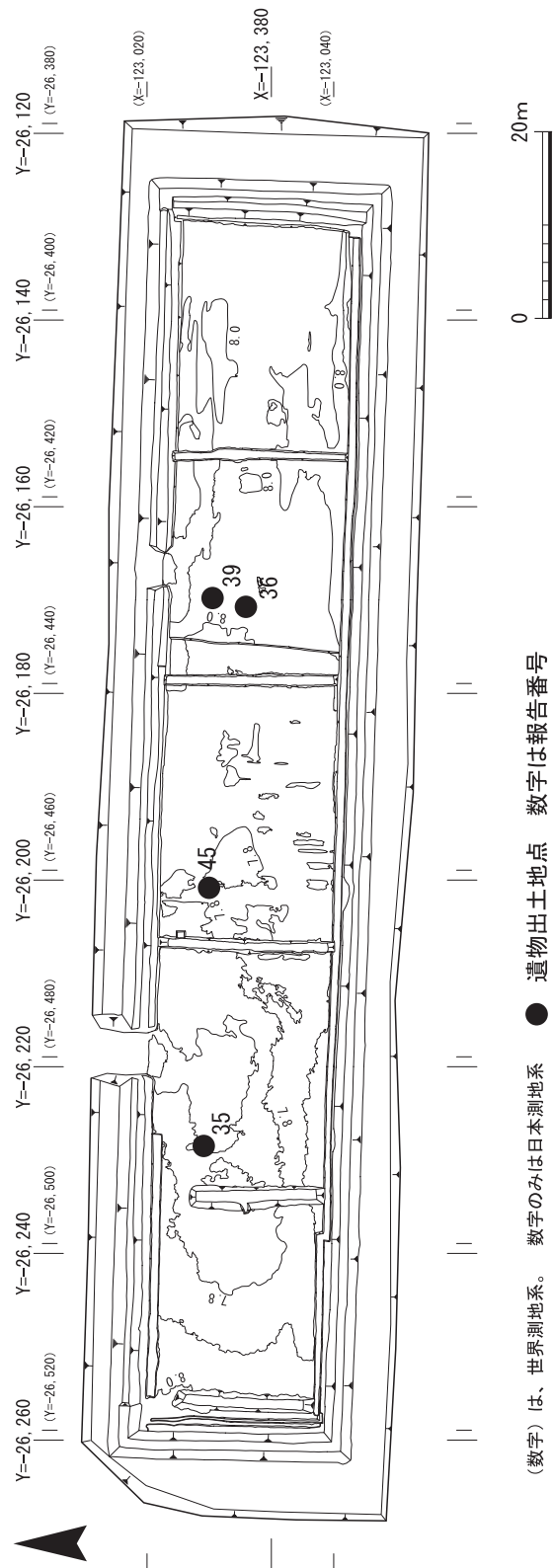
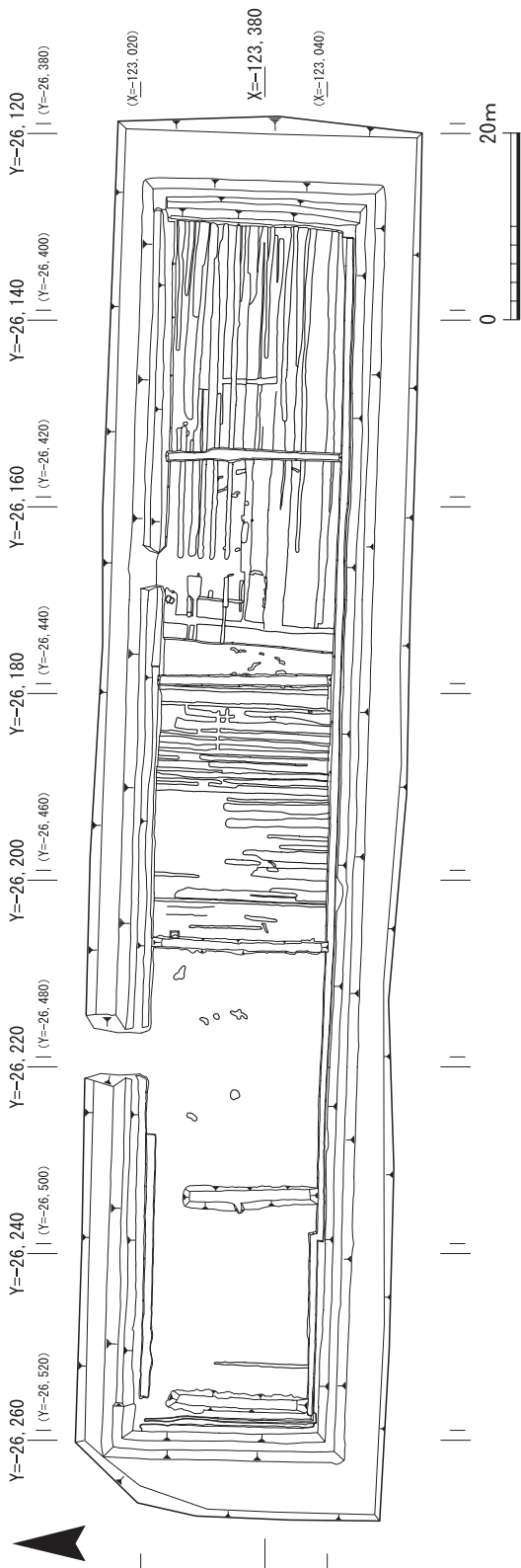
また、北壁断面で島畑1・4上面を覆う形で近世の遺物包含層である灰オリブ色シルト(13)を確認した。出土遺物から18世紀代の包含層であり、その上面に灰オリブ色シルト(10)や灰色シルト(11)で築かれた畔は18世紀代以降のものであることがわかった。

足跡(第14図) 溝状遺構S D03・05の底のオリブ灰色極細砂(24)の上面で、人間や動物の足跡を確認した。痕跡には、オリブ灰色シルト(23)が埋まっていた。最も良好に残る範囲を部分的に図示した。中には人間の足形のほかイノシシかシカと思われるものも確認できた。歩行の方向などを確認することはできなかった。

2)第2・3面：鎌倉時代～室町時代(第15図・図版第6～8)

第2面の遺構は、暗オリブ灰色極細粒砂(92)上面から素掘り溝群を掘り込む形で検出した。また畔S X19のほぼ真下から暗緑灰色粘土(89)を盛った畔を確認した。畔の規模は、幅1.0m、高さ0.4mを測る。また、南壁断面で素掘り溝3条を確認した。埋土はオリブ灰色粘土(84)・オリブ黒色シルト(86)・灰色粘質極細粒砂(88)である。溝の規模は、幅0.9～1.2m、深さ0.1～0.2mを測る。時期については、出土遺物がなく、島畑の下層での検出状況から室町時代あるいは鎌倉時代と考えた。

第3面の遺構は、東壁のオリブ黒色粘土(46)上面や南壁のオリブ黒色粘土(100・102)上面から掘り込む素掘り溝群である。溝内から土師皿や瓦器椀、羽釜など(32～45)が出土したことから、鎌倉時代～室町時代とした。また畔S X19の西方2.3mから、この時期の畔を検出した。その規模は、幅0.9m、高さ0.3mを測り、灰色細粒砂(96)とオリブ灰色細粒砂(97)を盛って築かれていた。平面では、断ち割り②西側から沿う形で検出した。



(数字)は、世界測地系。数字のみは日本測地系 ● 遺物出土地点 数字は報告番号
 第15図 遺構配置図(第3面)



(数字) は、世界測地系。 数字のみは日本測地系 ● 遺物出土地点 数字は報告番号
第16図 遺構配置図(第4面)

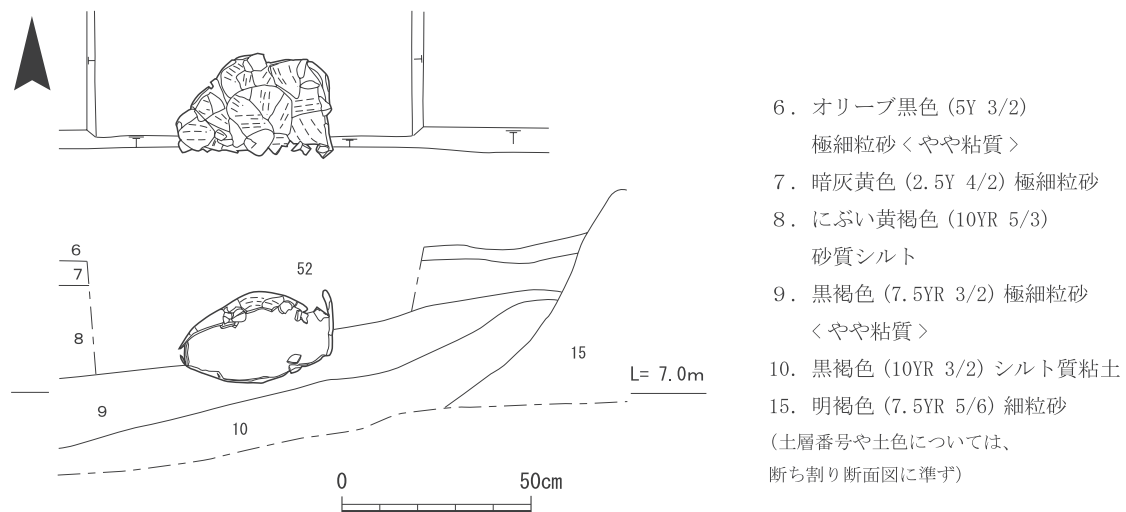
素掘り溝群は、この畔から東方は東西方向に、西方は南北方向に掘削され、調査地西側ではほとんど確認できなかった。これは西から東へ緩やかな傾斜面で検出したことによる。素掘り溝群は、東西方向のものが15条、南北方向のものが31条、合計46条を検出した。溝群は、一部重複して確認できたことから、長年にわたって掘削されたものとする。その規模は、東西方向の素掘り溝群が幅0.3～2.2m、深さ0.1～0.4mを測る。南北方向の素掘り溝群は、幅0.3～1.2m、深さ0.1～0.3mを測り、中には非常に幅の広い溝は幹線水路であった可能性もある。これら溝群の出土遺物に瓦質の羽釜(44・45)や土師器皿N(32～37)に混じって、皿S(38～40)の出土から鎌倉時代から室町時代とした。

3) 第4面：平安時代(第16図・図版第15)

古墳時代初頭の遺物を多く含む東壁のオリーブ黒色粘土(46・47)上面や南壁のオリーブ黒色粘土(100・102)層を除去して旧地形を出してきたところ、包含層中位から掘り込む溝群を検出した。検出した溝は29条で、大半が南北方向で幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.3mを測る。わずかに平安時代の遺物(48～51)が出土した。奈良時代後半のもの1点(47)も混入していた。この素掘り溝群に伴う畔の検出には至らなかったため、中世面のような区画(坪)が存在したかについては不明である。しかし、久世郡列栗郷内里名配置から里境が調査地内を通ると想定されること、また、男山東部の弘福寺領の広がりから、この付近は古くから計画的に開発されてきたことがわかる。

4) 古墳時代初頭(図版第9～11)

この時期の遺構の確認には至らなかったが、遺物包含層を検出した(下層包含層)。遺物は、調査地南側に広がる集落域出土のものと同時期の古墳時代初頭のもので大半で、廃棄された遺物と考えられる。包含層を除去すると、調査地全体が極細粒砂やシルト層となり、一部地震による噴砂や隆起を認めた。



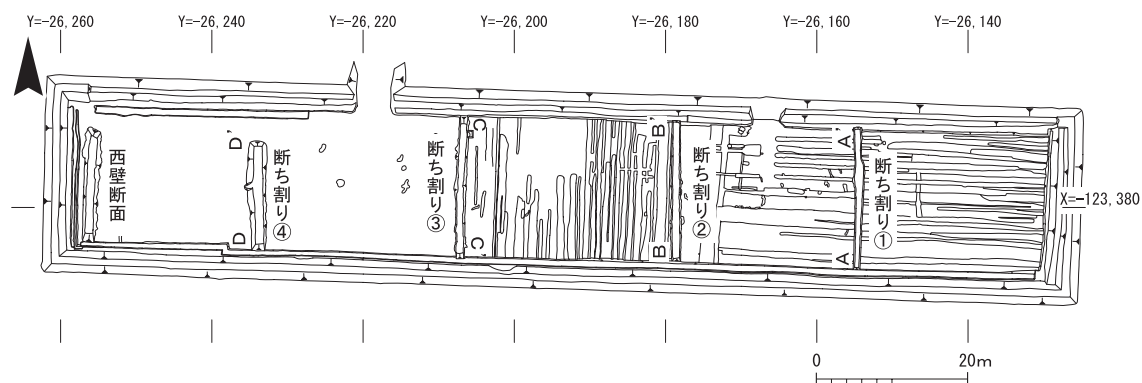
第17図 遺物出土状況図

5)地震痕跡(第16・19～21図、図版第16～18)

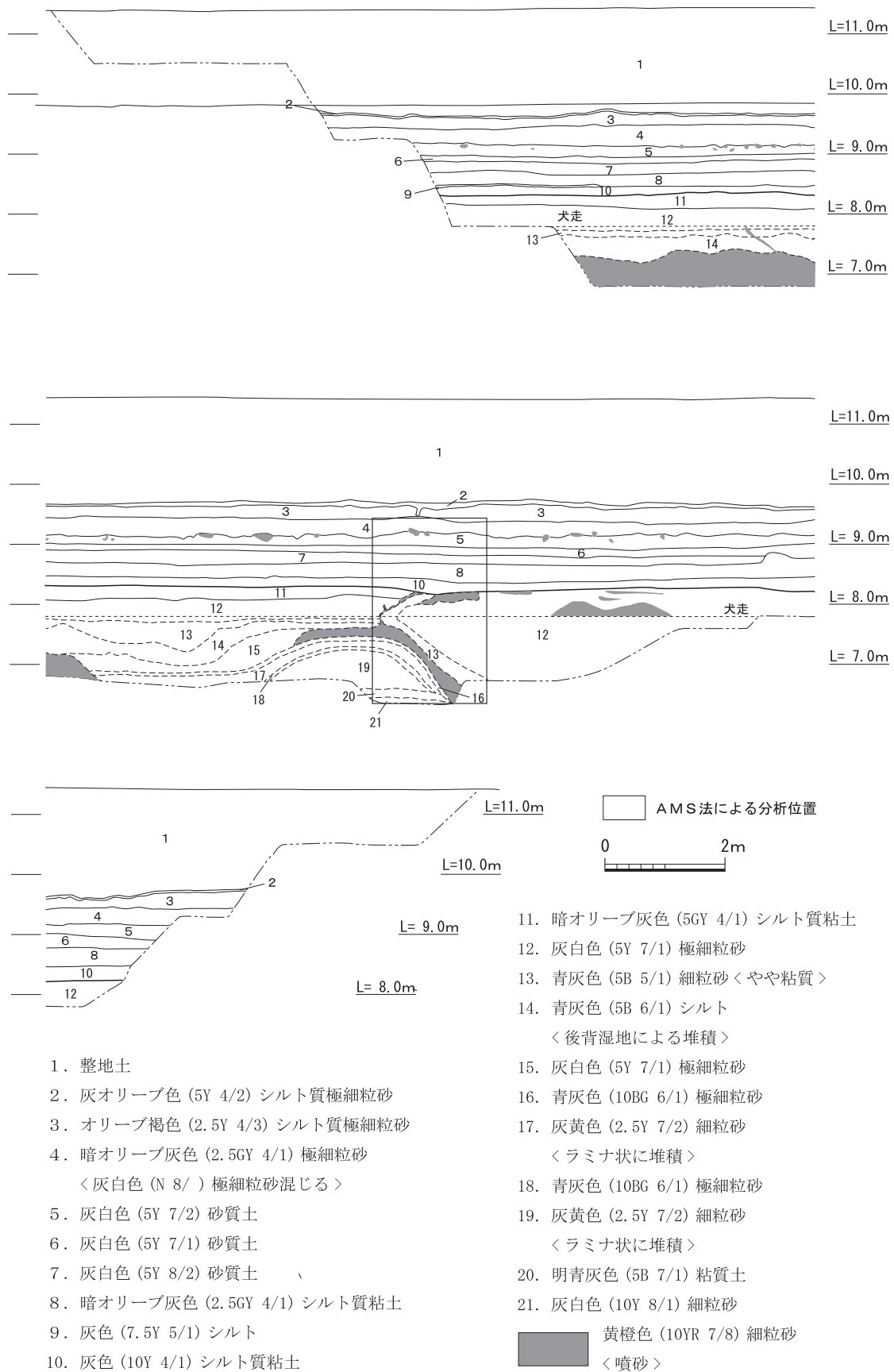
木津川河床遺跡では、これまでの調査で多くの地震痕跡が確認されてきた。今回の調査地の南側の昭和61年度調査地から平成13年度調査地にかけて噴砂や南北方向の地震による隆起が検出され、北側の平成6年度調査地や西側の平成12年度調査地では噴砂が検出された。今回の調査地においても同様の痕跡が確認でき、その遺存状況は非常に良好なものであった。

浄化センターが実施したボーリング調査の成果を参考にすると、最下層の遺構面である標高約8.0mから非常に硬い粘性土を挟在する洪積層の深さ約TP-5 mまでの厚さ13.0mは河川堆積である。河川堆積上面には、部分的に洪水によるラミナ状の堆積や、洪水の際または水の引く際に不定形に掘り込まれた痕跡が数か所で確認できた。こうした洪水層については、増田富士雄氏より男山・天王山の狭隘部での増水、逆流により起こった旧3河川合流付近からの洪水に伴うもののご教示を得た。長期にわたる河川堆積は、粘性土と層厚の砂質土が堆積し、長期間湿地であり、人が活動できる状況ではなかった。下層包含層が堆積し、河川堆積上に耕作地として利用され、平安時代以降、人の手が加わることになる。

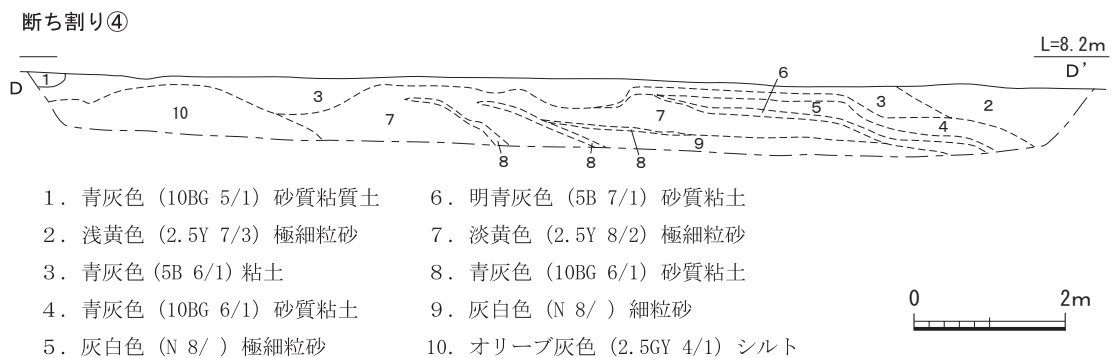
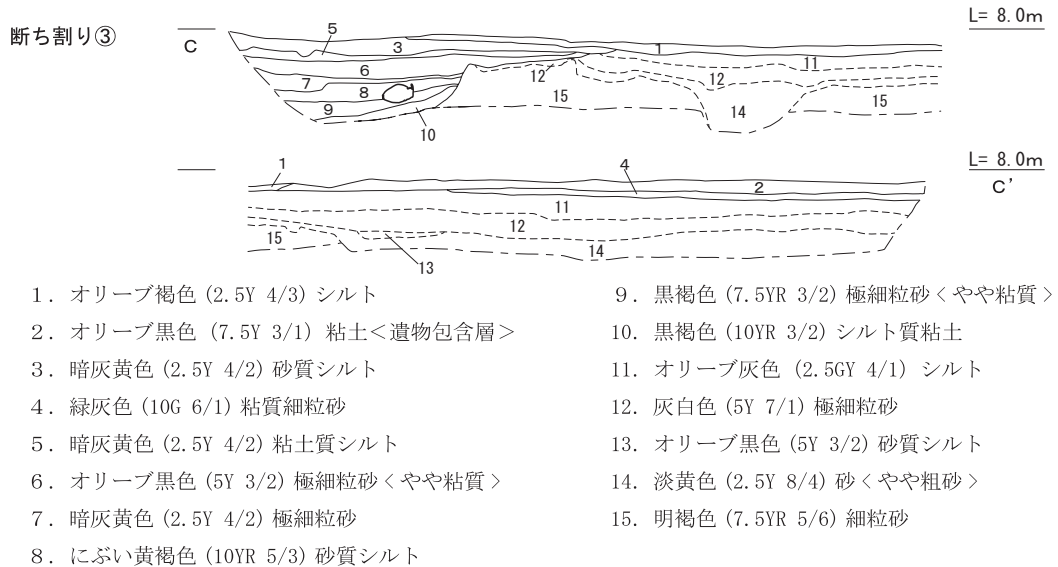
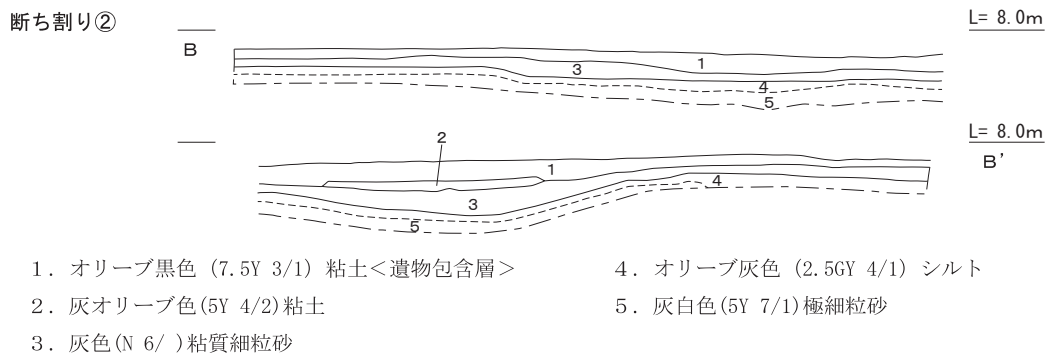
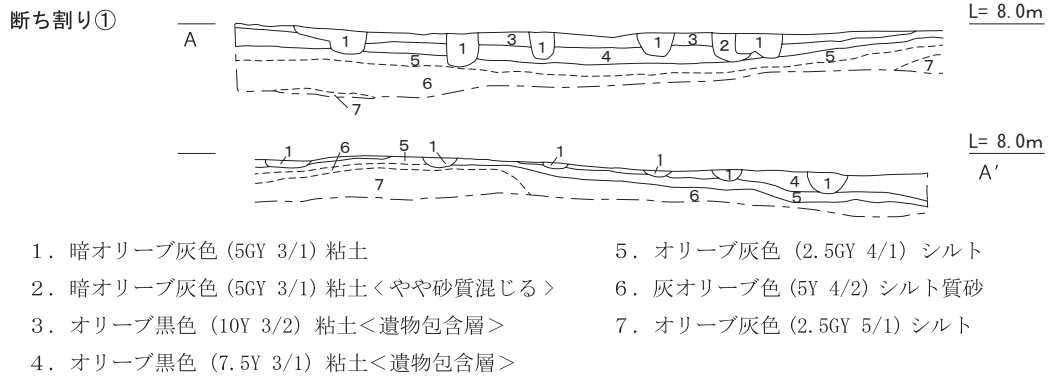
地震痕跡はいくつかの形で確認できた。その1つは、室町時代に造成された島畑を突き抜ける形で極細粒の砂が水によって押し上げられた液状化現象である。その経路は、非常に細いものであった。島畑上面を精査すると、極細粒砂が入るひび割れが亀甲形に全面に広がり、砂が吹き上がった状況が見てとれた(第19～21図・図版第16～18)。2つめは第16図の噴砂1～4の広範囲な吹き上げとそれに伴う亀裂による噴砂である。3つめは今回の調査地東側で確認した地面の隆起である。これらの痕跡は西壁断面や各断ち割り断面で顕著にみる事ができた。西壁断面では、島畑の溝状遺構 S D18の埋土が5層から10層で、島畑上面と5層上面が同じ標高となる。西壁付近には鎌倉時代や平安時代の遺構は遺存せず、12層以下は河川堆積となる。その堆積は、波状に隆起し黄橙色細粒砂を押し上げていた。その頂部から吹き上げる形で液状化が見られ、5層上面まで続く。そこで拳大に盛り上がった砂粒が数か所で確認できた。このことから島畑が完全に埋まった後に地震が起こったと考えた。また、下層の地形を大きく変える隆起は、昭和61年度、平成元・3年度、今回の調査地の東側で、2条平行する形で確認した。高さ約0.7mを測り、流路跡と誤認してしまうほどのものであった。各断ち割りからもシルト層や極細粒砂の隆起が認めら



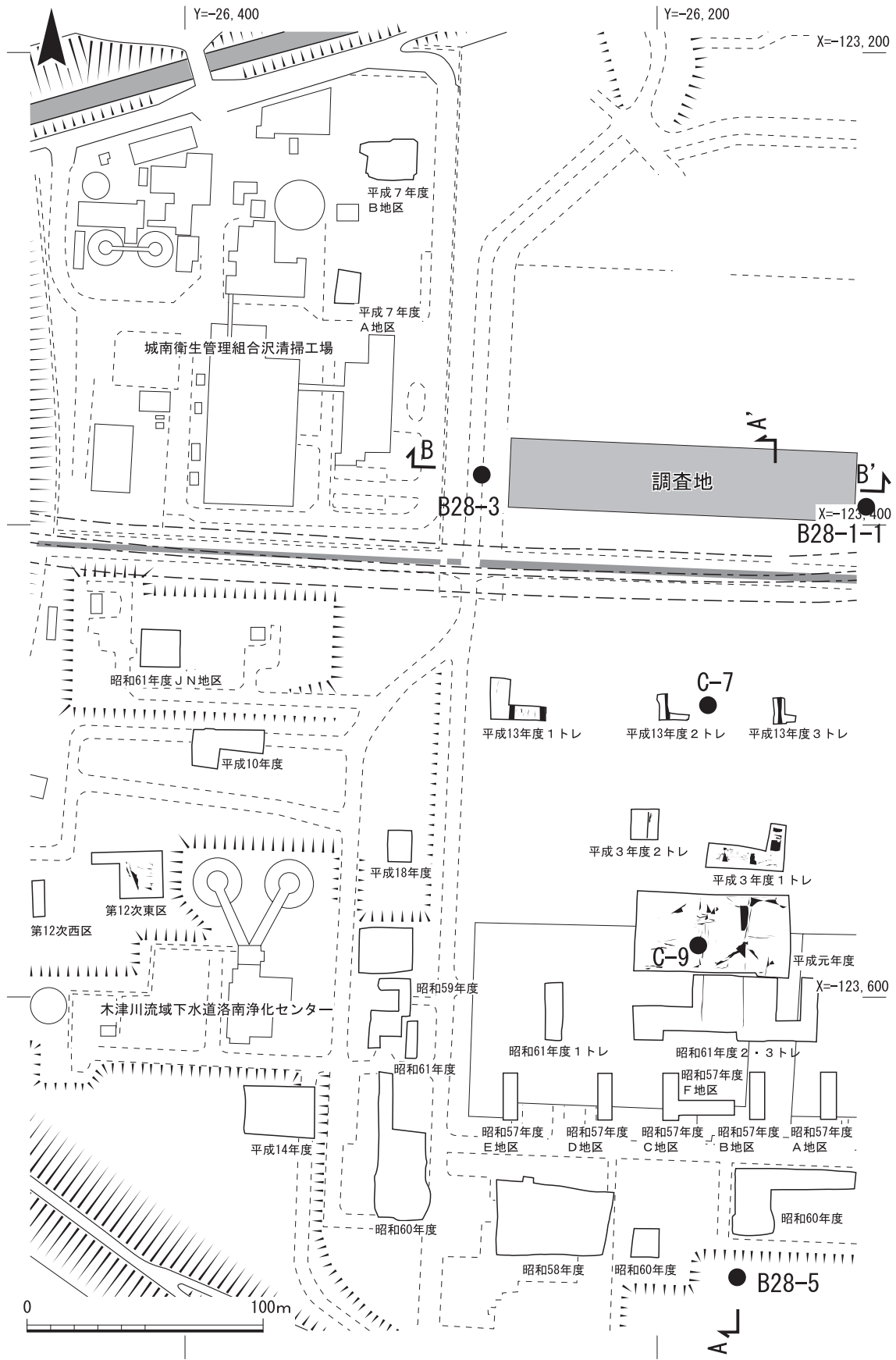
第18図 断ち割り位置図



第19図 西壁断面図



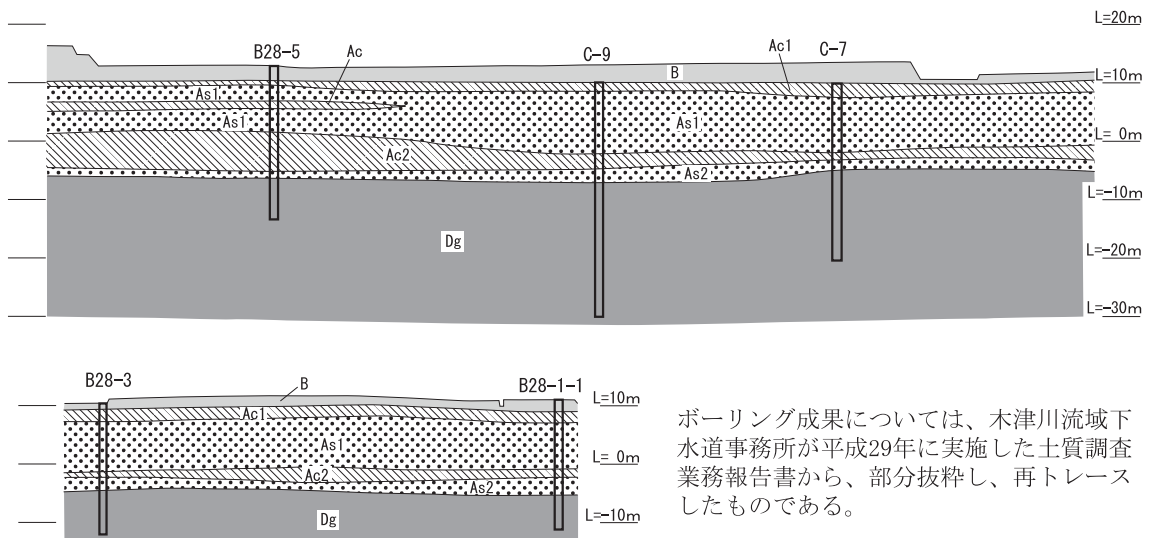
第20図 第4面断ち割り断面図



第21図 地震痕跡配置図及びボーリング調査位置図 (●はボーリング調査位置)

付表 2 調査地域の地質構成表

地層名	記号	土層	記事
盛土層	B	砂質土	<ul style="list-style-type: none"> ・細礫を混入した細～中砂で構成される。一部粘土分を含む。 ・洛南浄化センター全域に層厚 1～3 m 程度で分布している。
沖積層	Ac1	粘性土	<ul style="list-style-type: none"> ・シルト分が多く、非常に軟らかい。 ・連続性が良く層厚 2 m 程度でセンター内全域に分布している。
	As1	砂質土	<ul style="list-style-type: none"> ・細礫混じりの中砂を主として構成され、均質な細粒砂として構成される部分も認められる。 ・センター南部に 1 m 程度の粘性土が挟在する。
	Ac2	粘性土	<ul style="list-style-type: none"> ・シルト～砂質シルトで構成され、一部暗褐色の有機物を含む。 ・層厚 2～3 m 程度で連続性は良いが、0.3 m 程度と薄く分布する所もある。
	As2	砂質土	<ul style="list-style-type: none"> ・礫混じり中砂～粗砂を主として構成される。 ・Ac2 層下位に 2～3 m 程度の層厚で、センター全域に分布する。
洪積層	Dg	砂礫	<ul style="list-style-type: none"> ・径 1～30 mm 前後の礫を主体とした砂礫層。基質は粗粒砂である。 ・TP-4 ～ 5 m 付近より分布し、一部薄い粘性土が挟在しており、締まりが悪い部分が認められる。
	Dc	粘性土	<ul style="list-style-type: none"> ・Dg 層中に挟在する粘性土層。連続性は良く、硬さや濃度などの特性としては、非常に硬い粘性土として評価される。



第 22 図 地質断面図

れ、第17図に示す庄内式並行期の甕(52)の出土は、あたかも北へ落ち込む土坑状の掘形から出土しているかのように見えるが、甕南側の隆起によることがわかった。

周辺の調査において、寒川 旭氏は、おおむね室町時代から江戸時代にかけての時期の地震と考え、このような条件を満たす唯一考えられる地震は、文禄5・慶長元(1596)年9月5日の慶長伏見地震であり、『言経卿記』にその被害状況の記載があるとする。慶長伏見地震は、淡路島・高槻断層帯を震源とし、M7.0の規模の地震であった。しかし同規模の地震として、和歌山・京都を震源としM7.0の永正17(1520)年の永正地震や琵琶湖西岸を震源としM8.1の寛文2(1662)年の寛文近江・若狭地震など数回大規模地震が起きている。これらの地震の特定・裏付けをするた

め、層ごとに微量の炭サンプルを数か所から採取し、加速器質量分析法(AMS法)微量測定により、発生年代幅を狭めようと考えた。その結果については付編に記した。

6) 洛南浄化センター内の地質分布の検討(第21・22図、付表2)

流域下水道事務所は、E系水処理施設の建設に伴い、仮設排水を予定しているため、付近農業用井水への水位低下などの影響を見る上で、ボーリング調査を実施した。その結果、現地表からTP-30mまでの堆積状況が明らかとなっていることから、流域下水道事務所よりデータを借用し、部分的に抜粋した。^(注6)

洛南浄化センターの堆積状況は、下位から洪積砂礫層、沖積砂質土層、沖積粘土層が分布している。洪積層は、おおむねTP-4～-5m以深に堆積し、礫質土(Dg)が優勢である。礫質土層の中に層厚2m程度の粘性土(Dc)が他のボーリングか所から認められている。その上位には、層厚15m程度の沖積粘性土層(Ac1、Ac2層)と沖積砂質土層(As1、As2層)がTP7～8mまで互層状に堆積している。今回の調査で検出した遺構面は、この沖積層の上位にあたる。沖積層の上位には、層厚1～3m程度の施設造成等に伴う盛り土層が認められる。

洛南浄化センター南側については、Ac2層の層厚が5m程度と厚く、As1層の中に層厚3m程度の粘性土(Ac)が挟在しているなど、粘性土が主体的に堆積している。

(岡崎研一)

7. 出土遺物(第23～26図、図版第20～22)

1) 古代～近世の遺物

1～4は、島畑埋没後の灰オリーブ色シルト(第13図13)出土の遺物である。5～27は、第1面の島畑の調査中に出土したものである。28～31は、島畑中位の遺物包含層から出土したものである。32～46は、第3面の素掘り溝群から出土したものである。47～51は、第4面の素掘り溝群から出土したものである。52～72は、古墳時代初頭の遺物を多く含む下層包含層から出土したものである。^(注7)

1～3は、くらわんか茶碗で、18世紀代のものである。4は古瀬戸の皿で、16世紀後半のものである。

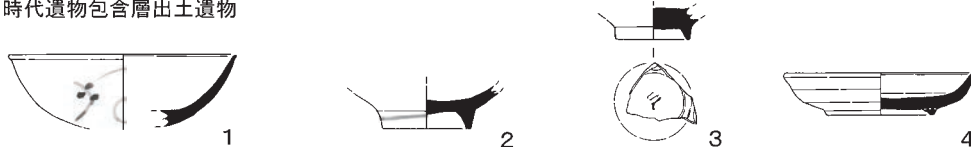
5・7～12は、土師器皿である。5は、口縁部が大きく外反する皿Sである。6は、瓦質土器の皿である。7～12は、口縁部が短く立ち上がる皿Nである。13～16は、瓦器椀である。内面や見込みに暗文を施す。14・15は、口縁端部内面に沈線を施し、樟葉産の瓦器椀である。13・16の高台は、断面三角形で低い。17は、東播系の須恵器すり鉢である。18は、瓦質土器のすり鉢である。19は、白磁椀である。20は、瓦質土器の脚付きの鉢あるいは盤である。21は、青磁椀である。22は、瓦質土器のミニチュア羽釜である。23は、瓦質土器の羽釜である。24は、瓦質土器の風炉である。透かしの形状は不明であるが、丁寧に面取りする。25は、瓦質土器の鉢と思われる。26は、瓦質土器のミニチュア壺である。口縁端部外面に1条の凹線が巡る。27は、洪武通寶である。

中国明朝の初期である洪武年間(1368~98)に鑄造された銅銭で、室町時代末期に日本に相当量輸入され、通貨として使用された。これらの遺物は、室町時代後半~末期にかけてのものとする。

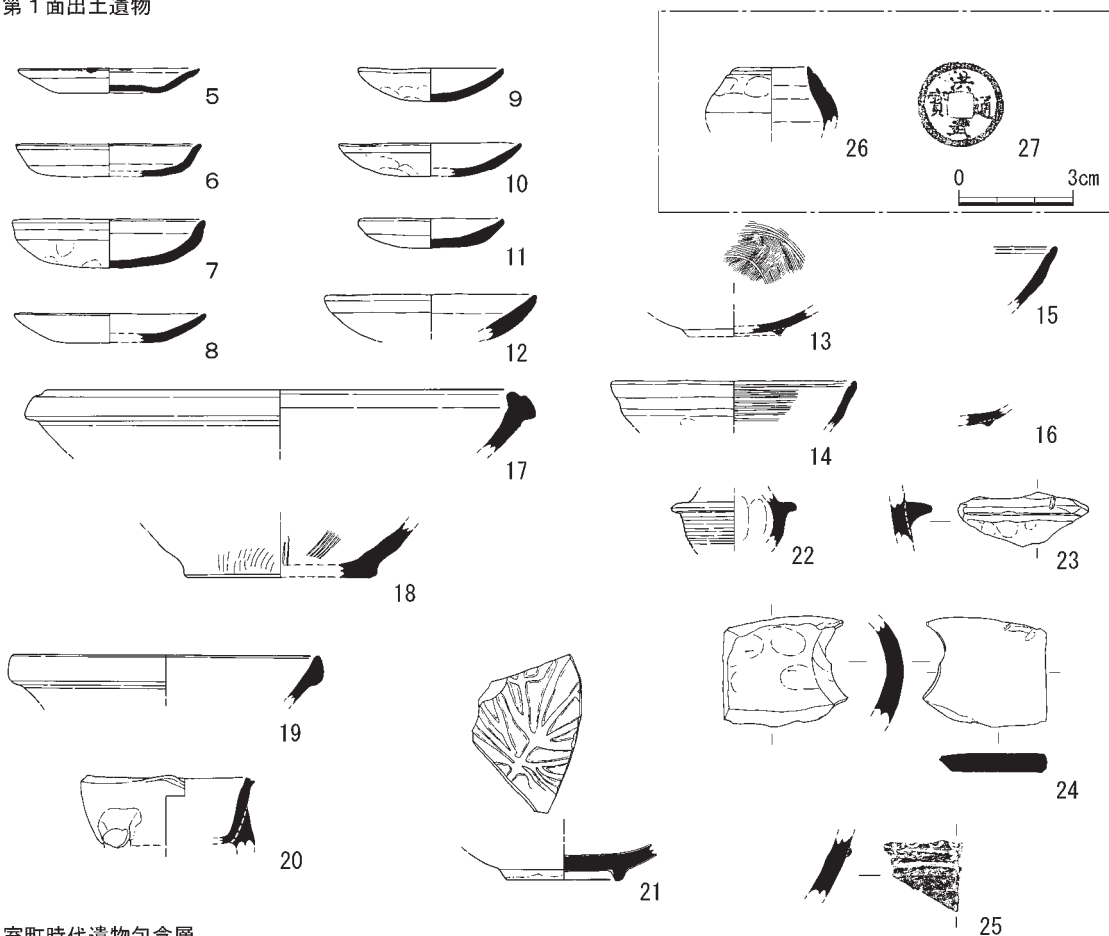
28は、灰釉系陶器碗である。15世紀代のものと思われる。29は、白磁碗で高台内側に「吉○」と墨書される。輸入品である。30は、播磨産の須恵器鉢である。31は、瓦質土器の鍋である。

32~40は、土師器皿である。32~37は、口縁部が短く立ち上がる皿Nである。38~40は、口縁

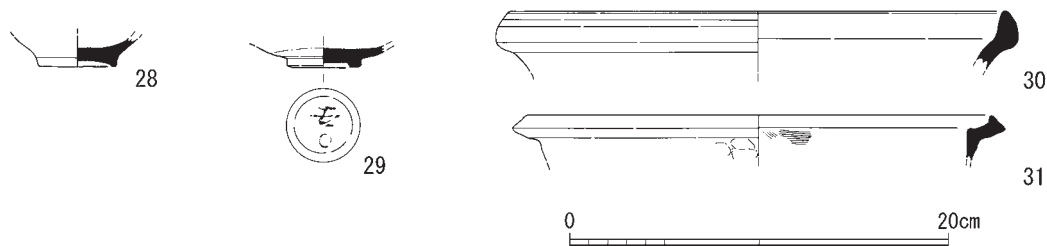
江戸時代遺物包含層出土遺物



第1面出土遺物



室町時代遺物包含層



第23図 出土遺物実測図(1)

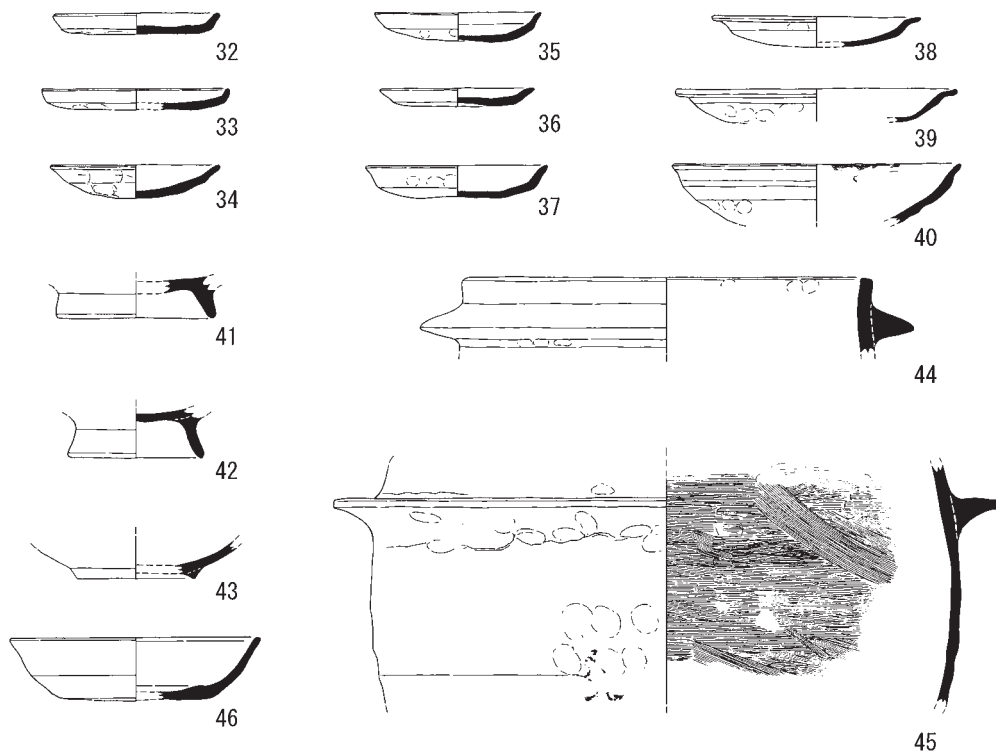
部が大きく外反する皿Sである。41・42は台付皿の高台部である。43は、瓦器椀の高台部である。断面三角形を呈する。44・45は、瓦質土器の羽釜である。44は、口縁部が真上に立ち上がり、45は、口縁部がやや内傾する。46は、須恵器杯Aである。体部内外面はロクロナデ成形し、底部はヘラ切り痕が残る。これらの遺物は、鎌倉時代～室町時代にかけてのものであり、46のみ奈良時代の遺物で、混入と考える。

47は、須恵器杯Bで高台を貼り付ける。48・49は、須恵器壺である。底部外面に糸切り痕が残る。50・51は、緑釉陶器椀の底部である。高台は、削り出しによる。50は内面に淡緑色の釉薬を施し、51は内外面を濃緑色に施す。

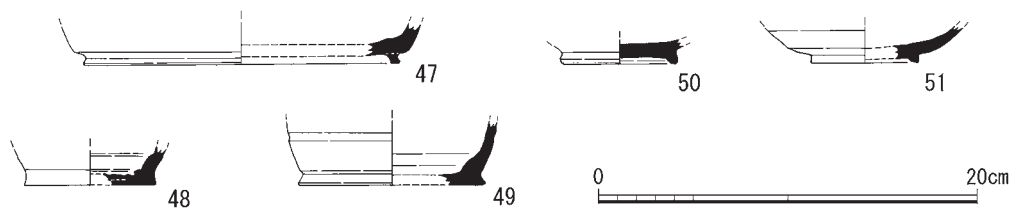
2) 古墳時代の遺物

古墳時代初頭～前期の土器群(52～72)は、洪水によると推定される落ち込みや下層包含層から出土した。下層包含層資料のうち、調査区東部の基盤土直上に堆積する茶褐色粘質土層出土資料

第3面出土遺物



第4面出土遺物



第24図 出土遺物実測図(2)

は、下層包含層の最下層から出土した資料群である。

52は、西部断ち割り包含層から出土した弥生系タタキ成形甕である。調査区西部断ち割りの下層包含層から出土した。口縁部を欠損するが、外反する単純口縁をなし、体部残存高約37.5cmを測る大形品である。体部最大径は中位にあり、体部径に比して矮小化した底部をもつ。外面は右上がりのタタキ調整を施し、のちハケ状工具あるいは植物繊維の結束具によるナデ調整が一部に認められる。体部中位下半に横方向に指頭圧痕を顕著に施し、分割整形痕を消している。内面は、下位は斜め下から上へ、中位から上位は、横方向のハケ調整を基調とする。胎土は、花崗岩組成をなし、色調はにぶい黄橙色を呈する。底部は焼成後の穿孔がなされ、単体で出土していることから、土器棺として用いられた可能性がある。時期は、体部最大径が中位にあることや、底部の矮小化が顕著であることから、山城土器編年^(注8)の佐山Ⅱ式後半(庄内式新相～布留式最古相)の古墳時代初頭に帰属する資料である。

53は、下層で検出した洪水による落ち込みから出土した布留形甕の口縁部である。口縁部は、直線的に斜め上方へ延び、口縁端部は肥厚し、面をなす。肥厚する口縁端部が面をなし、器壁に厚みがみられることから、古墳時代前期前葉の資料とみられる。

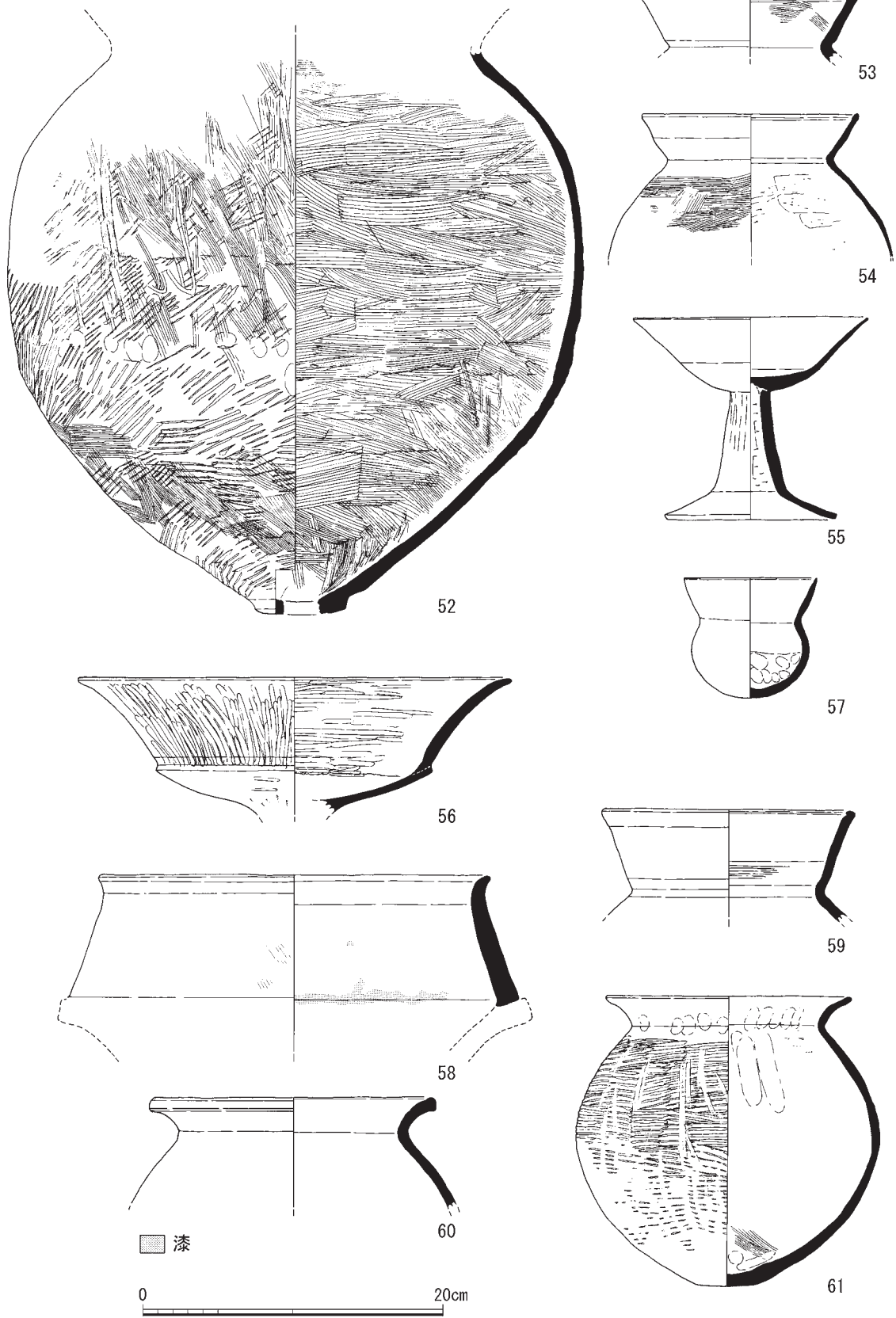
54～56は、東部断ち割りの包含層最下層の茶褐色粘質土から出土した。54は、布留形甕である。口縁部は、頸部径に比して、長く立ち上がる口縁をなし、端部に段をなす。外面には、口縁部に横方向の丁寧なナデを、肩部に横方向のハケを施し、内面にケズリ調整を施す。胎土は、全体に微細な砂粒を基調とし、石英・長石のほか、チャート・泥岩などの堆積岩類を含む。器壁が薄く、口縁部が長く拡張すること、肩部外面に横方向のハケ調整が顕著であることから、古墳時代前期初葉の佐山Ⅱ-4式～Ⅲ-1式にかけての資料とみられる。55は、杯底部外面に刺突痕をもつ山陰系高杯である。杯部は深く、明瞭な稜をもたず緩やかに立ち上がり、細い脚柱部をなし、裾部は緩やかに外反して開く。摩耗が著しいが、杯部調整は、内外面ともにナデ調整とみられる。胎土は精良で、灰白色を呈する。およそ古墳時代前期前葉の佐山Ⅲ-1～2式に帰属する資料である。56は、高杯の口縁部である。杯部に明瞭な屈曲をなし、口縁部が大きく斜め上方に開く。口縁部の内外面はミガキ調整によるが、外面は縦方向のミガキを、内面に横方向のミガキを施す。時期は、古墳時代初頭の佐山Ⅱ式後半の資料とみられる。

57は、東部断ち割りの包含層下層で出土した小形丸底壺である。やや短い口縁部に深い体部をなす。摩耗が著しく、外面調整は不明である。胎土は精良で、色調は橙色を呈する。口径が器高、体部最大径よりも大きく、古墳時代前期前葉の佐山Ⅲ式前半の資料とみられる。

58～72は、調査区各所(付表3参照)の下層包含層から出土したものである。

58～60は、壺である。58は、大形複合口縁壺の口縁部であり、大きく内傾する口縁をなす。頸部を欠損するが、口縁基部の剝離痕から、頸部と口縁の接合部が擬口縁状をなす形態とみられる。口縁端部は内傾して面をなし、口縁外面は、摩耗が著しいが、斜め縦ハケのちミガキを施す。口縁内面下部には、黒褐色の樹脂状の被膜が一部残存し、漆の塗布あるいは炭化物が意図的に吸着されたものと推定される。こうした複合口縁壺にみる口縁内面の樹脂状被膜は、讃岐系壺に特徴

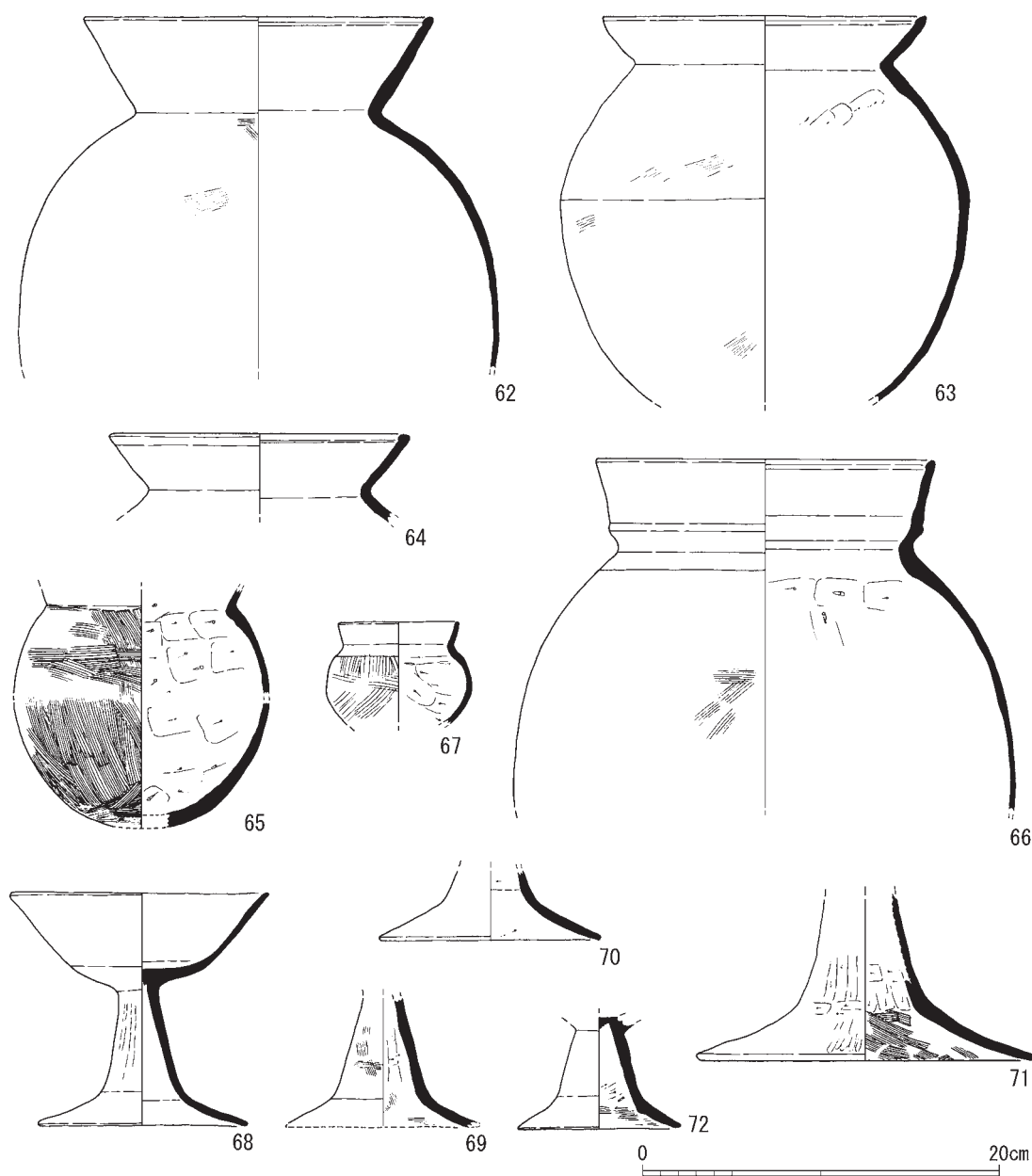
下層包含層出土遺物



第25図 出土遺物実測図(3)

的なものであるが、胎土は、チャートや泥岩など、堆積岩類を基調とするものであり、模倣土器の可能性もある。時期は、古墳時代前期前葉の佐山皿式前半の所産と推定する。59は、短頸直口壺の口縁部である。口縁部の立ち上がり角度が大きく、また口縁部が頸部径に比してやや長く拡張する。口縁端部は肥厚し、口縁外面には横方向のナデを施し、体部内面はケズリ調整を施す。古墳時代前期前葉に帰属する。60は、短頸壺ないしは甕である。短く外反する単純口縁をなす。端部内面は強い横方向のナデを施し、端面にやや厚みをなす。摩耗が著しいが、内外面ともにナデ調整が認められる。色調は、橙色をなし、胎土にチャート・泥岩などの堆積岩類を含む。

61～66は、甕である。61は、単純口縁をなすタタキ成形甕である。タタキ条痕は、細筋化の傾



第26図 出土遺物実測図(4)

向にあるが、底部は平底をなす弥生系の甕である。体部外面は右上がりのタタキを施し、体部下半はタタキのち斜め縦方向のナデを施す。内面はハケのちナデ調整によるが、口縁部内面上部には口頸部成形時の接合痕を消すためとみるケズリ痕を残す。色調は、にぶい橙色をなし、胎土は石英・長石のほか、堆積岩類を含む。佐山Ⅱ式後半の古墳時代初頭に帰属する甕である。62は、口縁部が長く直線的に拡張し、肩部が大きく張るもので、口縁部形態は直口壺との折衷的な要素をもつ。内外面ともに摩耗が著しいが、外面はハケのちケズリ、内面はケズリ調整による。63・64は、短い口縁をなす布留形甕である。63は、やや内湾する口縁をなし、体部最大径を中位にもつ。外面は一部にハケ調整を残し、内面はケズリ調整を施す。64は、直線的に延びる口縁を特徴とする。62～64は、胎土にいずれもチャート・泥岩などの堆積岩類を含む。63は佐山Ⅲ-2～3式、64は佐山Ⅲ-1式におよそ帰属する。65の小形甕は、口縁部を欠損するが、体部外面肩部に特徴的な横方向のハケを施すこと、また内面に顕著なケズリ調整を施すことから、布留形甕とみられる。66は、複合口縁甕である。口縁部は上方に大きく拡張し、端部内面は肥厚する。体部外面にハケ調整を、内面にケズリを施す。色調は、淡黄褐色を呈し、胎土は石英・長石のほか、堆積岩類を含む。山陰系複合口縁甕であるが、布留式の主要組成を構成する甕であり、佐山Ⅲ-2～3式前半、古墳時代前期中葉に帰属する資料である。

67は、小形壺である。短く立ち上がる単純口縁をなす。外面にハケ調整を、内面にケズリを施す粗製の壺である。色調は、にぶい橙色を呈し、胎土にチャート・泥岩などの堆積岩類を含む。

68～72は、高杯である。68は、杯部中央外面に、刺突痕をもつ山陰系の手法をもつ高杯である。杯部は深く、脚部は裾部で大きく外方に開く。摩耗が著しいが、内外面ともにナデ調整を基調とする。色調は、灰白色を呈し、胎土には赤褐色の焼結粒子を含む。69～72は、いずれも高杯脚部であるが、脚径が大きく裾部で緩やかに開く脚部をなすもの(69～70)と脚径が小さいもの(71)、さらに脚高が短く、裾部内面に明瞭な稜をなすもの(72)がある。時期は、68が山陰系の手法をもち、布留式中相の主要組成を構成する形式である一方、70は庄内系高杯であり、時期幅をもつ。

以上から、包含層資料のうち、調査区東部を中心に検出した基盤土直上に堆積する茶褐色粘質土層出土資料は、佐山Ⅱ-3式～佐山Ⅲ-1式(庄内式新相～布留式古相)の古墳時代初頭～前期中葉に帰属する。一方、調査区各所で出土した下層包含層資料は、高杯などにさらに新しい要素を示す資料があることから、佐山Ⅱ-3式～佐山Ⅲ-2式(庄内式新相～布留式中相)の資料を含む。全体としておよそ古墳時代初頭から前期中葉に帰属する資料として位置づけられよう。

(岡崎研一・高野陽子)

8. まとめ

1) おもな検出遺構

今回の調査では、調査地全体に広がる中世の耕作地 2 面と古代の耕作地 1 面を検出し、平安時代から室町時代におもに耕作地として活用されたことが判明した。また、古代～中世の遺構面の下位から、奈良時代～平安時代の遺物包含層と古墳時代初頭の遺物包含層を検出した。これまで、木津川河床遺跡の古墳時代初頭～前期の集落域は、調査地南東の平成元年及び平成10年調査地を中心に想定されてきたが、今回の調査で遺物包含層を確認したことから、集落域は調査地南側近接地まで及んでいたと推定される。

古代から中世の遺構としては、第 1 面で、中世後期の室町時代の島畑を検出した。第 2・3 面において、鎌倉時代～室町時代にかけての素掘り溝群を検出した。さらに、第 4 面では、平安時代後期と推定される素掘り溝群を検出した。既往の調査において、耕作に伴うとみられる平安時代の素掘り溝群が検出されたのははじめてである。包含層中からは、8 世紀中頃の奈良時代の遺物も出土しており、当該期の遺構もまた近在した可能性がある。

2) 古代から中世の土地開発

『倭名類聚抄』の奈良園 調査地は、第 3 図で示したように、『倭名類聚抄』にみえる生津・際目・美豆(美津)郷に近接している。『倭名類聚抄』には平安後期の山城国奈良園(奈良荘)に関する記述があり、「今、綴喜郡に属し、上奈良・下奈良・八幡・河原・川口・生津・際目・美豆の七邑にわたる」とみえる。今回の調査では、平安時代後期の素掘り溝群を検出しており、耕作地として土地利用されていたと推定されるものであり、『倭名類聚抄』の記述から、調査地一帯が奈良園に含まれていた可能性がある。奈良園は、「その広さ六町八段三百二十歩で、瓜・茄・大根を進ず」とあり、ここでの生産品は東大寺や公事として石清水八幡宮へ納められ、中世には麓で座として売買されたとされ、生産品の一端を窺い知ることができる。^(注9)

中世の開発 中世の遺構のうち、第 2 面で検出した素掘り溝群は、調査区西部では南北方向に、東部では東西方向に掘削され、調査区の東西で主軸が異なる。また、その後に造成された室町時代後半から末期の島畑もまた、その主軸を踏襲していることが明らかとなった。調査区中央東寄りで見出した畔にその境界があり、この地点が坪境であったと推定される。素掘り溝や島畑は、坪ごとに方向を変えて造られたとみられ、坪境の畔は、今回の調査によって鎌倉時代から室町時代にかけてほぼ同じ地点において繰り返し築かれていたことが判明した。この場所は、奈良時代に整備された久世郡の 12～13 条 9 里の紋屋里・難田里の里境に相当するとされる。^(注10) このことから、一帯の中世の地割が古代の地割に由来するものであり、古代から近世にかけて、地割に大きな変動なく耕作されてきた可能性が高い。

今回の調査地は、平安時代中期に石清水八幡宮がこの地に遷座し、12 世紀代に中世都市として発展する過程で形成された石清水八幡宮の八幡八郷のうち、町場である内四郷と木津川の旧流路の間の氾濫原に位置するとみられる。検出した鎌倉時代から室町時代にかけての耕作地は、内四

郷の外縁部に形成された集落と耕作地からなる外四郷の一面である可能性が高く、こうした耕作地の新たな開発は石清水八幡宮の社領地の拡大を示すものとみられる。

島畑の造成 島畑については、一般的に田の一筆一筆の内部に、田の土を高さ2尺ばかり盛り上げて畑にしたものとされ、俗に掻揚田^{かきあげた}、高畑^{はねぼた}、芻畑^(注11)、掘下田など様々な呼称で示される。その規模に関して、金田章裕氏は、永享8(1436)年「摂津国仲牧興楽寺田畠目録」に記載があるとし、一段の半分の180歩が畠、残り180歩が田であるとする^(注11)。また、同様の規模についての記載は、永仁6(1298)年の「西大寺本検注目録」にもあり^(注12)、右京一条二坊十一坪に「二反内半畠」、右京一条三坊二坪に「一反内大畠小田」、一条北辺三坊二坪に「一反内田半畠半」^(注12)「同東路一反内半田半畠」などの記載が確認できるとして、島畑は半田・半畠が基本とされる。一方、島畑の形成時期については、長保3(1001)年の「山城国禪定寺田畠流記帳」に記された久世郡と綴喜郡に広がる禪定寺領に、一筆すべてが畠として使用され、半田半畠とする記述がないことから、11世紀初頭の段階には、島畑としての農業景観はまだ形成されていなかったと考えられている。こうした文献史料に加えて、古代においては、畠は律令国家の直接的な貢租徴収対象でなく、田に比べてその評価は低く、意識的に田と畠を分離して島畑を造成する必然性はないとされ、島畑の形成時期は中世以降の13世紀から14世紀頃に求めるのが妥当されるところである^(注13)。

今回の調査における第1面の島畑の時期は、出土土器及び層位からおよそ室町時代後半～末期のものとして推定され、調査地周辺においては、中世前期には、島畑はまだ取り入れられていなかったことが判明した。また、島畑の成因については、地表勾配が緩く、地表の起伏が小さい地域において、水位の低い用水源を確保するために構築されたとする説があるが^(注14)、検出した島畑には比高差があり、周辺で確認されている島畑とほぼ同じ標高で築かれており、島畑を取り入れた要因は、水位の低い用水源の確保が主たる目的であったとみられる。

3)大規模な地震痕跡の検出

今年度調査では、地震液状化に伴う噴砂や地震による褶曲を検出したが、その検出状況は過去の本津川河床遺跡の調査に比べ極めて良好であり、調査地西壁の層位の一部剥ぎ取りを実施したところである。噴砂の状況を詳細に観察したところ、西壁北部では時期の異なる4回の噴砂を確認することができた。これらについては、地震の特定・裏付けをするために層ごとの放射性炭素年代分析と液状化部のスペクトル解析を実施し、古いものから縄文時代前期～中期、鎌倉時代、鎌倉時代～室町時代、安土桃山時代～江戸時代と推定される地震痕跡が確認された(付論参照)。

これらの4時期の噴砂に伴うとみられる地震は、最も古い縄文時代と推定される地震を除けば、鎌倉時代の地震の候補として、京都でM5以上とされる寛元3(1245)年・正安元(1299)年地震を、室町時代の地震としては、正平5(1350)年のM6の地震や明応7(1498)年のM8.4の地震が挙げられる。さらに、最も新しい噴砂を生じた地震として、安土桃山時代～江戸時代の文禄5・慶長元(1596)年9月5日の慶長伏見地震(淡路島・高槻断層帯を震源とするM7.0の規模)が候補に挙げられる。慶長伏見地震ののち、江戸時代前期には、寛文2(1662)年に寛文近江・若狭地震がM7.6規模

で発生しているが、現状では京都盆地の中でも北部を中心に確認されていることから、木津川河床遺跡で確認した噴砂は慶長伏見地震によるものと推定する。

今回の調査では、縄文時代～江戸時代にかけての地震痕跡が同一断面で観察することができた。液状化に伴う噴砂の供給層からの状況が明らかとなり、このような事例は近畿地方でもほとんど例がなく、考古学的な成果だけでなく、防災の視点から過去の地震の発生や規模の状況を検証するうえで、貴重な資料を得ることができた。

(岡崎研一・高野陽子)

- 注1 榊井豊成「女郎花遺跡第2次発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第21集 八幡市教育委員会) 1996
赤松一秀「女郎花遺跡第2次発掘調査概報」(遺物編)(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第23集 八幡市教育委員会) 1997
大洞真白「女郎花遺跡(第11-2次)発掘調査報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第53集 八幡市教育委員会) 2009
- 注2 注1と同じ
- 注3 大洞真白ほか「木津川河床遺跡(第24次)発掘調査報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第59集 八幡市教育委員会) 2013
- 注4 八十島豊成「清水井遺跡発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第29集 八幡市教育委員会) 2000
- 注5 藤本史子「中世都市 八幡」(『会報第71号 八幡の歴史を探究する会講演会資料』) 2016
大洞真白「木津川河床遺跡第19次(八幡山路53-2他)発掘調査報告書—石清水八幡宮門前町跡の調査」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第47集 八幡市教育委員会) 2008
小森俊寛ほか「石清水八幡宮境内調査報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書』第56集 八幡市教育委員会) 2011
徳永健太郎「中世八幡宮寺領一覧稿」(『早稲田大学高等学院研究年誌』第61号) 2017
- 注6 「木津川流域下水道洛南浄化センター土質調査業務 報告書」日本工営株式会社 2017
- 注7 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』(有)京都編集工房 2005
- 注8 高野陽子「1. 弥生時代後期～古墳時代の土器様相」(『京都府遺跡調査報告書(佐山遺跡)』第33冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注9 八幡市誌編纂委員協議会『八幡市誌』第二巻 八幡市 1980
京都大学文学部国語学国文学研究室『諸本集成倭名類聚抄[外篇]—日本地理志料』臨川書店 平成15年 地理志料巻一 二十九・三十 那羅(奈良)の項
- 注10 高橋美久二「城陽の条里遺構」(『城陽市史』第1巻 城陽市役所) 2002
八幡市誌編纂委員協議会『八幡市誌』第二巻 八幡市 1980
- 注11 金田章裕「条里制施行地における島畑景観の形成」(『地理学評論』49-4) 1976
- 注12 「西大寺本検注目録」(『鎌倉遺文』古文書編第十巻) 1990
「大和西大寺田園目録」(『鎌倉遺文』古文書編第二十六巻) 1990
- 注13 前掲注11に同じ。
- 注14 竹内常行「島畑景観の分布について」(『地理学評論』41-4) 1968

付表3 出土遺物観察表

報告番号	種類	器種	地区割	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
1	磁器	くらわんか茶碗	2d	江戸包含層灰オリーブ色シルト	(12.0)	(3.8)	-	1/12	素地：灰白色(2.5GY8/1)釉調：灰白色(5GY8/1)	精良	内外：施釉	
2	磁器	くらわんか茶碗		江戸包含層灰オリーブ色シルト	-	(1.9)	4.6	4/12	明緑灰色(10GY8/1)	密	内：施釉 外：施釉	
3	磁器	くらわんか茶碗	2d	江戸包含層灰オリーブ色シルト	-	(1.7)	(4.0)	1/12	素地：灰白色(2.5GY8/1)釉調：明緑灰色(10GY8/1)	精良	内・外：施釉	
4	陶器	古瀬戸・皿	2d	江戸包含層灰オリーブ色シルト	10.0	2.3	5.6	3/12	素地：灰白色(2.5Y8/2)釉調：浅黄色(2.5Y7/4)	密	内：ナデ 外：ナデ・貼付高台・施釉	
5	土師器	皿S	2C	1面溝状遺構SD06	9.5	1.3	-	1/12以下	灰白色(5Y8/1)	密	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	口縁端部に煤付着
6	瓦器	皿	2B	1面溝状遺構SD05	9.8	(1.7)	-	2/12	暗灰色(N3/0)	密	内：ヨコナデ・ミガキ 外：ヨコナデ、ナデ・ユビオサエ	
7	土師器	皿N	2c	1面溝状遺構SD06	10.2	2.6	-	3/12	浅黄色(2.5Y7/3)	密	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデ・ユビオサエ	
8	土師器	皿N	2F	1面溝状遺構SD14	10.0	1.6	-	1/12	にぶい黄橙色(10YR7/3)	密	内：ナデ 外：ナデ	鉄付着のため調整?
9	土師器	皿N	1A	1面溝状遺構SD01	7.6	1.8	-	5/12	浅黄橙色(10YR8/3)	密	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	
10	土師器	皿N	1D・1E	1面溝状遺構SD10北壁	9.5	1.6	-	3/12	にぶい黄橙色(10YR7/3)	密	内：ヨコナデ、ナデ・ユビオサエ 外：ヨコナデ、ユビオサエ	外面工具痕か？擦れ？
11	土師器	皿N	-	1面鳥畑7(SX13)	7.6	1.6	-	2/12	浅黄橙色(10YR8/3)	密	内：ヨコナデ・不定方向ナデ 外：ヨコナデ・不調整	
12	土師器	皿N	2D	1面鳥畑5(SX09)	11.0	(2.4)	-	1/12	浅黄色(2.5Y7/3)	密	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	
13	瓦器	碗	2B	1面溝状遺構SD05	-	(1.3)	(4.8)	1/12以下	灰色(N4/0)	密	内：ハケのち暗文 外：貼付高台	
14	瓦器	碗	2B	1面溝状遺構SD05	12.8	(2.5)	-	1/12	灰色(7.5Y6/1)	密	内：ヨコナデ、沈線、ミガキ 外：ヨコナデ、ナデ・ユビオサエ	
15	瓦器	碗	1cd	1面溝状遺構SD08	-	(3.3)	-	1/12以下	灰色(5Y4/1)	密	内：ナデ・ミガキ 外：ナデ・ミガキ	
16	瓦器	碗	2D	1面鳥畑5(SX09)	-	(0.7)	-		灰色(N4/0)	密	内：マメツ 外：高台貼付、ナデ	
17	須恵器	すり鉢	2D	1面鳥畑5(SX09)	(24.0)	(3.3)	-	1/12以下	灰白色(7.5Y7/1)	密	内：ナデ、回転ナデ 外：ナデ、回転ナデ	重ね焼痕あり 東播系か
18	瓦質土器	すり鉢	1e	1面鳥畑3(SX11)	-	(2.5)	9.8	1/12	外：灰白色(2.5Y7/1) 内：浅黄橙色(7.5YR8/3)	密	内：ナデ・擦り目 外：ユビオサエ、ハケ	
19	白磁	碗	2B	1面溝状遺構SD05	(16.0)	(2.6)	-	1/12	素地：灰白色(N8/0)釉調：灰白色(7.5Y7/1)	精良	施釉	
20	瓦質土器	脚付き鉢	1c	1面溝状遺構SD06	(9.0)	(3.6)	-	2/12	灰白色(2.5Y8/2)	密	内：ナデ 外：ヨコナデ、ナデ・ユビオサエ	
21	青磁	碗	2C	1面精査	-	(1.8)	6.2	6/12	釉調：明緑灰色(5G7/1) 素地：灰白色(10Y8/1)	密	内：施釉 外：施釉	
22	瓦質土器	ミニチュア羽釜	1D	1面溝状遺構SD08	<6.6>	(3.0)		羽部(2/12)	内：灰黄色(2.5Y6/2) 外：黒色(N1.5/0)	密	内：ユビオサエ 外：沈線	
23	瓦質土器	羽釜	1c	1面溝状遺構SD06	-	(2.5)	-	0.5/12	灰色(N5/0~2/0)	密	内：ハケ 外：ヨコナデ、ユビオサエ・ナデ	
24	瓦質土器	風炉	1de	1面溝状遺構SD10	-	-	-	0.5/12	灰色(10Y4/1)	密	内：ケズリのち強いナデ 外：ハケ、ナデ	
25	瓦質土器	鉢	1F	1面溝状遺構SD14	-	-	-	0.5/12	灰色(N4/0)	密	内：回転ナデ 外：円形凹帯貼付けスタンプ、軽いケズリ、回転ナデ	
26	瓦質土器	ミニチュア壺	1・2F	1面鳥畑8(SX15)	1.9	(1.7)	-	2/12	内、断：灰白色(2.5Y8/1) 外：灰色(N5/0)	やや密	内：ヨコナデ 外：沈線、ユビオサエ、ナデ	
27	古銭(明)	洪武通寶	1C	溝状遺構SD06底	-	-	-	12/12	-	-	-	重量2.7g

報告 番号	種類	器種	地区 割	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
28	灰釉系 陶器	椀	5F・ 5f	室町時代 包含層	-	(1.5)	4.2	2/12	灰白色(5Y7/1)	密	内：回転ナデ 外：削り出 し高台、回転ヘラケズリ	一部灰が 付着か
29	白磁	椀	26Gg	室町時代 包含層	-	(0.9)	3.9	5/12	釉調：灰白色(7.5Y 8/1) 素地：灰白色(5Y 8/2)	密	内：施釉 外：削り出し高台	底部の見 込に墨書 あり
30	須恵器	鉢	14C	室町時代 包含層	(26.0)	(3.1)	-	1/12 以下	灰白色(7.5Y7/1)	密	内：ナデ 外：回転ナデ?	重ね焼痕 あり東播 系か
31	瓦質 土器	鍋	19c 付近	室町時代 包含層	(24.5)	(2.4)	-	1/12	内：灰白色(10YR 8/1) 外：にぶい褐色(7.5YR 5/3) 断：暗灰色(N3/0)	密	内：ヨコナデ、ハケ 外：ヨコナデ、ユビオサエ	煤付着
32	土師器	皿N	14d 中央 断割 付近	3面素掘り溝	8.4	1.1	-	4/12	にぶい橙色(7.5Y7/3)	密	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、不調整一部 ユビオサエ	
33	土師器	皿N	26Gg	3面素掘り溝	9.8	1.1	-	2/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4~6/4)	密	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ユビオサエ	
34	土師器	皿N	14d	3面素掘り溝	8.7	1.8	-	2/12	灰白色(10YR8/2)	やや 密	内：ヨコナデ、定方向ナデ 外：ケズリ、ナデ	
35	土師器	皿N	2bc	3面素掘り溝	8.8	1.6	-	9/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	密	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ	
36	土師器	皿N	2d	3面素掘り溝	7.9	1.0	-	2/12	浅黄橙色(10YR8/3)	密	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、不調整	
37	土師器	皿N	12f	3面素掘り溝	9.6	1.7	-	6/12	浅黄橙色(10YR8/3)	密	内：ナデ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ	
38	土師器	皿S	7e	3面素掘り溝	11.0	(1.6)	-	1/12	灰白色(2.5Y8/1)	密	内：ナデ・ユビオサエ 外：ナデ・ユビオサエ	
39	土師器	皿S	11b	3面素掘り溝	14.8	(1.8)	-	3/12	浅黄色(2.5Y7/3)~ 橙色(7.5YR6/6)	密	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ユビオサエ	
40	土師器	皿S	13~ 14・ f~g	3面素掘り溝	15.1	(3.2)	-	4/12	灰黄色(2.5Y6/2)	密	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ・ユビ オサエ	
41	土師器	台付皿	7ラ イン 以東	3面素掘り溝	-	(2.2)	(8.2)	1/12	浅黄色(2.5Y7/3)	密	内：ナデ 外：貼付高台、ナデ	
42	土師器	台付皿		3面素掘り溝	-	(2.2)	6.9	2/12	灰白色(7.5YR8/1)	やや 密	内：マメツ 外：貼付高台、ナデ	
43	瓦器	椀	13~ 14・ d~e	3面素掘り溝	-	(2.2)	6.0	2/12	暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1)	密	内：マメツ 外：貼付高台・マメツ	
44	瓦質 土器	羽釜	21g	3面素掘り溝	(鑄部) 26.0 (口縁 部) 22.0	(3.0)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	密	内：ナデ・ユビオサエ 外：羽貼付・ユビオサエ	煤付着
45	瓦質 土器	羽釜	19b	3面素掘り溝	(鑄部) 35.1 (体部) 31.1	(25.6)	-	(羽部) 3/12	灰色(N4/0)	密	内：ハケ 外：羽部貼付、ユビオサエ	煤付着
46	須恵器	杯A	21~ 22・ f~g	3面精査	13.0	3.3	-	3/12	灰色(N6/0)	密	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ヘラ切りの ちナデ	
47	須恵器	杯B	10e	3~4面 包含層	-	(2.2)	16.6	1/12	灰白色(N8/0)	密	内：回転ナデ 外：回転ナデ、貼付高台	
48	須恵器	壺	16f	3面素掘り溝	-	(1.9)	7.0	3/12	灰色(N5/0)	密	内：回転ナデ 外：回転ナデ、糸切り	
49	須恵器	壺	7ラ イン 以東	重機掘削 3面直上	-	(3.4)	9.6	2/12	灰色(N5/0~6/0)	密	内：回転ナデ 外：回転ナデ、糸切り痕	
50	緑釉 陶器	椀	18f	4面素掘り溝	-	(1.3)	6.1	7/12	釉調：灰オリーブ色 (5Y6/2) 素地：灰白色(7.5Y 7/1)	密	内：施釉 外：施釉、削り出し高台	
51	緑釉 陶器	椀	15f	4面素掘り溝	-	(1.9)	5.8	2/12	灰オリーブ色 (7.5Y4/2)	密	内：施釉 外：施釉、削り出し高台	
52	土師器	甕	20b	下層包含層	(38.5)	(37.5)	6.0	6/12	内：褐灰色(10YR 5/1) 外：にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	内：横方向ハケ、不定方向 ハケ 外：横方向タタキ、ハケ、 ナデ	穿孔あり

報告番号	種類	器種	地区割	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
53	土師器	甕	12f	下層包含層	(14.4)	(4.5)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	内：ハケ 外：回転ナデ、強いナデ	
54	土師器	甕	2cd	下層包含層	14.4	(9.6)	-	4/12	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	内：ヨコナデ、横方向ケズリ 外：ヨコナデ、不定方向ナデ	
55	土師器	高杯	2cd	下層包含層	15.6	13.5	11.2	1/12	外：灰白色(7.5YR 5/2) 断：暗灰色(N3/0)	やや粗	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ミガキ 脚内：ヘラケズリ	杯底部外面に穿孔あり
56	土師器	高杯	2C	下層包含層	28.6	(9.2)	-	4/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	粗	内：ヨコナデ、ミガキ 外：ヨコナデ、ミガキ、ケズリ	
57	土師器	小形丸底壺	2C	下層包含層	8.8	8.0	-	7/12	橙色(7.5YR7/6)	良好	内：マメツ、ユビオサエ 外：マメツ	
58	土師器	壺	3d	下層包含層	16.6	7.1	-	4/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	内：ハケ、ナデ 外：ナデ、マメツ	内面に黒色付着物あり
59	土師器	壺	3d	下層包含層	23.6	(8.3)	-	2/12	内：赤灰色(2.5YR 4/1) 外：淡橙色(5YR8/3) 断：灰白色(10YR 8/2)	やや粗	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ	
60	土師器	壺	6d	下層包含層	(18.6)	(7.1)	-	1/12以下	橙色(5YR6/6)	やや良好	マメツ	
61	土師器	甕	19b (D区)	下層包含層	16.0	19.3	-	5/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	内：ヨコナデ、ユビオサエ、ハケ・ナデアゲ 外：ユビオサエ、横方向タタキ、ナデ(葉などで)	
62	土師器	甕	5e	下層包含層	19.3	(19.7)	-	3/12	外：黒褐色(10YR 3/2)～にぶい黄褐色(10YR6/4) 断：暗灰色(N3/0)	やや粗	内：ヨコナデ、ナデ、剥離不明 外：ヨコナデ、ハケ、剥離不明	
63	土師器	甕	12c	下層包含層	18.0	(21.7)	-	1/12	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	内：ケズリ？一部ハケ 外：一部ハケ、マメツ	
64	土師器	甕	3d	下層包含層	16.2	4.8	-	2/12	にぶい橙色(7.5YR 7/3～6/4)	良好	内：マメツ 外：ヨコナデ、マメツ	
65	土師器	甕	3 f	下層包含層		(13.5)	-	3/12	内：にぶい黄褐色(10YR7/2) 外：にぶい黄褐色(10YR7/3)	粗	内：ヨコナデ、粗いケズリ 外：ヨコハケ、タテハケ、ナデ	
66	土師器	甕	9b	下層包含層	18.8	(19.6)	-	4/12	内：淡黄褐色(7.5R 8/3) 外：にぶい褐色(7.5YR5/4)	やや粗	内：ヨコナデ、ナデ、ケズリ 外：ヨコナデ、ハケ	
67	土師器	小型壺	4e	下層包含層	6.6	(5.8)	-	3/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	やや粗	内：ヨコナデ、ケズリ 外：ヨコナデ、ハケ	
68	土師器	高杯	1・2d	下層包含層	14.3	13.1	11.5	(口) 6/12 (底) 5/12	灰白色(2.5Y8/2)	良好	内：マメツ 外：マメツ、一部ハケ	杯底部外面に穿孔あり
69	土師器	高杯	17e	下層包含層	-	-	-	3/12	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	良好	内：粘土絞り痕、ハケ 外：ハケのちナデ、剥離不明	
70	土師器	高杯	1～2c	下層包含層	-	(3.9)	12.2	4/12	内：にぶい赤褐色(2.5YR6/4) 外：にぶい橙色(2.5YR6/4)	粗	内：ケズリ、マメツ 外：マメツ	
71	土師器	高杯	2d	下層包含層	-	(9.1)	18.6	5/12	浅黄褐色(7.5YR8/3)	やや粗	内：ケズリ、ハケ 外：ケズリ、ナデ、ミガキ	
72	土師器	高杯	4d	下層包含層	-	(6.4)	8.2	1/12	橙色(5YR6/6)	良好	内：横方向ケズリ、横方向ハケ、剥離不明 外：マメツ	

付論 地震痕跡とその発生履歴の検討

独立行政法人奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター

研究員 村田 泰 輔

1. はじめに

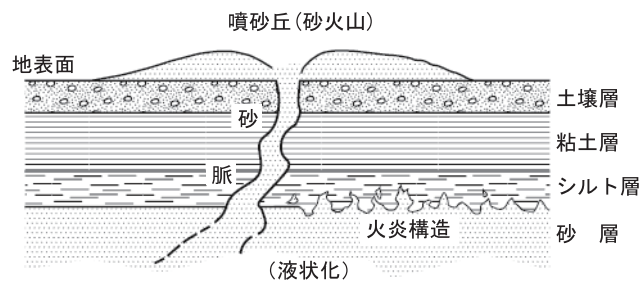
木津川河床遺跡では、これまでもたびたび砂脈や噴砂といった地震動に伴う液状化の痕跡が発見され、報告されている。この液状化は、一般的に地下水面の高い軟弱地盤域において発生頻度が高い。中でも比較的粒径組成において淘汰の良い砂層を透水層として、その上位にシルトなどの細粒物を混濁する比較的透水率の低い泥層が堆積するような水田域や低湿地などでは、地震動などの大きな振動が粒子間の間隙水に大きなひずみを与え、透水層中の粒子間支持力を切り離してしまう。これが液状化を発生させ、支持力を失った上位層は不当沈下を起し、比較的透水率の低い泥層中の亀裂を辿るように砂脈、噴砂が発生する(第1図)。土木工学的な実験やこれまでの地震被災の経験的な面から、この液状化は震度5弱以上のかなり巨大な地震で発生しやすいとされるが、とくに海岸部や河岸部には、このような軟弱地盤の堆積体が継続的に広がっていることから、ときにそれ以下の震度でも発生することも報告されている。

今回、発掘調査区全体において液状化の痕跡が広く分布するだけでなく、複数の層に分かれて噴砂が存在することが分かってきた。これは震度5弱以上の巨大地震により、この地域が何度も被災したことを示唆する。このような地域の被災履歴は、歴史的な重要性もさることながら、将来的な私たちの生活に向けた防災・減災活動への重要な動議付けの根拠となることから、その発生履歴について検討をおこなった。

2. 層序と年代

(1) 層序と試料

本調査区の基本層序は、おおよそ下位に堆積する木津川氾濫原堆積層と中位の耕作溝群(鎌倉時代から室町時代)、上位の島畑遺構(室町時代後半)から成る。とくに調査区西側では、発掘調査から平安時代や鎌倉時代の遺構は検出されておらず、島畑の形成が出土遺物より室町時代以降と推定されていることから、10層以下の明瞭にみられる木津川の氾濫原相を考えると大き



第1図 噴砂模式図

な不整合上に遺構が形成されたといえる。この調査区西壁では複数の噴砂痕跡が発見された。噴砂の層位については改めて解析成果としてまとめるが、層相観察において、少なくとも10層直下、7層直上、5層直上、3層上面の4つの層で確認された。前述のとおり、10層より上位層は島畑遺構の壘重となるが遺物の包含量は薄く、各層の時代評価はきわめて困難であった。そこで、島畑堆積物に挟在する微量な炭化物片を用い、放射性炭素年代測定をおこない、堆積層の時期評価の一助とした。試料の採取層位は第3図に示す。

(2)放射性炭素年代測定

木津川河床遺跡より検出された各層位の炭化物試料(調査区西壁、本文第19図参照)について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-39627	試料No.AMS01	種類：炭化物・その他 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：wet 依頼注意：微量測定	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：0.01 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39628	試料No.AMS02	種類：炭化物・その他 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：wet 依頼注意：微量測定	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39629	試料No.AMS03	種類：炭化物・その他 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：wet 依頼注意：微量測定	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：0.01 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39630	試料No.AMS04	種類：炭化物・その他 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：wet 依頼注意：微量測定	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：0.01 mol/L,塩酸：1.2 mol/L)
PLD-39631	試料No.AMS05	種類：土壌(腐植をほとんど含まない泥交じり砂、炭化物を採取できなかったため、堆積物を測定) 状態：wet	酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L) サルフィックス処理
PLD-39632	試料No.AMS06	種類：土壌(腐植をほとんど含まない泥交じり砂、炭化物を採取できなかったため、堆積物を測定) 状態：wet	酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L) サルフィックス処理
PLD-39633	試料No.AMS07	種類：炭化物・その他(土壌の可能性がある) 状態：wet 備考：微量測定	酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L) 炭素量不足で測定不可

①試料と方法

分析試料は7点あり、測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

②結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、1950年の大気中の¹⁴C濃度を1として計算した試料の¹⁴C濃度を表すF¹⁴C値、暦年較正結果を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

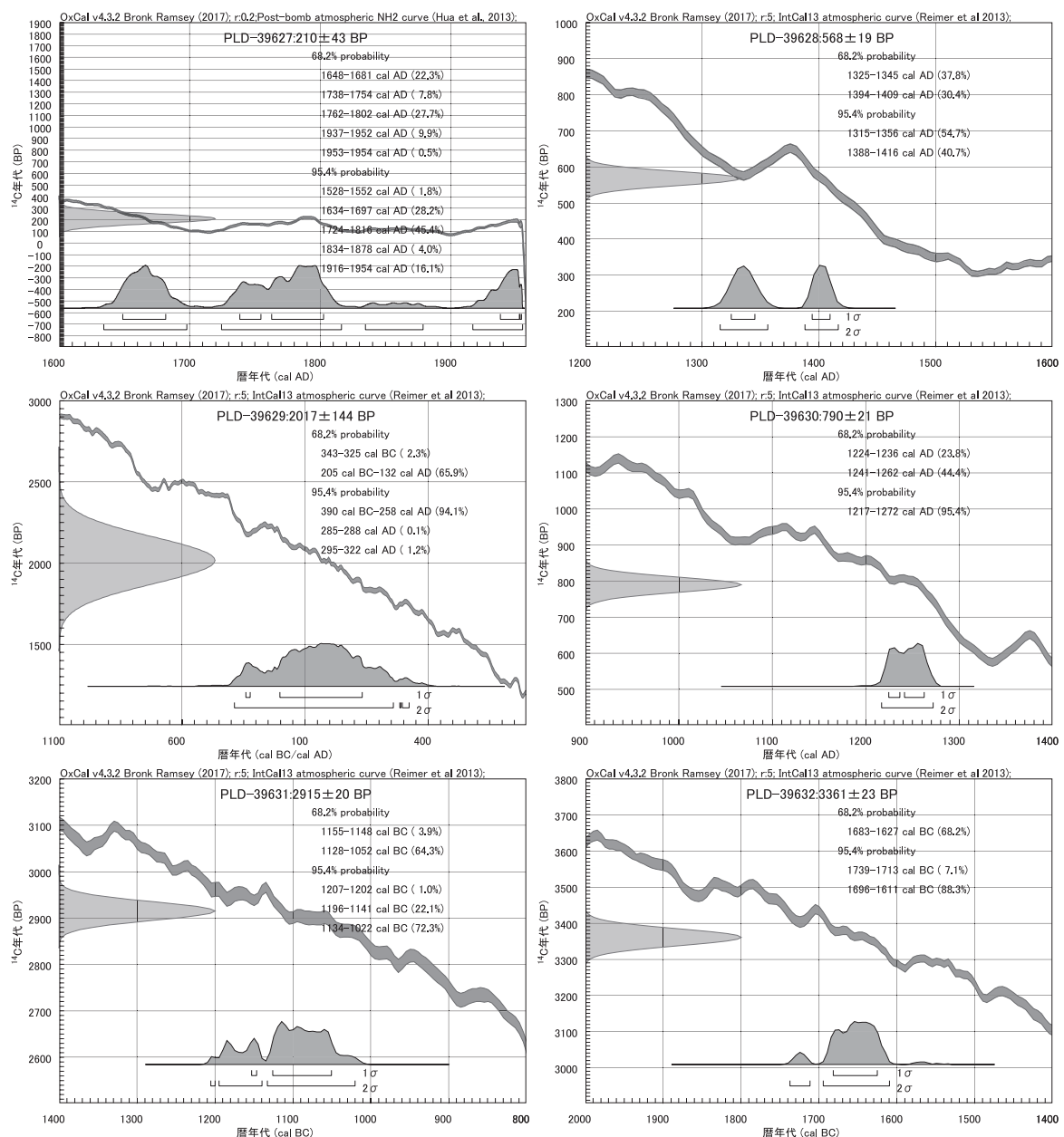
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の範囲である。カッコ内の百分率の値は、その

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-39627 試料 No.AMS01	-28.98 \pm 0.65	210 \pm 43	210 \pm 45	Post-bomb NH2 2013: 1648-1681 cal AD (22.3%) 1738-1754 cal BC (7.8%) 1762-1802 cal AD (27.7%) 1937-1952 cal AD (9.9%) 1953-1954 cal AD (0.5%)	Post-bomb NH2 2013: 1528-1552 cal AD (1.8%) 1634-1697 cal AD (28.2%) 1724-1816 cal AD (45.5%) 1834-1878 cal AD (4.0%) 1916-1954 cal AD (16.1%)
PLD-39628 試料 No.AMS02	-29.08 \pm 0.13	568 \pm 19	570 \pm 20	1325-1345 cal AD (37.8%) 1394-1409 cal AD (30.4%)	1315-1356 cal AD (54.7%) 1388-1416 cal AD (40.7%)
PLD-39629 試料 No.AMS03	-43.55 \pm 0.63	2017 \pm 144	2020 \pm 140	343-325 cal BC (2.3%) 205 cal BC-132 cal AD (65.9%)	390 cal BC-258 cal AD (94.1%) 285-288 cal AD (0.1%) 295-322 cal AD (1.2%)
PLD-39630 試料 No.AMS04	-29.69 \pm 0.15	790 \pm 21	790 \pm 20	1224-1236 cal AD (23.8%) 1241-1262 cal AD (44.4%)	1217-1202 cal AD (95.4%)
PLD-39631 試料 No.AMS05	-23.09 \pm 0.19	2915 \pm 20	2915 \pm 20	1155-1148 cal BC (3.9%) 1128-1052 cal BC (64.3%)	1207-1202 cal BC (1.0%) 1196-1141 cal BC (22.1%) 1134-1022 cal BC (72.3%)
PLD-39632 試料 No.AMS06	-21.49 \pm 0.24	3361 \pm 23	3360 \pm 25	1683-1627 cal BC (68.2%)	1739-1713 cal BC (7.1%) 1696-1611 cal BC (88.3%)

範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。試料No.AMS07については炭素質が十分得られず、放射性炭素による年代測定はできなかった。一方、試料No.AMS01~06については、暦年校正年代より、およそ以下の年代が検討された。AMS01 (PLD-39627)：16世紀~18世紀、測定炭素の起源として近代~現代のものが細かく混入している可能性が高いが、全体としては近世を強く示唆し、発掘調査の所見とは調和的である。AMS02 (PLD-39628)：14世紀~15世紀初頭の年代が得られ鎌倉時代~室町時代に当たる。島畑を形成する時期として、発掘調査所見と調和的である。AMS03 (PLD-39629)： $\delta^{13}C$ が極めて高く、また算出される1シグマの値が140年を超えるなど異常値を示している。堆積物中に挟在する由来不明な微量炭化物片を計測しているため、古い炭



第2図 暦年較正結果

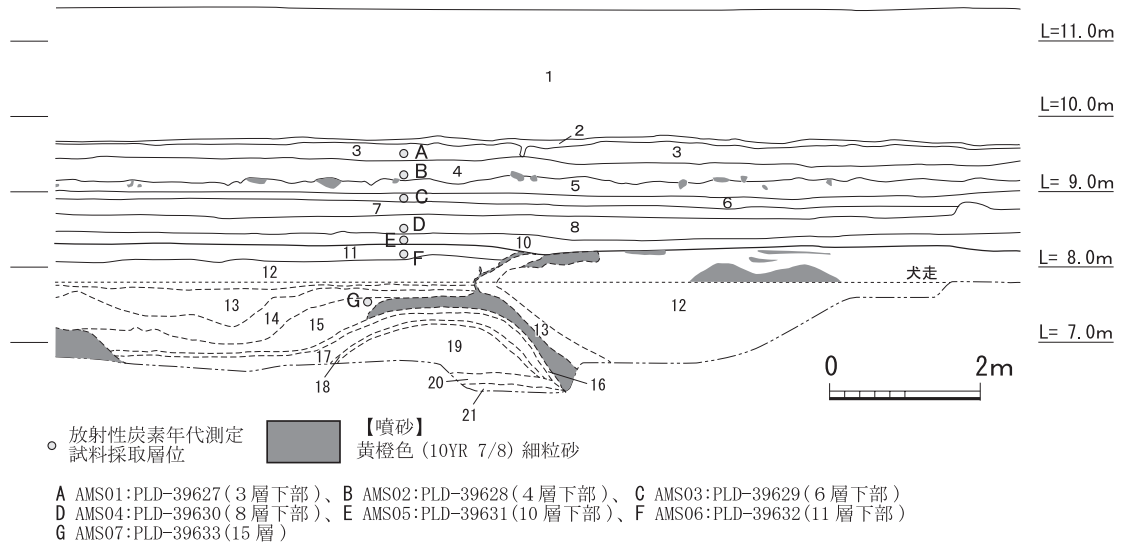
素片を計測した可能性が極めて高い。AMS04 (PLD-39630) : 13世紀、鎌倉時代を示す年代が得られた。鳥畑の形成時期としては発掘調査の所見に先行するが、調査区東側ではわずかに鎌倉期の遺構は検出されており、また堆積物が室町時代に先行したものであることに大きな問題はない。AMS05 (PLD-39631) およびAMS06 (PLD-39632) : 木津川氾濫原堆積層にあたる10層、11層の堆積物から得られた年代で、いずれも縄文時代までさかのぼる。木津川のいわゆる氾濫原堆積相拡大時期に相当する。

3. 液状化痕跡の分布

調査区の完掘空中写真とその空中写真について画像のスペクトル解析をおこない、液状化の痕跡を強調した図を第4図、第5図に掲載する。いずれも写真上方が北側になり、第4図が調査区の西側、第5図が調査区の東側にあたる。遺構検出断割のトレンチもありやや観察が難しいが、調査区内全体としてはおよそ16か所(図中の a ~ p) の噴砂が、室町期以降の鳥畑遺構面を切り裂くように同心円状に砂が広がっている様子がみられる。この砂の広がりであるが、調査区西側に分布する噴砂 a ~ j は、やや南北に楕円状に広がり、調査区東側に分布する噴砂 k ~ p はその長軸がやや東西方向に傾く傾向がみられる。これは遺構検出面のさらに下層の傾斜の向きが変わっていることを反映したものであると考えられる。くわえて噴砂の検出面には、南北を通るような大きな地割れ痕跡や縦横に細かく交差する砂脈痕跡がみられる(第4図中央部)。これらの長軸も、調査区西側と東側ではやや方向軸が異なるが(第5図中央部)、下位層の地形的な傾斜の変化が反映されているものと考えられる。砂脈の交差検出について、しばしば水成堆積物表層にみられる干乾構造と区別が困難という質問を受けるが、干乾構造がいわゆる皿状構造を独立的に形成さるのに対し、砂脈の場合、ロード構造などあくまで充てん構造が形成されている付加体構造である点に着目すべきだろう。検出面には噴砂と砂脈が同様に分布するが、これは西壁で観察されるように、さらに上位層の噴砂につながる砂脈として考えられる。

4. 地震痕跡と発生履歴の検討

液状化痕跡を調査するうえで最も重要なことは、液状化するもしくはした泥流層の供給層の確認である。地滑りや地割れなどを含め、地層下方に向かう構造は自然堆積構造においても羽状構造やロード構造、植物根の痕跡、線虫などの生物痕跡などいくつか考えられる。くわえて杭孔や何らかの掘削痕など人為性の遺構を含むと、ある方向からの平面的もしくは鉛直的な形状・構造を一部観察するのみでは液状化構造に類似する構造体は比較的多く、十分な根拠を認識せずこれらを議論することはできるだけ避けるべきである。実際に発掘調査担当者が何の疑いもなく過去の調査指摘に従って記載を繰り返すことをしばしば見かけるが、震度5弱以上の震度で液状化が発生する点を鑑みると、不必要な巨大地震を記録することになり、疑いもなく記載を踏襲するという行為は地域防災・減災を考える上で危険な行為である。今回も調査区全域や西壁に構造的にはほぼ間違いのない液状化に伴う砂脈と噴砂の痕跡がみられたが、西壁において確認のため、調



第3図 放射性炭素年代測定試料の採取位置(露頭模式断面図は、調査区東側、西壁断面)

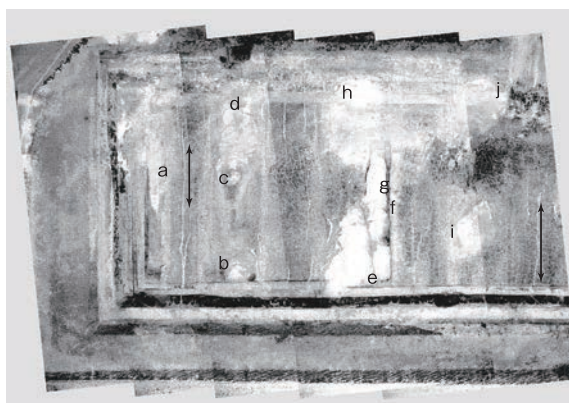
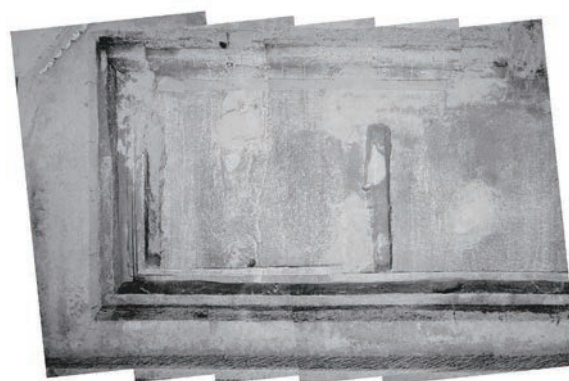
査完掘面よりさらに1.5m以上掘削を進め、液状化により砂泥を供給する砂層まで検出をおこなった(第7図)。層全体は第6図、第7図の一番上の露頭写真に示し、第6図は西壁の上部を、第7図は西壁の下部について層相をグレースケールで示したものと、液状化部についてスペクトル解析により白色で強調した写真を掲載した。西壁の最下部を形成する液状化した砂層は、模式断面図の17層～21層に相当する(第3図)。模式断面では分層化され、17～19層を曲隆として認識しているが、液状化によって粒径が再級化された一連の河川性砂質泥である。21層から17層の上位に向かい砂層の分級淘汰は良くなり、同時に液状化による傾斜方向への流下構造が発達することから、19層では傾斜方向へ緩く傾く平滑ラミナが発達する。液状化して移動した泥流は、模式断面図では16層の上位に載るように堆積し、13層から15層によって被覆されるように記載される。実際に13層から15層は河川氾濫原性の湿地堆積物であり、この液状化による泥流により下部から浸食を受ける。これは液状化した泥流があくまで付加堆積物であることの良い根拠となる(第7図)。液状化した泥流堆積物は、調査区のトレンチ底部(犬走)で広がって見えるが、実際には12層上面で噴き出し、1つ目の噴砂層を形成する(第6図)。さらに上位に砂脈は貫進し、7層上面もしくは7層上部で途切れ途切れに水平的に広がり、2つ目の噴砂層を形成している。その上位には層としてはレンズ状にかなり分断しているものの5層上面、4層上面に第3噴砂層、第4噴砂層の堆積がみられる。この結果、少なくとも調査区西壁では、同一の液状化層を給源とする噴砂が4回発生したこととなる。

放射性炭素年代測定の結果と合わせると、第1噴砂層はAMS06とAMS05で得られた年代の間に堆積することから縄文時代前期～中期にかけて発生した地震であると考えられる。第2噴砂層は、AMS03とAMS04の間に堆積する。AMS04は放射性炭素年代測定の項で述べたように、AMS03は由来不明の様々な炭素片の混合物を計測している可能性があり年代値としては評価が難しいことから、少なくとも13世紀前半以降に発生した地震と考えられるだろう。一方、さらに上位のAMS02は13世紀前半(建武の新政)以降の年代を示していることから、ほぼ鎌倉時代に発

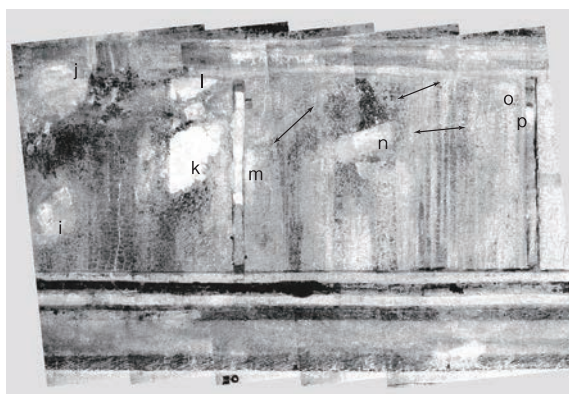
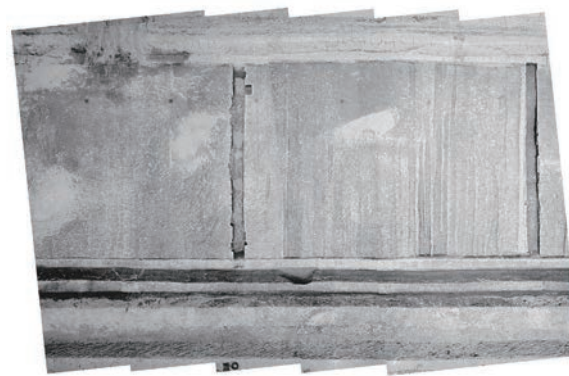
生した地震であろうと推定される。第 3 噴砂層は 5 層上面に分布する。第 2 噴砂層と同様の時間範囲の中での地震の発生であるが、相対的な順序としてはより鎌倉時代～室町時代にかけての地震であった可能性がある。第 4 噴砂層は 4 層上面に分布がみられる。AMS01 は 16 世紀～20 世紀までかなり幅広い年代値を包括するが、算術上では 17 世紀前半～19 世紀初頭に収れんする。その結果、室町時代以降、江戸時代までの間に発生した巨大地震である可能性が高い。

それぞれの地震痕跡について、仮説の一端として、京都府内に大きな被害をもたらしたとされる歴史記録に残る巨大地震について抽出をおこなった。第 1 噴砂層については残念ながら有史以前であることから除外する。第 2 噴砂層は、13 世紀に発生した地震である可能性があり、寛元 3 (1245) 年や『本朝年代記』に記録される正安元 (1299) 年に地震の発生記録がある。畿内でこの時期あまり近畿圏内に大きな地震の古記録はない。第 3 噴砂層は鎌倉時代～室町時代にかけての地震であった可能性があるが、正中 2 (1325) 年の近江北部を震央とする柳ヶ瀬断層－敦賀断層の活動によると考えられる地震や、元徳 3 (1331) 年の紀伊水道を震央とするもの、さらに『祇園執行日記』に記録される正平 5 (1350) 年の京都を震央とする地震や、明応 7 (1498) 年などが挙げられる。第 4 噴砂層は、発生時期を絞るにはかなり広い時間幅があり困難であるが、慶長元 (1596) 年、慶長 9 (1605) 年の海溝型の大型地震が発生するなど、今後、周辺の発掘調査成果とさらに層位対比させ、時期の絞り込みが必要となろう。

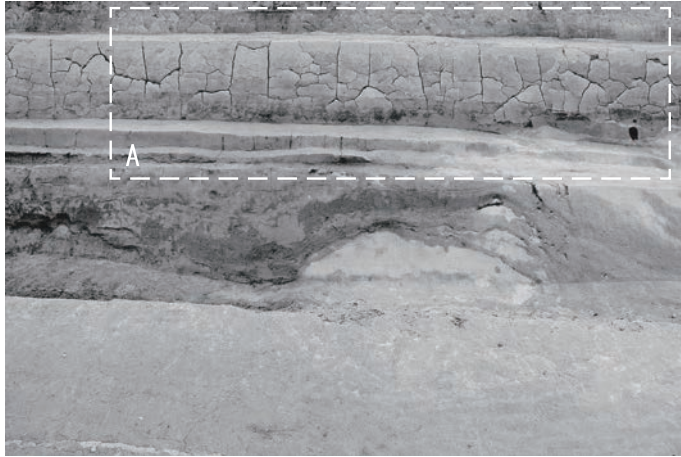
結果的に、過去の被災履歴を明らかにする



第 4 図 調査区完掘状況の空撮写真と液状化状況の強調図 (調査区西側)



第 5 図 調査区完掘状況の空撮写真と液状化状況の強調図 (調査区中央)

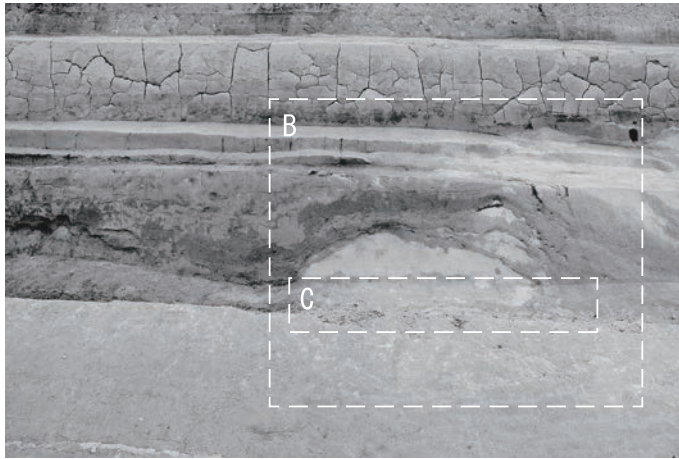


i) 調査区西壁全体

※ A は西壁上部範囲を示す。



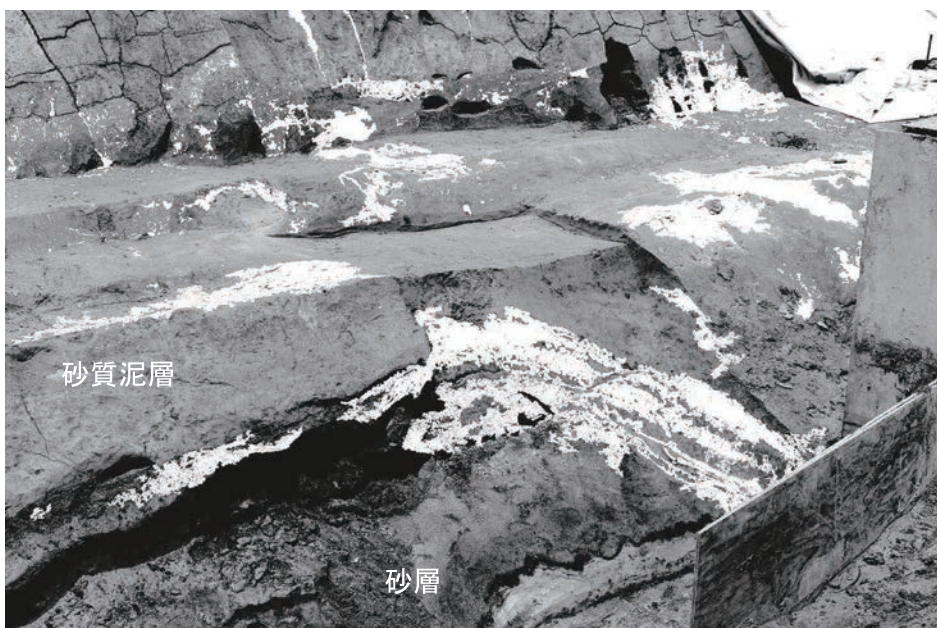
第6図 調査区西壁上部の層序と地震痕跡



i) 調査区西壁全体

※ B は西壁下部範囲を示す。

※ C は追加掘削部分



第 7 図 調査区西壁下部の層序と地震痕跡

ことは、地域的な地質的脆弱性を理解するだけでなく、将来的な地震被災発生予測をより具体的なものとする根拠づけとなり、我々の生活の防災・減災を目指すうえで極めて重要な手掛かりとなってくる。本調査においては、別途、層の最上位から基盤まで剥ぎ取り試料を採取している。現在、この資料については処理中であるが、パネル作成後には改めて液状化状況の詳細を検討し、報告を行いたい。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

大森貴之、山崎孔平、柁澤貴行、板橋悠、尾寄大真、米田穰(2017)「微量試料の高精度放射性炭素年代測定」第20回 AMSシンポジウム

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 186

(補注) 分析は、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが(株)パレオ・ラボに委託したものであり、パレオ・ラボAMS年代測定グループの伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadzeの分析による。

2. 向島宇治線地方道路交付金業務関係遺跡 茶壺蔵跡(創建)発掘調査報告

1. はじめに

今回の茶壺蔵跡(注)の調査は、京都府が計画した向島宇治線地方道路にかかる発掘調査で、同交付金業務に伴って実施した。

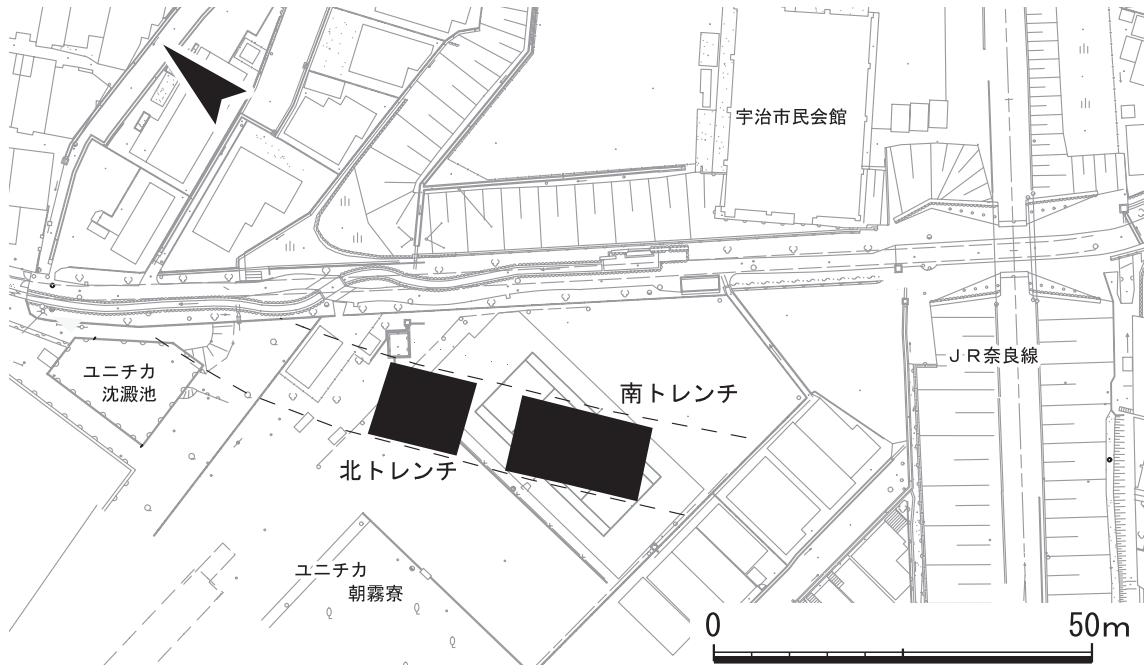
調査対象地は、宇治橋やや下流の宇治川左岸に位置し、北東側に隣接して宇治川堤防が築かれている。京都府が用地を取得する以前はユニチカ株式会社宇治事業所の朝霧寮敷地内にあり、テニスコートが設置されていた。調査対象である茶壺蔵跡(創建)は、宇治茶を江戸幕府に献上するための茶壺を納めておく蔵として、元禄7(1694)年に建設され、延享2(1745)年に宇治川の氾濫により流失した。

現地調査にあたっては、調査地への車両の出入りや物品の搬入の際にユニチカ株式会社宇治事業所の社有地を通行させていただいた。京都府教育委員会、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課をはじめ関係各機関には、ご指導とご協力をいただいた。また、京都府文化財保護指導委員吉水利明氏には、現地の歴史についてご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府山城北土木事務所が負担した。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)



第2図 調査トレンチ配置図

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当	調査課課長補佐兼調査第3係長	中川和哉
	同 総括主査	岩松 保
調査場所	京都府宇治市宇治里尻地内	
現地調査期間	令和元年11月6日～12月10日	
調査面積	300㎡	

2. 茶壺蔵跡（創建）の概要

江戸幕府は、将軍以下幕府で使用する宇治茶を江戸に運ぶため、毎年、幕府の役人を宇治採茶師に任命し、茶壺を携えさせて江戸と宇治との間を往還させた。幕府の茶壺を宇治に送り、その壺に宇治茶を納めさせて江戸に持ち帰るもので、その一行が「御茶壺道中」である。多い時には1,000人を超える行列となった。

慶長18(1613)年、江戸幕府が宇治採茶師を派遣し宇治茶の献上を命じたのが初見で、寛永10(1633)年に制度化され、慶応2(1866)年まで続けられた。

宇治には、幕府の茶壺を納める場所として、茶壺蔵が設置された。寛永10(1633)年に、宇治の茶師上林峯順邸内に茶壺を格納するための土蔵が設けられ、番所が併設された。元禄7(1694)年に、茶壺蔵を峯順邸内の外に移すように命じられたため、宇治里尻地内に新しい土蔵が造られている。この茶壺蔵が今回の調査対象の茶壺蔵跡(創建)で、宇治市民会館の後方にあったと推定されている。この茶壺蔵は、東西15間、南北23間の敷地の周囲に矢来と水濠を巡らせ、2か所に間口2間余の簀戸門すどもんが設けられ、敷地の中には3間四方の土蔵2棟、桁行10間、梁間3間の番所1

棟、8間×3間の小屋が設けられていた。

延享2(1745)年6月に宇治川の洪水のため左岸が破堤し、氾濫のため茶壺蔵は流失してしまった。翌年、茶壺蔵の再興に際して蔵の位置を替えるよう命じられ、里尻の西端の地、現JR宇治駅の北方に再建された。

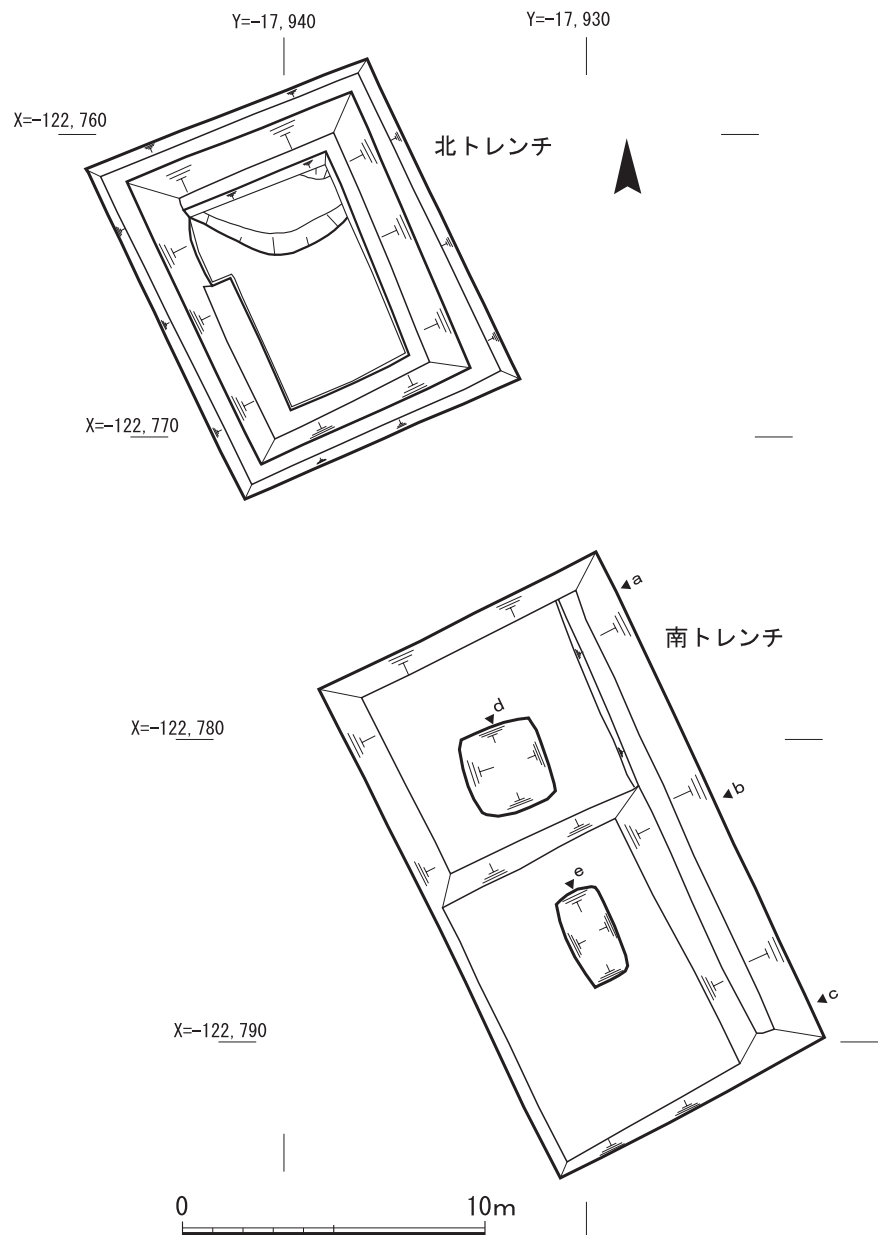
明治維新を迎え、御茶壺道中が行われなくなると、茶壺蔵は取り払われ、跡地は水田と化し、その場所は定かではなくなった。

3. 調査の概要

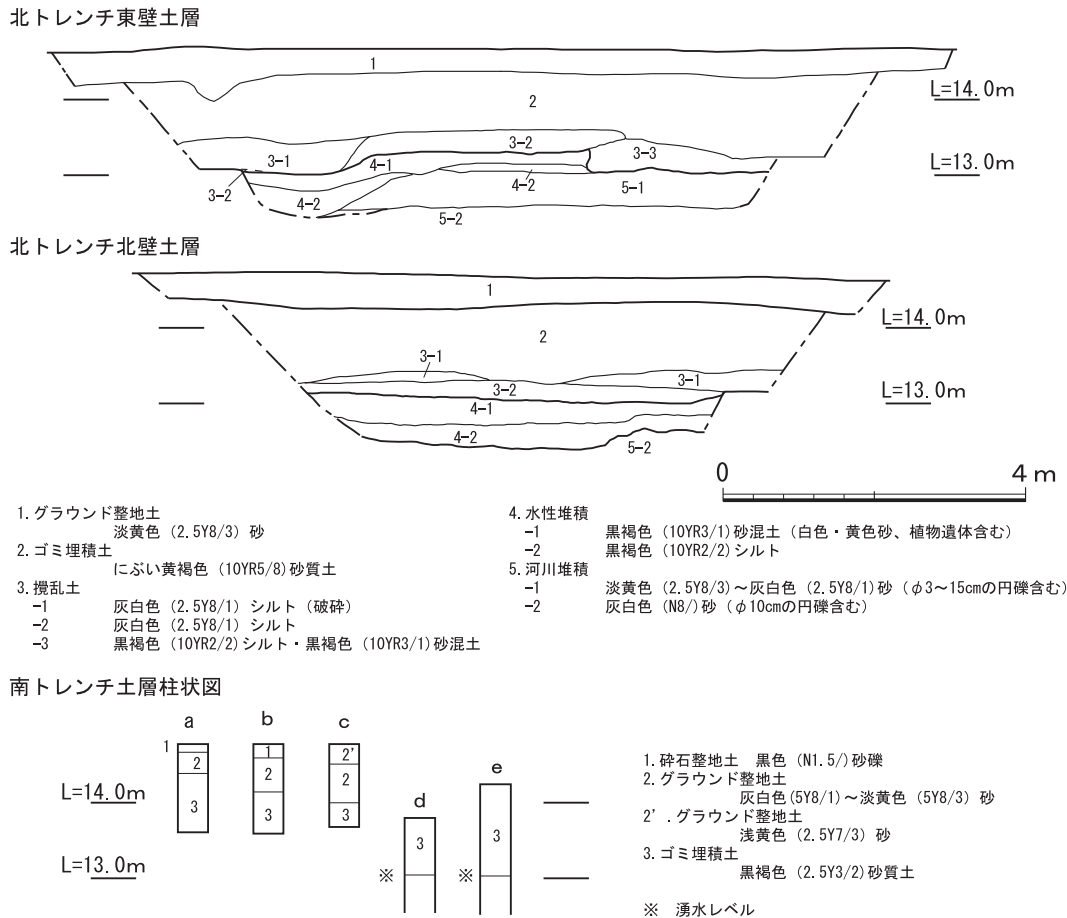
調査対象地内に2か所の調査区を設けて調査を実施した。

南トレンチ 10m×18mの調査区である。テニスコートがあったため、対象地のほぼ全面に20

～80cmの厚さで灰白色～淡黄色砂によるグラウンド整地がなされており、テニスコートの人工芝を除去した範囲には新たに碎石が敷かれていた。グラウンド整地土の下にはプラスチックや発泡スチロール、ゴム、スレート、コンクリート片、金属片等のゴミが全面に堆積していた。地表下約1.2m、標高13.6m付近まで掘削してもゴミ層の底面が認められなかったため、南側で重機による断ち割りを行ったところ(e)、現地地表下2.3mにいたるまで廃棄物が堆積していた。掘削中の標高13m付近で油分



第3図 調査トレンチ平面図



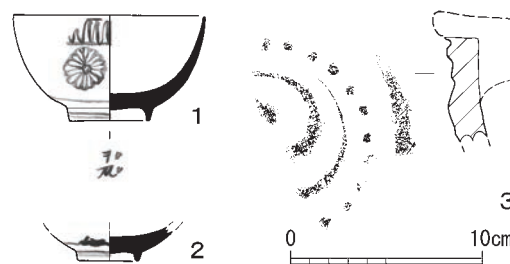
第4図 土層実測図 (a~eの柱状図の位置は第3図参照)

の混じった湧水が認められたため、掘削を断念し、北トレンチの掘削に取り掛かった。

北トレンチの掘削に際してもゴミの堆積は認められたが、掘削中に水や油の湧出は認められず、ゴミ埋積以前の地層を確認することができた。そのため、南トレンチの北半部でも北トレンチと同様の状況である可能性があったため、改めて南トレンチ北半部で断ち割りを行った(d)。掘削の結果、断割りeと同じく標高13m付近で油分の混じった湧水が認められ、さらに50cm程度の深さまでゴミが堆積していた。このように、いずれの断ち割りにおいても、ゴミ埋積の下面は確認できなかった。後述のように、北トレンチの湧水レベルは12.6mと、南トレンチと比べて0.4m程度深いことから、南トレンチの湧水は宇治川伏流水ではなく、雨水の溜水と判断される。

北トレンチ 10m×12mの調査区を設定した。グラウンド整地土の下で、厚さ0.8mにわたってビニールや発泡スチロール、ガラス、布などのゴミの堆積が認められた。南トレンチでは油分を含む湧水が見られたが、北トレンチではゴミ層からの湧水が認められなかったため掘削を続けることができた。ゴミ埋積層の下で灰白色シルト(3-1・2)や黒褐色シルト・黒褐色砂混土(3-3)が認められた。特に北壁土層の灰白色シルト層(3-2)で認められるように、これらの土層は上位のゴミ層とは異なり、土質が揃って土層にまとまりが認められることから、自然堆積層とも考えられた。しかし、仔細に観察すると、東壁では灰白色シルト(3-2)が黒褐色シルト・黒褐色砂混土(3-3)に載るような層序が認められたこと、黒褐色シルト・黒褐色砂混土(3-3)が黒褐色砂混土(4-1)や

同シルト(4-2)を切り込んでいること、灰白色シルト(3-1)が拳～小児頭大の塊に破碎された状態であることなどから、3層全体は人為的に動かされた攪乱土と判断した。この下位に堆積した黒褐色砂混土(4-1)や黒褐色シルト(4-2)は調査区のほか全域で確認できたことから、自然堆積層と判断した。



第5図 出土遺物実測図

黒褐色砂混土(4-1)には白色砂や黄色砂のほか細かな植物遺体が混じることや、黒褐色シルト(4-2)の土質がシルトであることから、水性堆積層と判断した。これらの層序は、平面的には調査区の北辺に沿って、深さ0.6m、幅1.6～2.4mの落ち込みを形成している。落ち込みの東端は、北壁土層で認められるように、北側に向けて灰白色砂(5-2)の立ち上がり認められ、平面的に幅が狭くなっており、流路状を呈している。そのため、池と流路、または流路と判断される。ちなみに、灰白色砂(5-2)上面、標高12.6m付近で湧水が認められた。ポンプで排水しても水の湧き出しが途切れないことから、宇治川の伏流水が湧き出しているものと考えられる。強制排水をしないと、15cm程度の深さまで滞水する。これら黒褐色砂混土(4-1)や黒褐色シルト(4-2)にはガラス瓶や陶磁器片、レンガ片などが含まれており、近現代の堆積である。5層は宇治川由来の砂礫層と判断される。淡黄色～灰白色砂(5-1)は45cm程度の厚さで堆積しており、この砂礫層の上面はほぼ水平な平坦面となっており、人為的に削られている可能性がある。肥前磁器片(第5図1・2)をはじめ近世の棧瓦や陶器片、中世の中国製陶磁器、時期不詳の土師器、須恵質鉢、丸瓦や平瓦片が含まれていた。第5図1・2は肥前陶磁で、いわゆるくわんか茶碗である。1にはコンニャク判で施文したもので、ともに18世紀代のものと判断される。そのほか、小片であるため図示できなかったが、18世紀後半以降と判断される染付片も出土している。淡黄色～灰白色砂(5-1)の下位には灰白色砂(5-2)があり、深さ0.7mにわたって重機で断ち割りを行ったところ、湧水が激しくなった。そのため、壁面の砂礫が自然に崩落してしまい、断ち割りの坑が埋まってしまう状況であり、これより下位の掘削は適わなかった。この層中より、瓦当や棧瓦、平瓦片が回収できた。第5図3は平等院で用いられたものと考えられる。

遺物は第5層の河川内堆積の流路中より、整理箱で1箱分出土した。概して、陶磁器片や棧瓦など近世のものは摩耗を受けておらず、中世以前の遺物は摩耗を受けている傾向にある。

4. まとめ

2か所の調査区で発掘を行ったが、南トレンチでは油分の湧出のため、近現代のごみ層を除去することができず、包含層や遺構面の有無を確認できなかった。

北トレンチでは、近現代のごみ・攪乱層を除去したところ、それ以前の自然堆積土層を確認することができた。これらの層はシルト質であったり、植物遺体・砂粒を含んだ土質であり、池や流量の少ない河川内で堆積したものと判断される。しかし、これらの層にあっても、近現代のガラス瓶やレンガ片が含まれており、茶壺蔵跡(創建)に関わるものではない。

その下位には小児頭大の石を含む砂礫層があり、宇治川の氾濫に伴い、流出した砂礫の堆積と判断された。この砂礫層のうち、上位の淡黄色～灰白色砂からは18世紀代を中心とする陶磁器片が出土したが、時期的にやや新しいものも含まれていると考えられ、茶壺蔵に関連するとは断じ難い。一方で、生活面と判断できる安定面が認められないことから、調査対象地付近に創建時の茶壺蔵やそれ以前の生活面(遺構)や遺物がかつては存在していたとしても、宇治川の氾濫によって削平を受け、そういった遺構・遺物は消失してしまったものと考えられる。

最後に、今回の調査成果を当地の歴史を踏まえて検討したい。

宇治川は琵琶湖に端を発し山間を抜け、宇治橋付近で平野部に流れ出ると河幅を広げ、大量の土砂が堆積することとなる。そのため、大雨が降ると宇治橋付近で破堤し、特に巨椋池が広がる左岸方向へ氾濫流が襲うこととなる。実際、茶壺蔵(創建)を流出せしめた延享2(1745)年の水害以後にも、江戸時代の間にも10数回の水害が記録されている。この点でも、今回の18世紀代の遺物を含む洪水砂の堆積は、茶壺蔵(創建)を流出させた洪水に伴うものと断定できない。

宇治橋下流の左岸地域では、ユニチカ株式会社の前身である日本レイヨン株式会社が昭和2(1927)年から操業を開始する。国土地理院の「地図・空中写真閲覧サービス」で見ると、昭和21(1946)撮影の米軍写真では、ユニチカ朝霧寮の敷地には多数の建物が造られているが、今回の調査対象地内の土地利用形態は不明であるが、少なくとも建物は築かれていないようである。1961年の写真では、池状の水面らしき陰影が見て取れる。1975年のカラー写真では、グラウンドとなっているようである。

今回の調査により、現在の地表面より約1.8m下で池状の痕跡が認められ、その上位には近現代のゴミが埋められていた。昭和21(1946)年の写真を見ると、周辺の家並みは現在のものとはほぼ同じであることから、近現代にいたってこれらの家の敷地も含めて全体に2m程度かさ上げしたとは考えにくい。

明治21・23年測量の「仮製地形図 宇治・淀」には、宇治川左岸の当該地に隣接して細長い池が記されており、氾濫に伴う旧流路と判断される。その詳細は不明であるが、周辺に「桜井池」という地名が残り、慶応4(1868)年5月の大洪水(「お釜切れ」)の名残りと伝えられている。こういったことから、調査地周辺は旧流路を埋め立てて家並みが形成され、家々の間に深さ2m程度のくぼ地が残っていたものと推測される。そのくぼ地が工場の操業時に池として利用され、最終的に廃棄物で埋めた結果、今回の調査区に見る土層の堆積となったものと考えられる。埋め立てた時期は1975年を大きくは遡らないものと考えられる。

注 遺跡名としては「茶壺蔵跡(創建)」であり、普通名詞の「茶壺蔵」は「壺」で表記している

参考文献

- 『宇治市史 近世の歴史と景観』 3 宇治市役所 1976年
 『宇治市史 近代の歴史と景観』 4 宇治市役所 1978年

圖 版



(1) 調査地(第1面)全景(上空から：下が北)



(2) 調査地(第1面)全景(北から)



(1) 畔 S X19 全景 (北から)



(2) 畔 S X19 近景 (北から)



(1) 畔 S X19 近景(南から)



(2) 畔 S X19 近景(南から)



(1) 東壁堆積状況(西から)



(2) 東壁堆積状況(南西から)



(1) 古銭出土状況(南から)



(2) 古銭出土状況(南から)



(1) 調査地(第3面)全景(北西から)



(2) 調査地(第3面)全景(上空から：下が北)



(1) 素掘り溝群(東部)全景(北から)



(2) 素掘り溝群(中央部)全景(北から)



(1) 素掘り溝内遺物出土状況
(南東から)



(2) 素掘り溝内遺物出土状況
(南東から)



(3) 素掘り溝内遺物出土状況
(南東から)

(1) 下層包含層遺物出土状況
(北から)



(2) 下層包含層遺物出土状況
(西から)

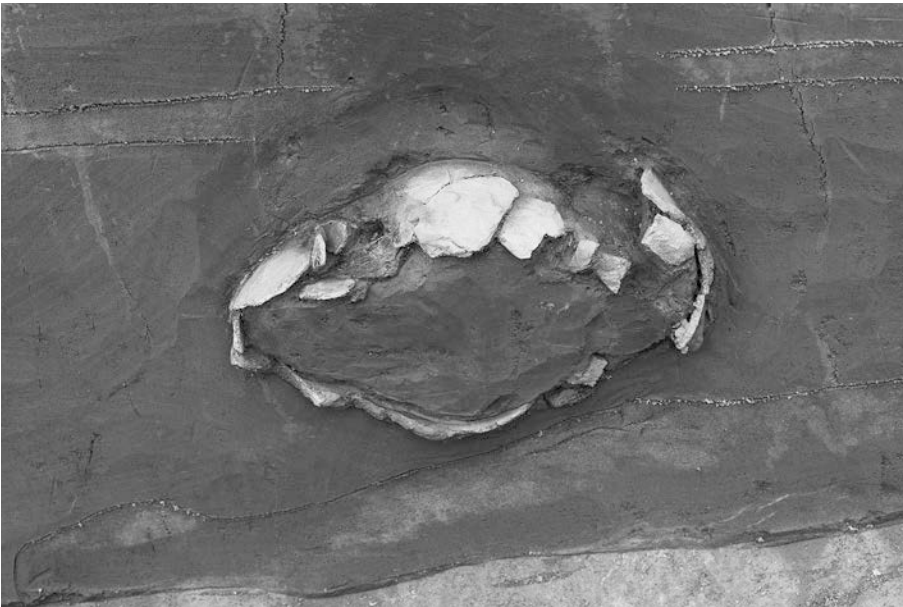


(3) 下層包含層遺物出土状況
(南から)

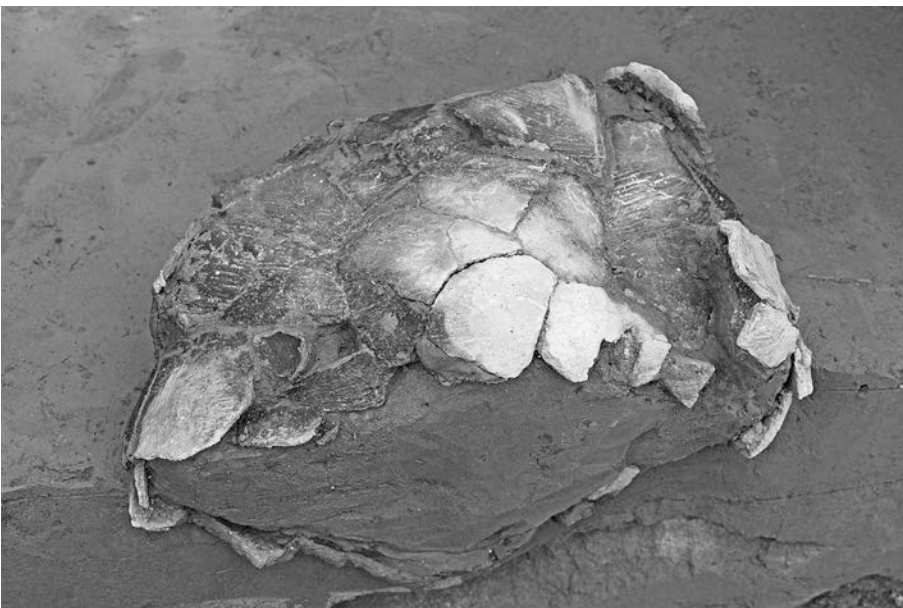




(1) 下層包含層遺物出土状況
(西から)



(2) 下層包含層遺物出土状況
(西から)



(3) 下層包含層遺物出土状況
(西から)



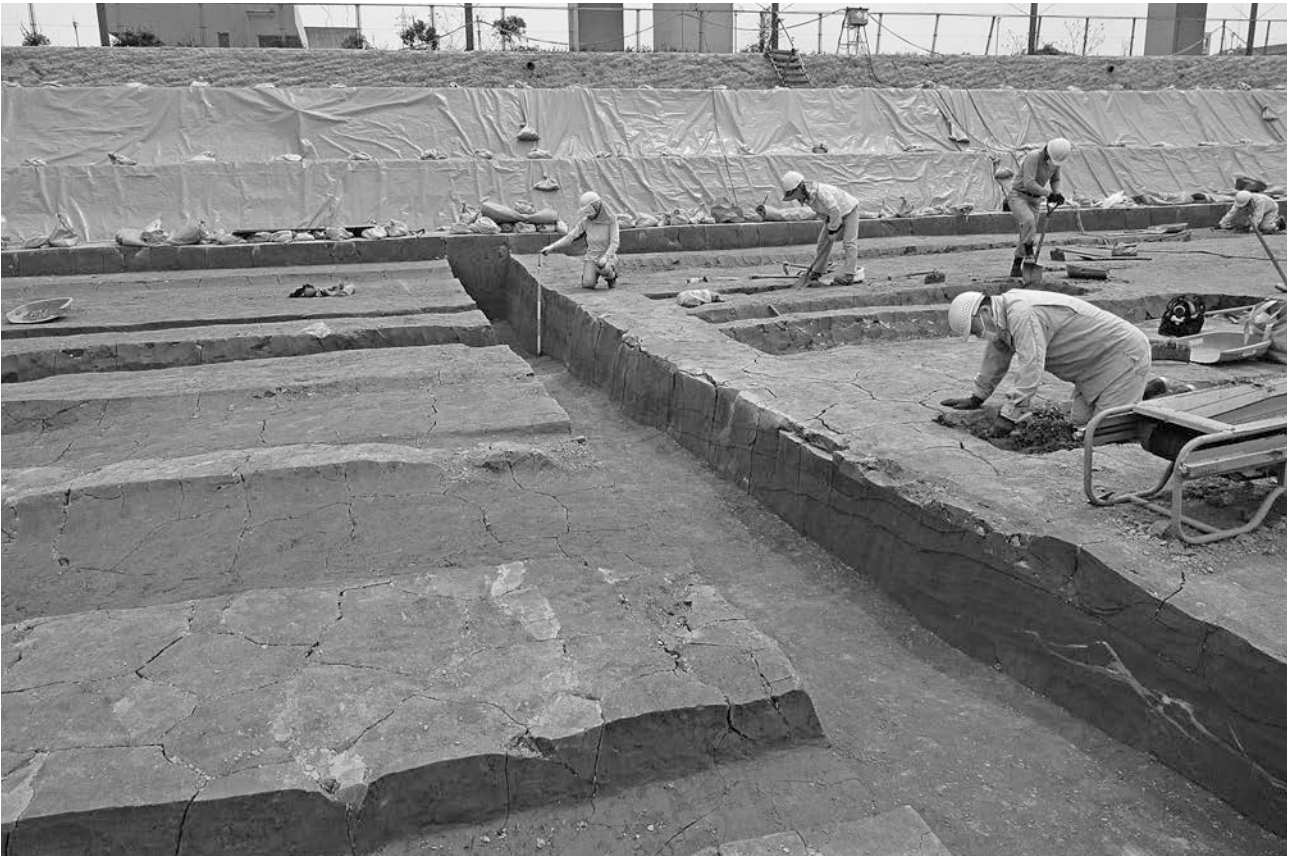
(1) 東壁堆積状況(北西から)



(2) 西壁堆積状況(東から)



(1) 断ち割り①堆積状況(北東から)



(2) 断ち割り①堆積状況(北東から)



(1) 断ち割り②堆積状況(北東から)



(2) 断ち割り②堆積状況(南東から)



(1) 断ち割り③堆積状況
(北西から)



(2) 断ち割り③堆積状況
(南西から)



(3) 島畑と素掘り溝群近景
(北から)



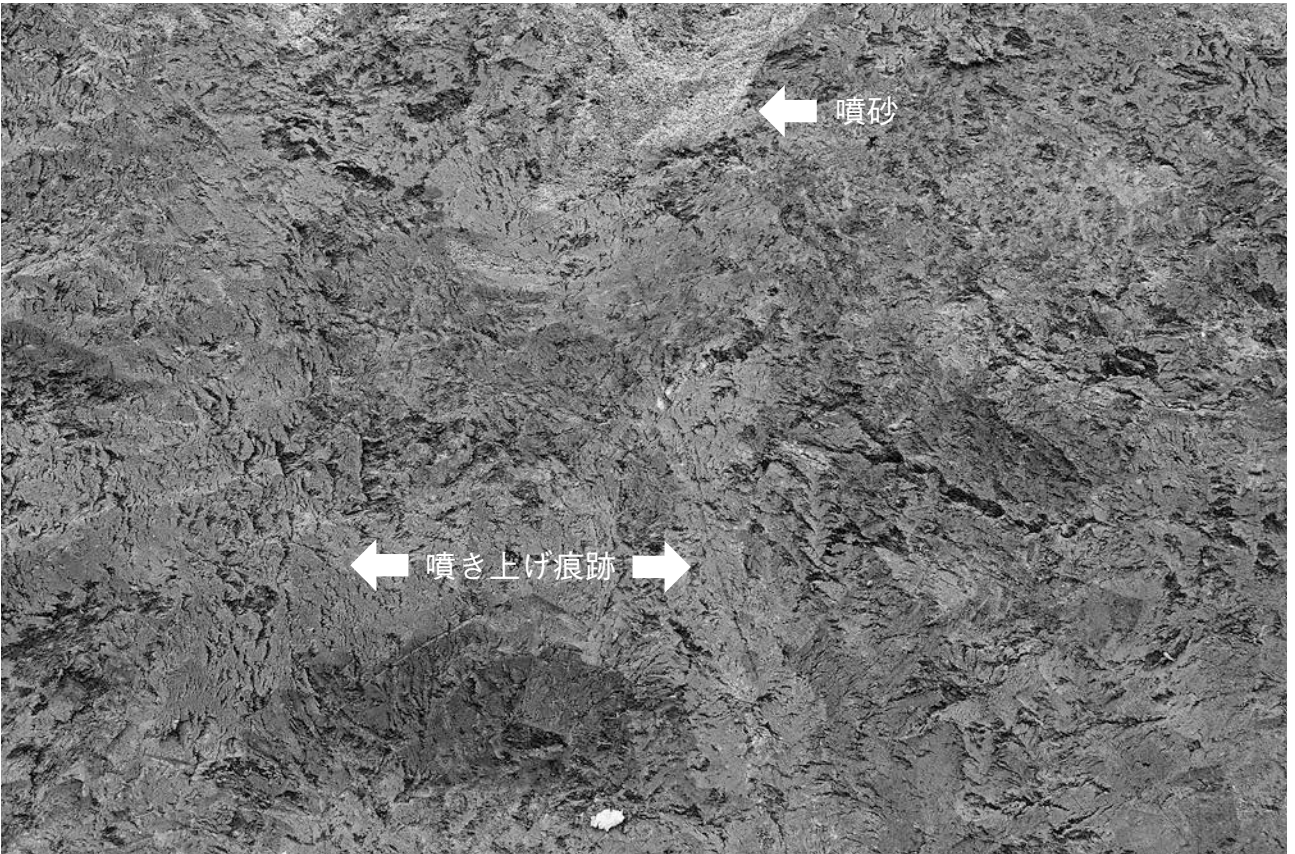
(1)素掘り溝群(第4面)近景(西から)



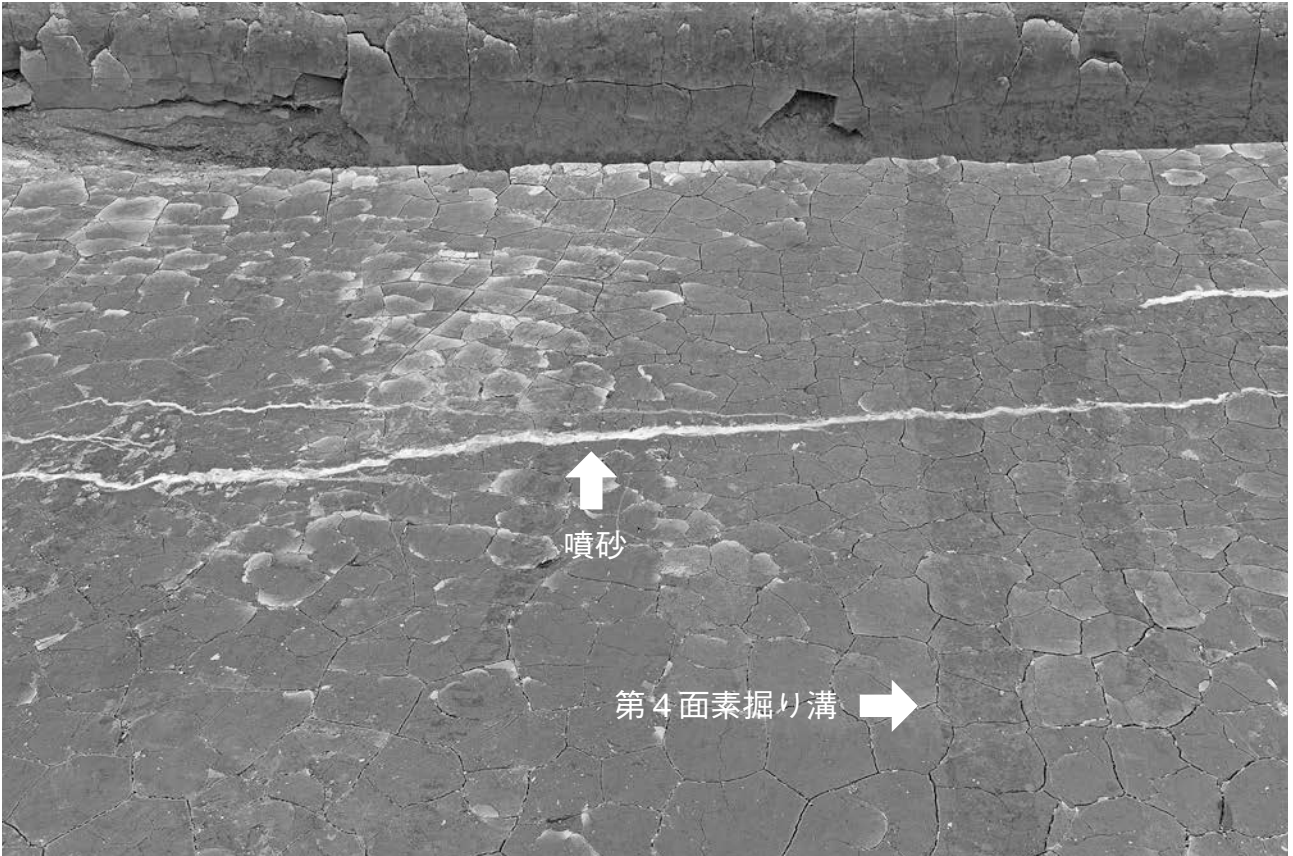
(2)素掘り溝群(第4面)近景(西から)



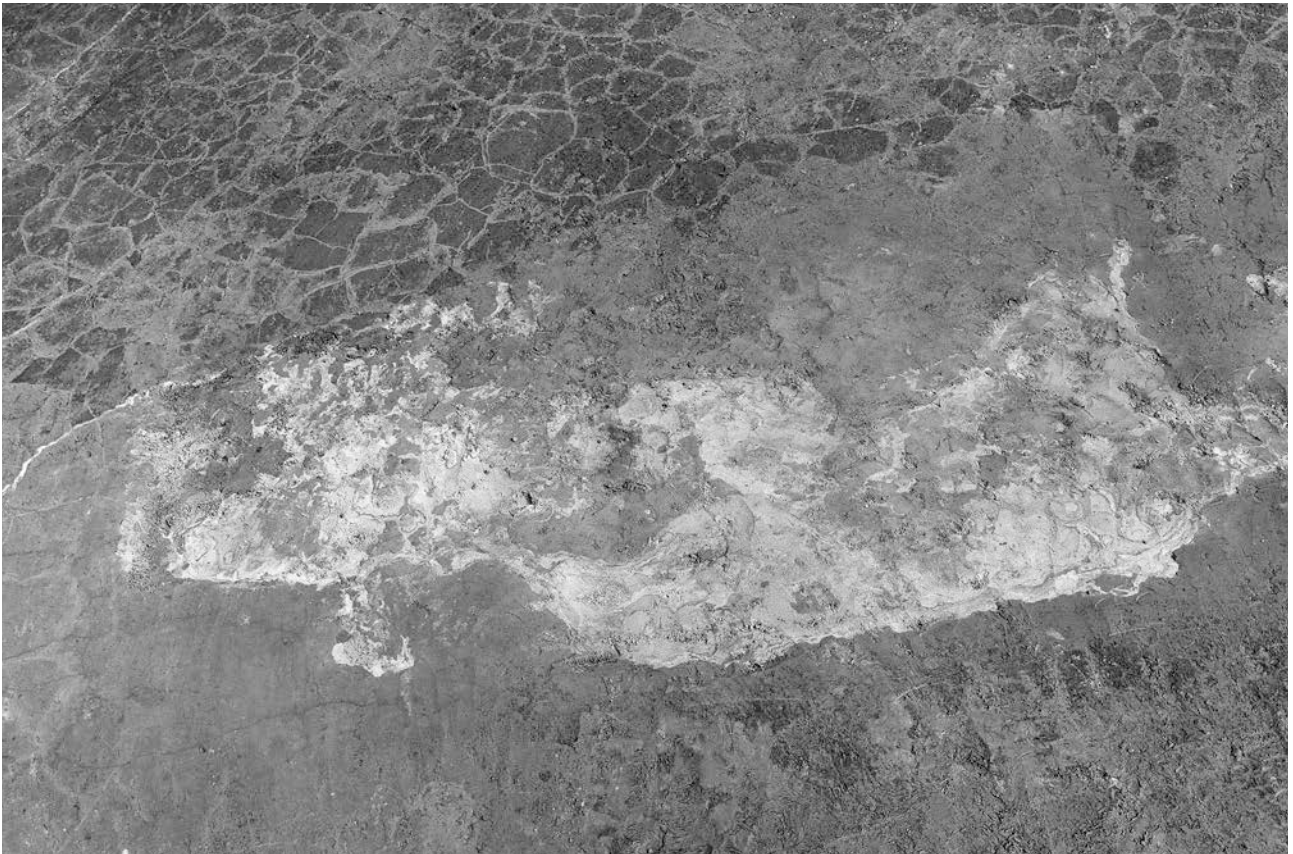
(1) 島畑 9 上面噴砂検出状況(北から)



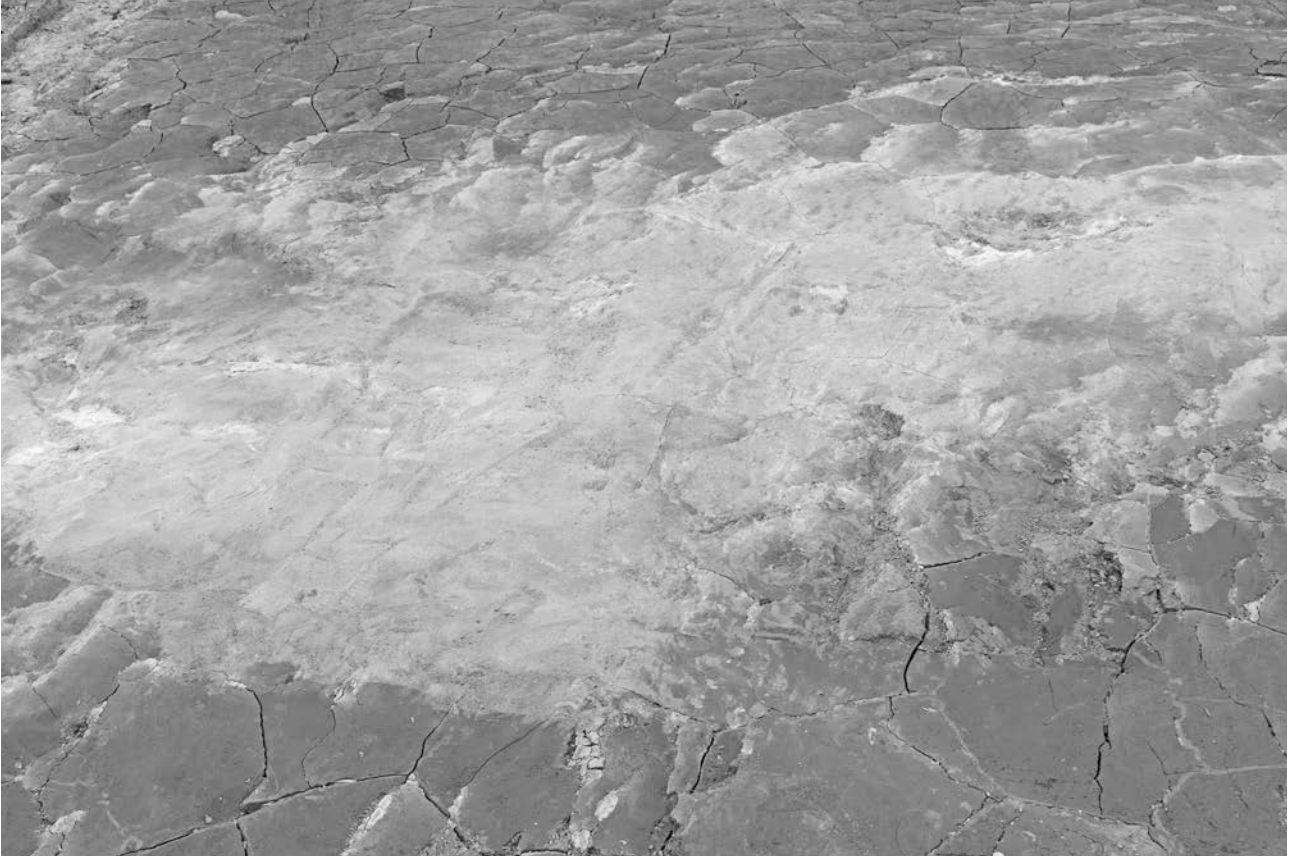
(2) 西壁で検出した液状化現象(東から)



(1) 第 4 面噴砂検出状況 (北から)



(2) 噴砂 2 近景 (南から)



(1) 噴砂 4 近景 (南から)



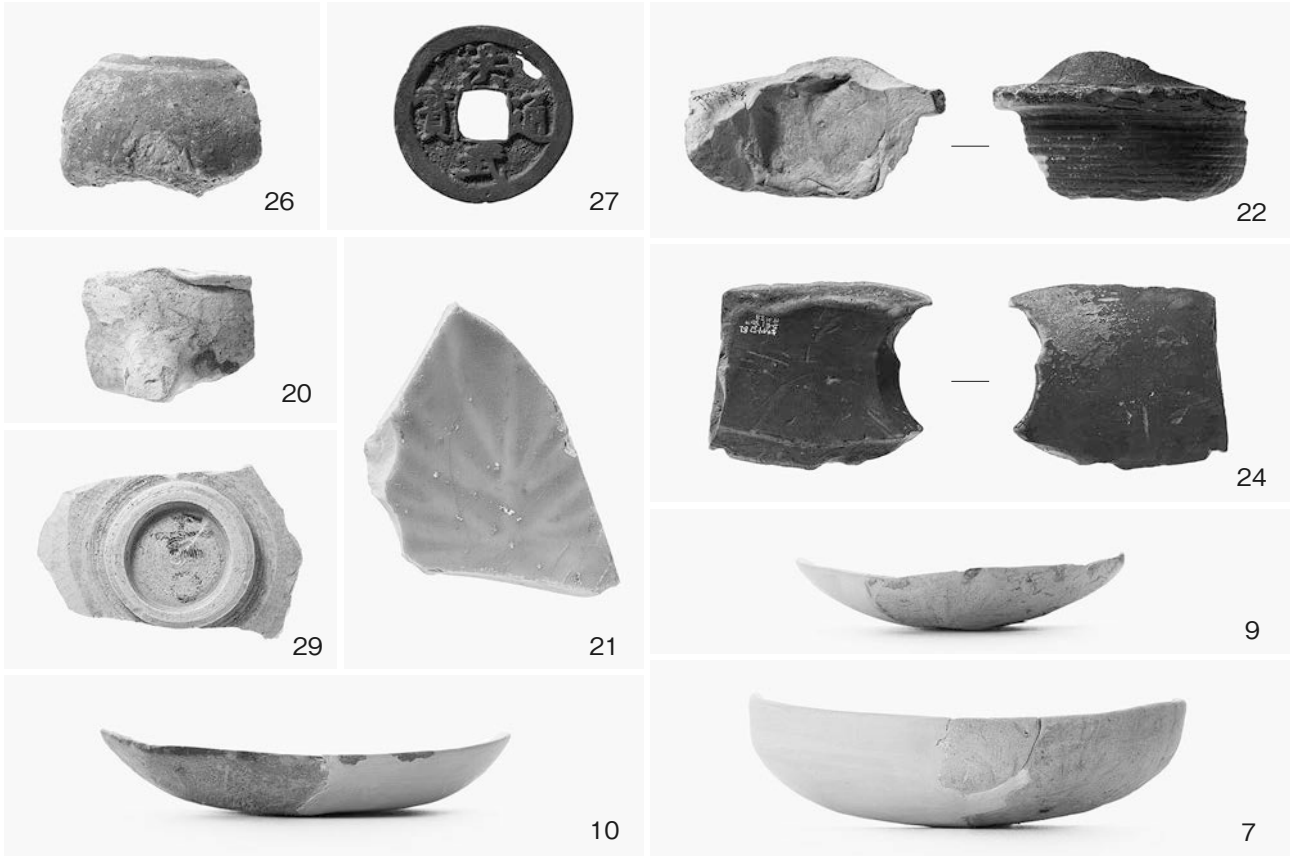
(2) 噴砂 1 近景 (東から)



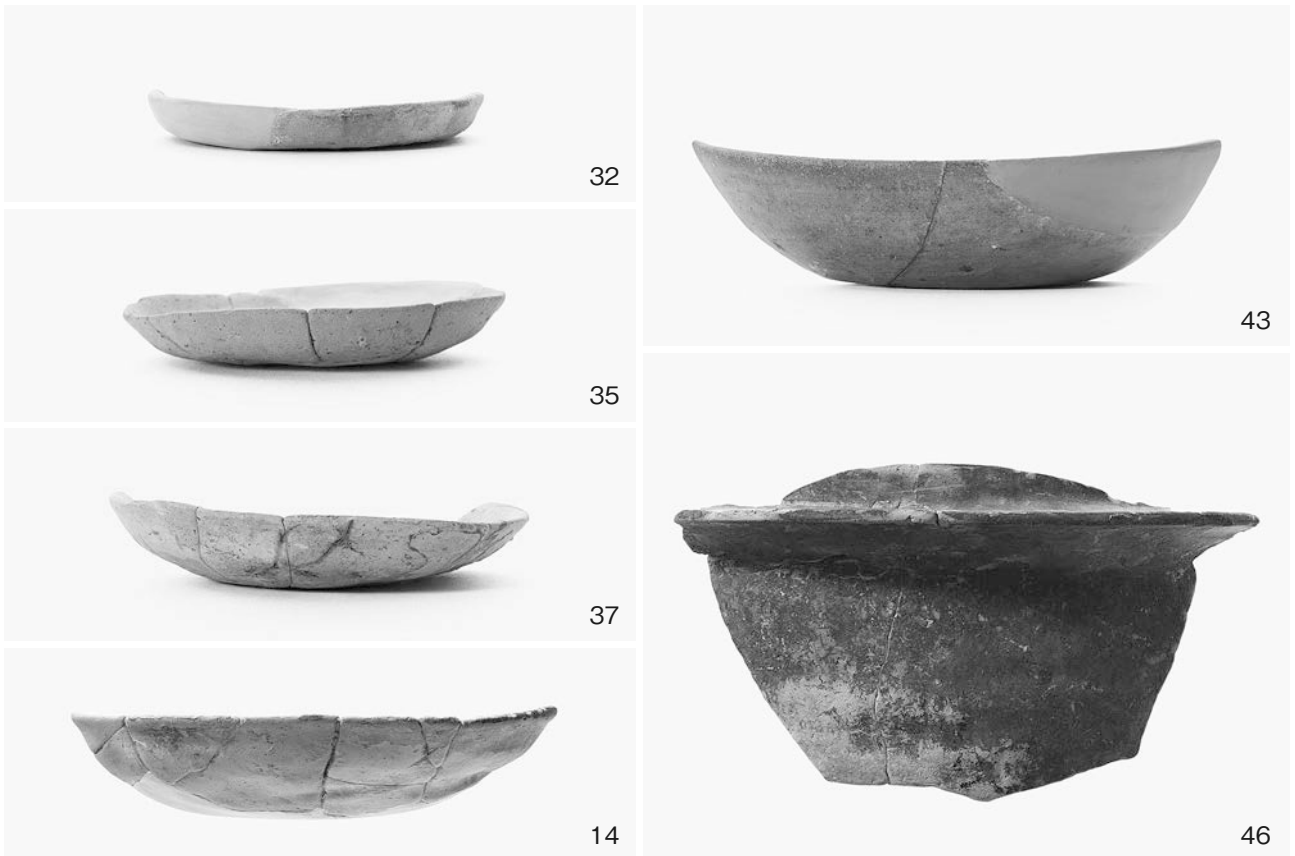
(1) 剥ぎ取り状況(南東から)



(2) AMS分析に伴うサンプル採取(南東から)



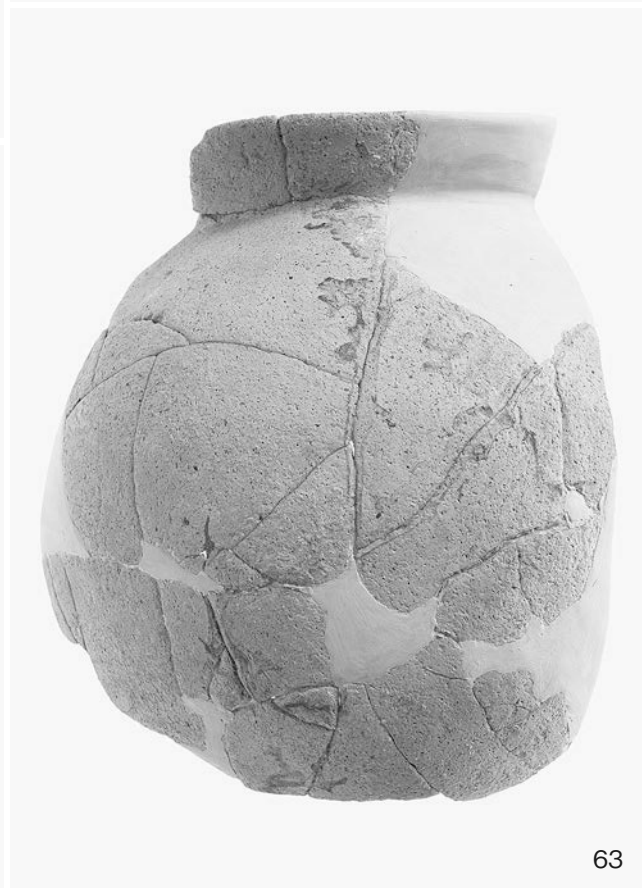
(1) 出土遺物 1 (島畑関係・室町時代遺物包含層)



(2) 出土遺物 2 (鎌倉時代～室町時代遺構面)



出土遺物 3 (古墳時代初頭遺物包含層)



出土遺物 4 (古墳時代初頭遺物包含層)



(1) 調査地全景(北西から)



(2) 調査地全景(南東から)



(3) 南トレンチ調査地全景(北から)



(1) 北トレンチ調査地全景
(南東から)



(2) 北トレンチ調査地全景
(北西から)



(3) 北トレンチ断ち割り状況
(南東から)

報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第179冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第179冊
編著者名	岡崎研一・岩松 保・高野陽子
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2020年3月27日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
きづがわかしょういせきだいき32じ 木津川河床遺跡第32次	きょうとふやわたやわたこもいけちない 京都府八幡市 八幡菰池地内	262102	1193 1194	34° 53' 26"	135° 42' 37"	20181201 ～ 20190227 20190408 ～ 20190730	3,000	浄化施設 建設工事
ちゃつぼくらあと(そうけん) 茶壺蔵跡(創建)	きょうとふうじしうじさとじりちない 京都府宇治市宇 治里尻地内	262048	163	34° 53' 36"	135° 48' 14"	20191106 ～ 20191210	300	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木津川河床遺跡第32次	集落	弥生～江戸	竪穴建物・溝・土坑・柱穴・鳥畑	弥生土器・土師器・須恵器・明銭・陶磁器	
茶壺蔵跡(創建)	集落	江戸	無	陶器・磁器・土師器・須恵器・瓦	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	要約
木津川河床遺跡第32次	中世の耕作地2面と古代の耕作地1面を検出し、平安時代から室町時代におもに耕作地として利用されたことが判明した。また、中世後期から近世までの4回の大規模な地震痕跡を確認し、考古学的な成果だけでなく、防災の視点から過去の地震の発生や規模の状況を検証するうえで、貴重な資料を得ることができた。
茶壺蔵跡(創建)	茶壺蔵跡(創建)は、江戸幕府に宇治茶を献上するために元禄7(1694)年に建設され、延享2(1745)年に宇治川の氾濫により流失した跡地と推定されている。今回の調査では、近現代の堆積層の下で18世紀代の土器片を含む氾濫に伴う砂礫層を検出したのみで、茶壺蔵の遺構はすべて削平を受けたものと判断される。

京都府遺跡調査報告集 第179冊

令和2年3月27日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141